

瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業
に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告

—大萩遺跡—
(1)

1 9 7 4

宮崎県教育委員会

序

近年、県内各地での開発事業が増加し、これに伴なって偶然発見される遺跡については埋蔵文化財保護対策の一つとして、その都度、緊急に発掘調査し、記録保存の措置をとっております。

本年度は、特殊農地保全整備事業の行なわれる西諸県郡野尻町瀬戸ノ口地区において、各種の埋蔵文化財が包含されていることを予測して、文化庁とも協議のうえ、昭和48年度から三ヶ年の整備事業と併せて事前に発掘調査することとし、昭和49年10月22日から約一ヶ月の期間をかけて、調査を実施いたしました。

その成果はこの調査報告にまとめておりますとおり、土墳墓群、地下式古墳群、住居址等、多くの遺構が発見されております。

調査にあたりましては、野尻町教育委員会、地元耕地組合をはじめ、多くの方々にご協力をいただき、調査が円滑に運営されたことに対し、厚くお礼申し上げます。

また連日ご熱心に現地の調査にご足労いただいた調査員の各位に深く謝意を表するものであります。

この報告書を、社会教育・学校教育ならびに文化財愛護思想の高揚のためにご活用いただければ幸甚に存じます。

昭和50年3月

宮崎県教育委員会

教育長 穂積正晴

例　　言

1. 本調査報告書は、県西諸県農林振興局の瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴なう事前緊急調査として宮崎県教育委員会が昭和49年10月22日～11月12日、11月18、19日（以上D・E地区）、12月11日～15日、12月25日、昭和50年1月9日（以上F地区）に実施した西諸県郡野尻町大字三ヶ野山大萩遺跡の調査報告書である。
2. 本稿の中で地下式古墳と地下式横穴という名称が使用されているが、これは両者とも同じ遺構を指したものであり、各担当者の使用名称に従った。
3. 本稿の執筆は、その発掘にあたった調査員があたり、その報告文の末尾にそれぞれの文責名を記した。
写真撮影及び実測、製図は主に田中茂、茂山謙の両調査員と文化課主事岩永哲夫が担当した。
4. 本調査にあたっての調査計画は、県教育委員会文化課課長補佐寺原俊文、同主事岩永哲夫があたり、報告書の編集発行についても同職員が中心となり、各執筆者が協力した。

目 次

序 章

1 発掘調査の実機と概況	(1)
2 遺跡の位置と環境	(2)

第 1 章

土壙墓群	(5)
1 土 墓	(5)
2 弥生式土器群	(10)

第 2 章

住居址	(29)
1 住居址	(29)
2 遺 物	(31)
3 植の樹種の鑑定	(32)

第 3 章

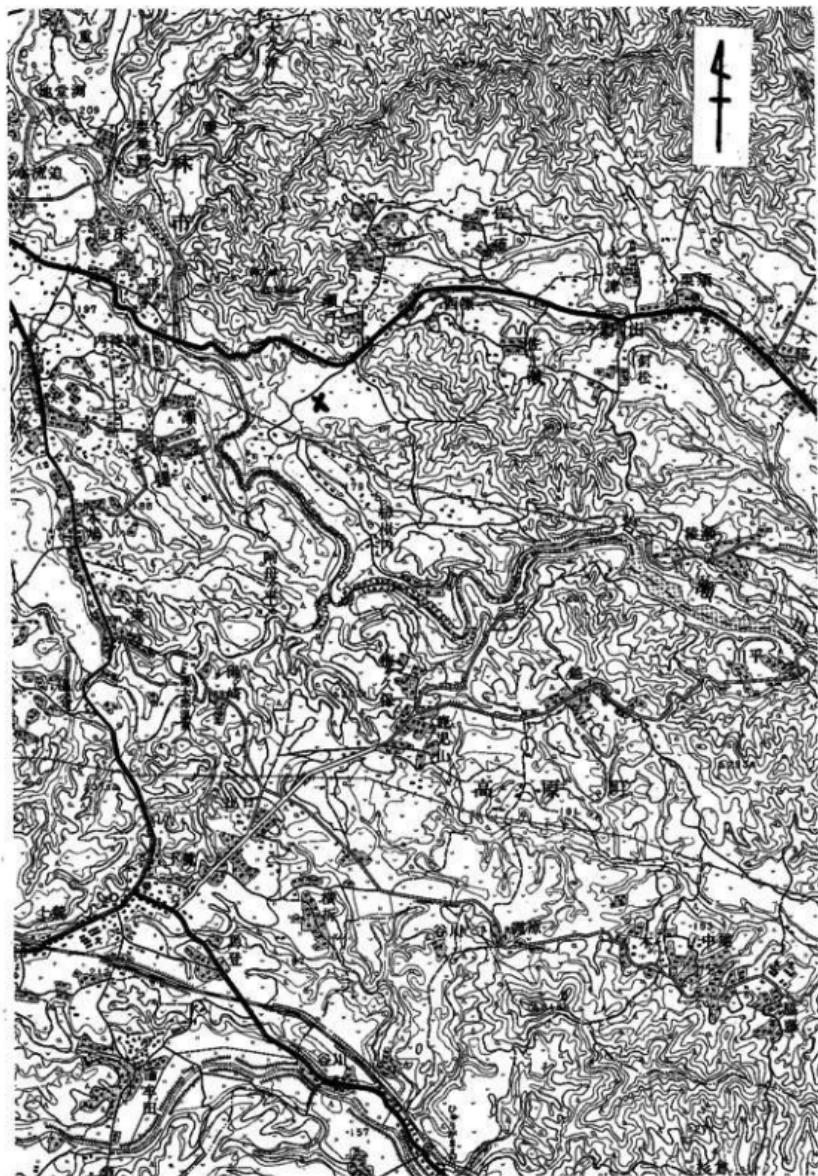
地下式古墳群	(37)
1 地下式古墳	(37)
2 遺 物	(46)
3 土 墓	(48)

第 4 章

人骨とその埋葬方法	(55)
1 人 骨	(55)
2 人骨の埋葬方法について	(63)

第 5 章

結 語	(57)
-----------	------



第1図 大寺遺跡付近地形図（×点遺跡）

序章 1. 発掘調査の契機と概況

昭和48年10月の下旬から西諸県郡野尻町三ヶ野山地区で、農業構造改善事業がはじまったが、農地整備工事のためのブルドーザーによる掘削を主体としていた。この地区にはすでに県指定史跡となっていた大蔵古墳が1基存在したため、古墳の保存に影響しないよう町当局には事前に申し入れておいたのである。ところが、この掘削工事のブルドーザーによって地下式横穴が発見され、48年度の終りには21基を数えることとなった。この年度には、県教育委員会としてこれを予測することはできず、従って予算化もしていなかったところにこの地下式横穴群の発見である。1基の調査を2日位で緊急に調査し、地元からの発見の報にまたでかけるといったまさに文字どおりの緊急調査に終らざるを得なかつたのである。

この土地改良事業計画を県西諸県農林振興局に問い合わせてみたら、三ヶ年継続事業で範囲もまだ拡げてゆくという返答がきた。三ヶ野山の台地が地下式横穴群の群集地域であることは昭和48年度の発見によって、容易に推測されることであり、「これは大変なことになる」というが県文化課にとっての危惧となった。昭和49年2月、文化庁文化財保護部で恒例の新年度国庫補助事業ヒアリングがあったが、その席で三ヶ野山地区の地下式横穴群の情況を説明して了解を得、昭和49年度の土地改良区域を埋蔵文化財緊急発掘調査で、事前に国庫補助事業によって宮崎県教育委員会が実施するということになった。

通常、人の目にふれ得ない状態の遺跡・遺物を埋蔵文化財と呼んでいるが、その埋蔵文化財のなかでも地表面になんらの痕跡をとどめない地下式横穴となると、皆目見当がつかないというのが実情である。幸い、宮崎県では47年に九州縦貫自動車道の事前調査で地下式横穴群の発掘調査を組織的にした経験があるので、参加した調査員各位もおおよその見当をつけて、昭和49年10月22日に調査を開始して約1ヶ月間にわたり、この調査を続行した。

調査の状況については各調査員の報告で明らかのように、この三ヶ野山地区は考古学的に極めて重要な意義をもつ地域と考えられる。さらに50年度も引き続いて調査をすすめてゆく予定である。

なお、発掘調査員は下記の通りであるが、F地区調査の際は、多忙にもかかわらず長崎大学医学部解剖学教室の坂田邦洋助手の自主的参加協力があった。また、住居址の樹種鑑定は宮崎大学農学部大塚誠講師にお願いした。

調査員	石川 恒太郎	(宮崎県文化財専門委員)
"	日高 正晴	(")
"	田中 茂	(宮崎県総合博物館主任)
"	茂山 譲	(宮崎県総合博物館主事)
"	岩永 哲夫	(宮崎県教育委員会文化課主事)

(寺原俊文)

2. 遺跡の位置と環境

大荻は、西諸県郡野尻町大字三ヶ野山に属し、小林市に近い位置にある。遺跡は宮崎市から小林市に通じる国道268号線沿いの国鉄バス「瀬戸口」停留所から若干小林市寄りに所在するドライブインの東側から柿川内に連絡する町道の両側に開けた東西1,000米、南北550米の広大な畠地である。標高約195米～201米、南西を流れる大淀川の支流岩瀬川からの比高約35米～45米の台地でシラスを基盤としている。ここから南西の方向には小林盆地が広がりその後方に高千穂峰、夷守岳等の霧島連山が一望のうちに望まれ全く景勝の地といえる。

当地は、今こそすっかり畠地になっているが、明治の前期頃は原野であったとみえ、日向地誌に「原野 大荻ノ平 木村ノ西南岩瀬川ノ北涯ニアリ東西九十町南北六七町地勢高低溝野草茅ヲ生官有ニ属ス」とある。また、地元民は「牧ノ平」ともいっておりかつては牧場として使用されていたという。

日本書紀景行天皇十八年の条を見ると『十八年の春三月に、天皇、京に向さむとして、筑紫國を巡狩す。始めて夷守に到る。是の時に、石瀬河の邊に、人衆聚集へり。是に、天皇遙に望りて、左右に詔して曰はく「其の集へるは何人ぞ。若し賊か」とのたまふ。乃ち兄夷守、弟夷守、二人を遣して撫せたまふ。乃ち弟夷守、還り来て踏して曰さく、「諸縣君泉媛、大御食を獻らむとするに依りて、其の族會へり」とまうす。』とある。いわゆる景行天皇の熊襲征伐記述の一部である。「石瀬河」は、現在の岩瀬川で台地の南西側を流れる大淀川の支流でこの川が野尻町と小林市との境になっている。夷守は現在の小林市といわれ、延喜式卷二十八兵部省の部にも「夷守」の駅があり、その他現在市内には、大字細野字夷守、夷守神社、夷守岳等の名がみえる。また、延喜式には、「野後」の駅名もあるがこれは今日の野尻であろう。夷守の駅が小林市大字細野字夷守だとすれば「野後」の駅は国府に近い亜那駅（今の東諸県郡綾町）との距離的関係からこの大荻よりもずっと北東、現在の野尻町役場等がある東麓付近と思われ



る。しかし、夷守に通じる駅路は、この大萩の近くを通っていたことはまずまちがいなさそうである。

延喜式卷二十八兵部省の部には、諸国の馬牛牧の記載もあり、日向国の諸牧のうち「野波野馬牧」、「野波野牛牧」の名が見える。これは「野後野」の誤写であろうといわれている。もしそうであれば、この大萩の地も地元の人達が「牧ノ平」と呼んでいることから牧地の有力な候補地といえそうである。

この地には、もともと県指定の円墳が1基所在していたが、地下式横穴が確認されたのは昭和34年の調査からである。しかし、本格的な群集地であることがわかったのは、遺物整理の都合で調査報告が遅れているが、昭和48年の秋から翌49年の2月にかけて台地の中を横切る町道の北西側で第一次の圃場整備が行なわれ緊急調査により21基の地下式横穴を発見したことによる。この整備のとき、ブルドーザーが指定古墳の墳頂を一部削取したところ、地下式横穴の竪穴を破壊、羨門部の閉塞石が露出した。その結果、円墳の下に巨大な玄室が設けられていることがわかり5体の人骨と多量の副葬品を調査している。これは封土を有する地下式横穴の実例の一つとして画期的な発見であったといえる。また、地表に近い黒色土層から若干であるが免田式土器片も採集され、この弥生終末期の土器と地下式横穴との関係が問題となり今後に残された地域の調査に期待がもたれていた。

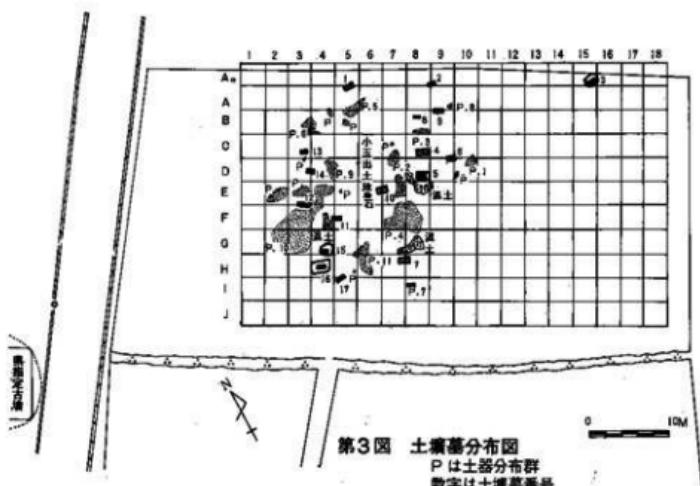
今回の調査は、第二次圃場整備が計画されている町道東側の3か所でそれぞれをD.E.F区と区割を行ない実施した。D.F区は、前記の指定古墳から町道を越えた東側で町道のすぐ上をD区とし、かつて昭和34年地下式横穴が発見された地点から東側にかけての一帯をF区とした。この地区は道路側から東に向ってゆるやかな上り勾配になっている。その差は1メートル～2メートルである。D地区では弥生終末期の土器群とそれに伴なう弥生式土器集積群、F地区では地下式横穴群を発見した。E地区は、指定古墳から南方約150メートルの地点にあたり弥生終末期の住居址を調査した。

（田中 茂）

（註）平部崎南「日向地誌」諸県郡野尻郷三、野山村の項1239ページ



大萩遺跡全景 中央右寄りが指定古墳 テント付近が発掘現場



第1章 土 墓 群

調査の経過

10月23日、県指定古墳の東側の畠地に弥生土器片の散布が見られたので、遺構の存在を予測して、ブルドーザーにより遺構の発見に努めた。まず、長方形の畠地の西側に2本の調査溝を掘ったが、何等の遺構も確認できなかったので、北側に調査溝を設けた。その結果、3ヶ所に土墳墓らしき遺構を確認した。

翌24日も引続きブルドーザーによる表土剥ぎを行ない、9ヶ所に土器の集積遺構を確認した。ブルドーザーによる掘削はあくまでも表土の剥離に重点を置いて実施した。表土剥離はほぼ35~40cmまで行ない、土器集積遺構は地表下40cmで現われた。

この畠地を3m区画にグリッドを組み、北側からA.B.C…トレンチ、西側から1.2.3…区とした。

D地区の本調査は、10月25日から11月12日まで実施した。

(岩永 哲夫)

1 土 墓 群

第1号 土 墓 (第4図)

A₀~Aトレンチの5区にあり、長径がほぼ東西にあるが、南に11度傾いている。床面で長径146cm、短径82cmの隅丸方形である。上端では長径145cm、短径77cmになるので、底に行くに従がって広がっている。深さは、当初この地区的上端をブルドーザーで削っているため、当時よりは若干浅くなっていると思われるが、現状では50cmである。遺物は全然発見されなかった。

第2号 土 墓 (第5図)

第1号より東南東へ約10m離れたA₀トレンチの8~9区にあり、長径はほとんど東西に方位し、3度内外南に傾いている程度である。長径135cm、短径60cmの長楕円形を呈している。深さは40cmほどであるが、多分に削り過ぎが考えられる。

この土壙の断面を観察すると、上層から耕土(混石)、黒色土層、黒褐色土層、(以上いずれも20cm内外の厚さ)、赤ホヤ層と続き、土壙は赤ホヤ層中に造られている。

遺物はないが、土壙内の東部に20cm×20cm、中央寄りに10cm×15cmの広さの朱の痕跡が認められ、頭を東にして埋葬したのではないかと考えられる。

第3号 土 墓 (第6図)

第2号より東南東へ約20m離れたA₀トレンチの15区にあり、長径はちょうど東西に方位している。

この土壙は、二段に掘り込み、上段は長径195cm、短径145cm、深さ20~30cmである。内部は、底部で長径125cm、短径65cm、上段から深さ約80cmで長楕円形をなし、東西面は底の方へ行くに従がって小さくなるが、南北面はほとんど直下に掘り込んでいる。遺物は何もなかった。

(岩永 哲夫)

第4号 土 墓 (第7図)

第1号より第3号に亘る3基の土壙墓はブルドーザーでローム層までの表土を排除したとき発見され

たので、上部が削られたわけである。これは初めこの台地は地下式古墳の群在する所であるのと、ここ
の南方のE地区で弥生時代の堅穴住居址が発見されたことから、そのような遺跡があるものと考えて、
表土を排除したのであるが、土器のある所が多いことからブルトーザーを止めて人力をもって土器のある
個所を掘ると、1ヶ所に大形の土器が数個または10数個、重ねるようにしてある場所を数多く発見し
た。そしてそれを掘ると、これらの土器の下には土壙があって、これらの土器群は土壙の上に置かれて
おり、土壙墓の上部構造をなすものであることが知られたのである。

第4号はCトレントの8区にあり、第2号の西南方8mのところにあって、東西177cm、南北は西端で90
cm、東端で100cmの長方形で、墳の中軸線は東西の方向より約22度南に傾いていた。墳の上には写真、お
よび図版に見られるように、この地方で免田式と呼ばれる長頸壺の重弧文土器1個、小形鉢1個、高杯
4個、壺形土器2個の合計8個の土器が重ねるように置かれていた。土器を取り除いて、その下の黒色
の土を注意しつつ掘ると、かなり高いところから碧色の玻璃の小玉が少しづつ見出されはじめたが、玉は
墳の中央から東部にかけて墳の底まで夥しく出土したので、墳内の土は陽にかわかして鏡にかけて
玉の逸失を防いだ。こうしてこの第4号土壙内から発掘した小玉は総計580個であった。それで小玉の孔
に糸を通して繋げば長さ約2.30mで、直径77cmの輪となるから、これを首に掛ければ、1重では地に通
うから、3重か4重に巻いたものと思われる。地表から墳底までの深さは60cmであるが、地表から約30cm
の深さの所に黄色のローム層があり、墳はその下になお30cm入っているが、上の黒土層のところではわ
からなかったが、ローム層の中に入っている墳の岸は、幅約3cmが垂直に孔状となっていて、この部分
には植物の腐蝕土と思われる褐色の土があり、また細い草の根などが入って穴であることが知られた。
これはここに厚さ3cm内外の木棺があったことを示すものである。さきに大阪湾の沿岸で、土壙に木片
が遺存したことから、土壙墓は単に土を掘って、その穴に人を葬ったのではなく、屍体は木棺に入れて
葬ったことが確認されたが、われわれはこの遺跡ではっきりと木棺があったことを知ることができた。

從来土壙墓は庶民の墓で土を掘って、その中に死者を葬っているので、学術上あまり重要な遺跡では
ないというような説が行われてきたが、われわれは土壙墓というものは単に墳を掘っているだけではなく、
木棺に屍体を入れて、土を掘ってこれを埋め、さらにその上に土器を載せていたものであることを知った。
そしてここに葬られている人も、玻璃の小玉580個をもって身を飾っていたのであるから、庶人
というより相当に高い身分の人であったことを知るのである。

この土壙から見出された土器は前記のごとく8個であったが、その詳細については後の土器群の部
に譲る。

(石川 恒太郎)

副葬品

小玉 (第8圖一(1))

4号土壙墓に副葬されていた小玉の総数は580個であった。玉の形は、一般に径より厚みの小さい円板
状のものが多いが、中に縦に比し綫長の管玉状のものや、不整形球状のものもみられる。大きいもので径
5mm、厚4mm、孔径1mm、中間のもので径3.6mm、厚3.6mm、孔径1mm、小形のもので径3.4mm、厚1.2mm
孔径0.6mm、最小のもので径2.5mm、厚1.2mmを計測する。

紺青色を呈する15個をのぞいて、すべて水色である。

(茂山 譲)

5号土壙墓（第9図）

4号土壙墓の南側3mの位置にある。土壙は、E40°Sを長軸とした東西方向に、掘り込み面で長さ180cm、幅120cm、30cm掘り下げた所で、長さ125cm、幅75cm、床面で長さ115cm、幅65cmの長方形、段状に掘り込まれていた。

掘り込みは、地表下65cmにある第3層の黒褐色粘質土層上面から見られ、第4層のオレンジ層を床面としていた。床面は、ほど平坦に掘られ、地表から120cm、第3層上面からは55cmの深さにある。側壁も極端な傾斜ではなく、ほぼ垂直な掘り込みとなっていた。

掘り込みの検出された第3層上面には、第4層オレンジ層の黄褐色土の混土が土壙の南側に幅120cmの半円状に、10cmほどの厚さで堆積していた。5号土壙は、第4層上面を床面としており、4層への掘り込みは見られない。従って、3層上面の堆積土層は、5号土壙の掘り上げ土ではなく、他所から運ばれたものであり、5号土壙構築に際しての盛土と考えられる。

副葬品としては、細く精製された貝輪断片が、床面東端から45cm、南壁から13cmの所に検出された。検出されたときすでに半分以上が欠損しており、残片も触れれば粉状になる有様であった。貝輪以外の副葬品は検出されなかった。

5号土壙墓の特性は、4号土壙墓と同様に、土壙直上に供獻土器の集積があったことである。

集積されていた土器は、重弧文を描いた長頸壺形土器2個、器合形土器1個、二重口縁をもつ壺形土器1個、無文の大形の長頸壺1個、高环形土器1個、鉢形土器2個である。これ等の土器が、土壙の直上、第3層面からは10~15cm上の第2層漆黒土層（地表下30~60cm）内に、ちょうど、長さ70cm、幅40cm深さ30cmほどの穴を設けて、その中に詰め込んだように折り重っていた。

大蔵の各土壙墓の周辺には、埋葬儀礼に関連して破碎遺棄されたとみられる多量の土器が散乱している。それ等の土器が、いずれも原形をとどめないまでに破碎されているのに対し、5号土壙墓直上の集積土器は、もちろん割られたり、打ち欠かれたりしているが、ある程度原形をとどめながら集積されていたわけである。しかも、ひとつまとまりをなして、土壙直上に置かれたことに、これ等の土器が、5号土壙墓の供獻土器として、特別な取り扱いをされたことが考えられるのである。

この供獻土器の集積位置と、土壙内の土壙には明瞭な土層の違いは見られず、同質の黒色土であったことから、土壙には、集積土器を被った20~30cmの盛土があったのではないかと考えられるが、土層からの積極的な確証は得られなかった。

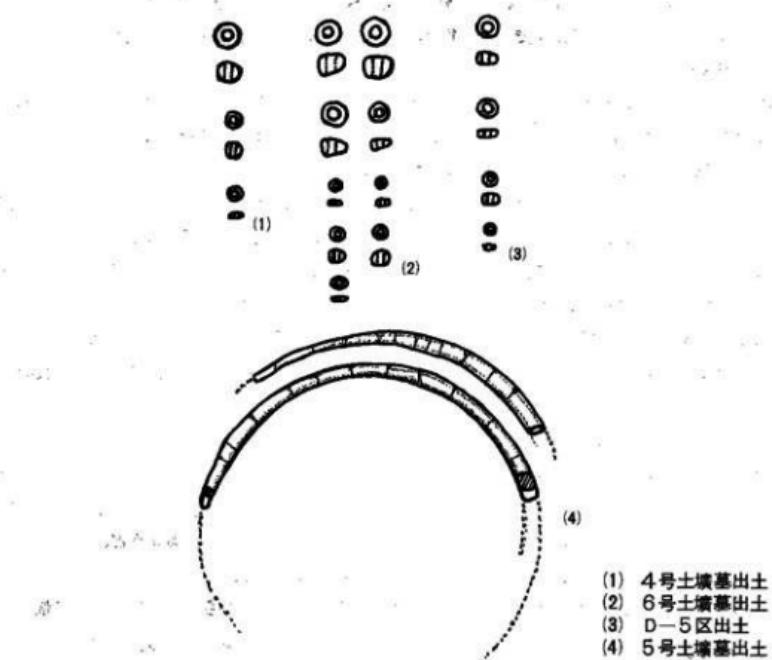
副葬品

貝 繩（第8図-(4)）

丸みのある2mm角の細い精製品である。損傷がひどく、土壙内すでに半分以上が欠損しており、環であったか、或は半環状の貝輪であったか断定できない。個体数は3乃至4個分と見られる。推定径6~7cmの貝輪である。

(茂山 譲)

第8図 小玉・貝輪実測図



第6号土壙墓（第10図）

第6号は第4号の東南約4m、第5号の東北約4mの所にあり、東西の長さ130cm、南北の巾は西端で80cm、東端で65cmの長方形をなし、深さは東端で地表から50cm、西端で45cm、漆黒色土層からの深さは東端で40cm、西端で30cmであった。そして中央より東寄りの中心地帯から第4号墓から出たような玻璃製小玉60個と同様のやや大きい丸玉1個が出土した。なおこの土壙の中軸線は東西の方位より約17度南に傾いていた。

またこの土壙墓の上には第4号のような土器はなかったが、土壙の東南方2mのところに、土器の破片が多く散乱していたから、この土壙の上にあった土器が壊されたものと思われる。（石川恒太郎）

副葬品

小玉（第8図-②）

ガラス製の小玉である。水色のもの54個、紺青色6個、緑色を呈するもの1個、総数61個を数える。大きさは、径4mm内外のものであるが、大きいものには、径5mm、厚3.8mm、孔径1.9mmのものがあり、最小の玉は、径1.5mm、厚1.0mm、穿孔径0.9mmである。形は大小をとわず不定形で、球状に近いもの、円板状のもの、管状のものなどさまざまである。個数からは、腕飾りとおもわれる。これと個数のうえ

でも同類とみられる小玉が、D-5区からも検出されている。

D-5 区出土の小玉 (第8図-3)

D-5区の第2層漆黒土層から第3層の黒褐色粘質土層直上にかけて検出されたものである。出土地点には、土壤らしい遺構は何も確認できなかった。

小玉はガラス製である。小玉の大きさは、大きいもので径4.5mm、厚3.6mm、小さいもので径2mm、厚0.8mmである。総数59個が出土している。紺青色の14個をのぞいて、すべて水色の小玉である。紺青色の小玉は、いずれも径2mm以下のものである。

(茂山 譲)

第7号土壙墓 (第11図)

これは第5号の東南約11mのところHトレンチの7区と8区に跨がってあった。長さ東西に165cm、巾85cmの長方形でその東西の中軸線は東西の方向より約25度北に傾いていた。漆黒土層よりの深さは50cmであったが、遺物は何も発見することができなかった。

第8号土壙墓 (第12図)

この土壤は第4号の北方約4mのところ、Bトレンチの8区にあった。極めて小形のもので東西の長さ95cm、巾40cmの長方形で地表からの深さは55cm、その中軸線は東西の方向より32度南に傾いていた。この土壤墓はその大きさから見て小児用のものと思われるが、遺物は何もなかった。

第9号土壙墓 (第13図)

これは第8号の東方約2mのところにありAトレンチとBトレンチに跨がり9区に在った。壙上に土器片があったが、土壤は東西の長さ125cm、巾80cmで、土壤の中軸線はほぼ東西に方位していた。地表からの深さは約80cmであったが、壙内には何らの遺物もなかった。しかしその東方約80cmを距つるところに1塊の土器片があったので、この土器が壙上にあったものと考えられるのである。そしてこの土器は地表より15cm深い所に丸底の底部を置くものであった。

(石川恒太郎)

第10号土壙墓 (第14図)

土壤墓群のはば中央部、ET-7・8区に所在、発掘の折、上部の漆黒土層中から完形に近い器台〔31図(27)〕と若干の土器小片が検出された。土壤は、長方形で長さ160cm、幅100cm、深さ黒褐色土層の上面から50cm、主軸の方向はN78°Wである。この土壤墓は、他の土壤墓とは異なり、各側壁が垂直に掘りこまれていること、しかも長軸側の四隅がそれぞれ10cmから20cm程外方へ嵌入されていることから板材を井桁状に組合わした木棺が用いられていたものと思われる。この位置から西方90cmの所で黒褐色土層の上面から60cmの深さに長さ75cm、幅35cm、厚さ10cmの扁平な自然石が横たわっていた。この石は10号土壤の蓋石でないことは遺構が攪乱されていないことからはっきりしているので別の目的をもっていたものと推定される。例えば、この位置が土壤墓群のはば中央部にあたるので土壤墓の位置を示す標識とか、あるいは、祭祀上のある目的に用いられていたとも考えられる。

第11号土壙墓 (第15図)

11号土壤墓はFT-5・6区内にあり、10号土壤墓の西方5mに位置する。長さ145cm、幅50cm、深さは第1オレンジ層中に25cm切り込んでおり上層の黒褐色土層上面から55cmである。長楕円形状で底は平坦であるが側壁は、船側のように内側へゆるやかに傾斜している。主軸はN62°Wである。土壤墓のすぐ

西侧からは土壤を掘さくした際、排除された赤褐色土混じりの堆積土が検出された。

第12号土壙墓（第16図）

12号土壙墓は、EFT-4区から発見され、その位置は、第11号土壙墓の北西3mの所にあたり、また、北東3.5mには14号土壙墓がある。長さ170cm、幅75cm、深さ55cmで形状は長方形、底は平坦な舟底形をしている。なお、側壁や底部からは土器の小片が密着の状態で発見された。主軸の方向はN53°Wである。土壤の特色としては北東側の上縁部で外方へ向って幅25cm深さ15cmの段があった。蓋受けの施設かとも思われたが、他の位置からはこのような施設は検出できなかった。

第13号土壙墓（第17図）

13号土壙墓は、12号土壙墓の北々東6m、CT-4区内から発見されている。なお12号との間には14号が存在していた。長さ98cm、幅56cm、深さ51cmで梢円形状を呈し、底は平坦な舟底形で第1オレンジ層まで切りこまれていた。主軸の方向はN80°Wである。

第14号土壙墓（第18図）

14号土壙墓は、DT-4・5区内に位置し形状は長梢円形である。主軸の方向はN55°Wで、大きさは長さ137cm、幅60cm、深さ28cmであるが、この土壤は他の場合のように第1オレンジまでの切りこみがなく、その上表面が底部になっている。この深さを現在の地表面からみると、最上層の灰黒色土層が60cm、その下の高原スコリア層が7cmから10cm、スコリアの下層にある漆黒色土層が約56cm、その下が10cmの黒褐色土層、さらに赤褐色の第1オレンジ層へと続いている。従って、地表から約140cm下が土壙墓の底部になっている。

第15号土壙墓（第19図）

15号土壙墓は、G・HT-4・5区内にあり、11号土壙墓から南西4mにあたり、近くには、16号、17号の両土壙墓が所在している。この土壙墓は、梢円形に近い長軸210cm、短軸145cm、深さ10cmの浅い土壤の西南寄りに設けられていた。形状は隅丸方形で長さ93cm、幅45cm、深さ45cm、主軸の方向はN55°Wである。この土壙墓の特色は、浅い梢円形状の土壤の中に構築されていたことと、土壙墓内の北西側に長さ20cm、深さ15cmの段が設けられていたことである。底部は第1オレンジ層まで切りこまれていた。

第16号土壙墓（第20図）

16号土壙墓は、HT-5区内から17号と共に発見された。土壙墓群の最南端で15号土壙墓から1.5m南西に位置している。16号と同様長軸260cm、短軸210cm、深さ25cmの浅い梢円形状の土壤中央に設けられており、長さ130cm、幅60cm、深さ30cmの隅丸方形であった。墳底は平坦で第1オレンジ層に切りこまれていた。主軸の方向はN67°Wである。

第17号土壙墓（第21図）

17号土壙墓は、16号土壙墓から約1m東方に位置し主軸はN100°Wである。掘りこみは船側のようにゆるやかに内方へ傾斜しており、上縁の長さ124cm、幅65cm、底部で長110cm、幅50cm、深さ32cmで長梢円形を呈していた。

（田中茂）

2 弥生式土器群

大蔵遺跡から出土した弥生式土器の多くは、高環形土器をはじめ、長頸壺形土器や器台形土器など、

祭祀の特別な精製土器であり、いずれも、土壙墓の埋葬儀礼に伴って、破碎遺棄されたものである。これらの土器類は、その出土位置から、特定の土壙墓に、直接供獻埋置されたとみなされるものと、各土壙墓の周辺に破碎遺棄されていた散乱土器群とに分けられる。前者には、4号土壙墓と5号土壙墓の直上に埋置されていた土器群がある。後者の散乱土器群は、土壙墓群全域におよぶが、それぞれのまとまりによって、12群に分けることができる。

土器型式からは、後期の第Ⅶ様式から第Ⅷ様式に相当する。ことに、4号及び5号土壙墓の供獻土器は、壺形土器、高环形土器、鉢形土器、器台形土器を一セットとしており、墓地遺跡における免田式土器と櫛描文系土器との関係を知るうえで重要である。

以下、各土器群ごとに、概要を述べる。

4号土壙墓の供獻土器（第25図）

壺形土器（1）

(1) 復原高38cm、口径15.5cm、胸径29cm。外反する口縁先端がくの字形に内傾する、いわゆる二重口縁の壺形土器である。球状に張る腹部に、丸底か、尖底状の丸底がつくものとおもわれる。頸部には、2列の刺突文が見える。胎土はキメ細かいが、多量の褐色砂粒を混入している。焼度は低く、内面の剥離が著しい。色調は灰褐色を呈する。

長頸壺形土器（2、3）

2個ある。(2)は、いわゆる免田式土器である。ラツバ状に聞く口縁先端は、軽く外方に屈折して平縁を形作っている。上腹部は、頸部から直線状に傾斜し、下腹部との接合部に明瞭な稜角をつくる。底部は丸底をなす。頸部直下から肩部にかけて13条、稜線上に2条の平行条線を削り出し、その間に、10葉の重孤文を描いている。このうち2葉の重孤文は、左右の重孤文の間に重ねて、一種の青海波文をなしている。器面はよく研磨され、焼成も良好で、色調は褐色を呈する。

(3)は、大形の長頸壺とおもわれるが、脚部を欠き、全形は不明である。おそらく5号土壙墓に供獻されていた大形の長頸壺に類するものであろう。

高环形土器（4～7）

4個の高环形土器が供獻されていた。(4)直線的に聞く浅い坏部に、外反しながら立ちあがる口縁部をとりつけた大形の高坏である。脚部は、据開きとなり、脚底近く、9個の円形透しが穿孔されている。脚底先端は平且をなし、わずかに反りがある。口縁部には縦走する刷毛目が見える。胎土に多量の石英粒を混入するため、表面剥離した器面はザラザラしている。焼成は良く、色調は赤褐色を呈する。復原高25cm、口径39cm、脚底径20.5cm。

(5) 器形は(4)に類似するが、口縁部の反りが小さく直線的に外傾していることと、据開きの脚部の円形透しがみられない。口径35.2cm、全高21.5cm、脚部底径22cmである。胎土は精選されキメ細かいが、焼成弱く軟弱である。淡い赤褐色を呈する。

(6)は、坏部と口縁部の組ぎ目に、つまみ出しの突帯をめぐらし、(4)、(5)より長く大きく外反する口縁を有する高坏である。据開きの脚部には、4孔の円形透しが、中段に穿孔されている。坏部と脚部の接合は、枘合せの感じがする。器面は研磨されているが、口縁部には刷毛目の下地がみえる。胎土には、(4)と同じく多くの石英粒を混える。焼度は堅く、色調は赤褐色を呈する。全高22.4cm、口径34.4cm、脚

高11cm、脚部底径24.6cm。

(7) 梭形の坏部に裾開きの脚部をとりつけたものである。脚部には4個の円形透しがある。器面は篦研磨されている。胎土は比較的精選され、焼度も高く、灰褐色を呈する。器高15cm、口径19.5cm、底径13.5cmである。

(8) は、器高12.5cm、口径14cm、底径4.8cmの鉢形土器である。口縁は横なで成形により軽く外反する。器面は篦研磨され、内面には、刷毛目下地がみえる。底部はつまみ出しによる高台上げ底をなす。胎土はキメ細かいがかなりの砂粒を含む。

5号土壤墓の供献土器 (26図)

壺形土器 (1)

(1) 外反する頸部に稜をなして内湾する口縁がのる壺形土器である。肩から胴にかけての張りは少なく、胴の最大径は、腹部下位にあり、この部分から屈曲して下腹部はゆるやかに底部にいたる。底部は丸底に近い平底である。頸部のつけねから肩にかけて、刻みの深い8本の平行条線が施されている。器面には、調整の刷毛目がのこる。頸部の縱走する刷毛目は明瞭につけられ、一種の装飾をなしている。胎土には多くの石英粒を混入する。色調は褐色。復原高43cm、口径16cm。

長頸壺形土器 (2~4)

重孤文を描いた磨研土器と、無文の大形長頸壺の2種類がある。

(2) 稜角の鋭いソロバン玉状の胸部を有する重孤文土器である。口縁先端の開きは比較的小さい。肩部に施された10本の平行条線は、彫りも深く段状を呈する。稜角との間に描かれた重孤文は7葉である。器面はよく篦研磨され、色調は明るい褐色を呈する。胎土に多量の石英粒を含む。下腹部が打欠いであるだけで、器形のもつともよく残されていた土器である。全高33.3cm、口径10.3cm、口頭長17cm、胴径22.6cm。

(3) 表面よく研磨された褐色の土器で、(2)の土器と同じ様に、多くの石英粒を胎土に混入している。(3)よりも小形で、口縁部の開きが大きい。肩部の平行条線は13本で、彫りも深く段状を呈する。上下2ヶ所に刻みが加えられている。稜角上部には2本の条線が引かれている。条線空白部には、8葉の重孤文が描かれている。全高26.5cm、口径10.3cm、口頭長12cm、胴径20cm。

(4) 無文の大形長頸壺である。稜角胴径28.3cm、ラッパ状に開く長頸は、口径18.3cm、長さ23cmである。器面には刷毛目調整痕が見える。(2)、(3)同様多量の石英粒を胎土に含むため、表面の剥離した部分は、器面がザラザラしている。底部は穿孔されている。

高环形土器 (5)

(5)の1個だけである。口縁部を欠くため完形はわからないが、4号土壤墓の高坏に比べ、坏部が深い。裾開きの脚部には、上下2段に円形透しがあり、上段には5孔、下段には6孔が穿孔されている。脚部底縁は肥厚し反りがみられる。全面篦調整され、焼成は良好である。色調は、淡褐色を呈する。現高22.5cm、环部径27cm、底径21cmを計る。

鉢形土器 (6, 7)

(6)は、口径13.5cm、高さ10cm、底径4.6cm、(7)は、口径13cm、高さ10.5cm、底径5.1cm。どちらも器高より口径の大きい鉢形土器である。底部は、つまみ出し高台の上げ底をなす。口縁部は(6)の方は平且な

口唇を作っているが、(7)は、横なでによって、口唇が外反する。器面は箇調整されている。胎土は粗く多量の砂粒を混入している。焼度は比較的高い。黄褐色を呈する。

器台形土器 (8)

(8) 中央部がしまり、上下が朝顔状に開いた器台である。大きく開いた上部口縁は、屈折して立ち上り口縁を成し、この部分に櫛描文が施文され、文様帶を構成する。櫛描文は、波状文と直線文を組合せ、これに、刻目のある棒状浮文が、2本1組として8ヶ所に、口縁に垂直に貼付されている。腹部には、4孔を1段として、2段の円形透しが穿孔されている。反りのある底縁には、2本の沈線が刻されている。器面には箇調整の痕が見える。高26.5cm、口径27.5cm、底径25cm。

第1土器分布群 (第27図1~4)

6号土墳墓から2.5m東寄りのD-11区に、東から南へ約3mの範囲に散乱していた土器群である。その位置から、おそらく、6号土墳墓の埋葬儀礼後に破碎遭棄されたものと考えられる。遭棄されていたのは、高环形土器と器台形土器、それに坦形土器である。

高环形土器として(1)と(2)がある。推定口径36~37cm。浅い环部に外反する口縁部をとりつけたもので4号土墳墓の高环に共通する。(1)は、口唇が肥厚し、L字状の幅広い口唇帯をつくる。环部の口縁とりつけ部分には、M字形の突帯があげらされている。

(3)は、上下の大きく開いた立上り口縁を有する器台である。环部、腹部、脚底と割れ接合できないが胎土、焼成、文様構成の具合からして同一個体とおもわれる。立上り口縁部と腹部に施文されたクサビ形文様に特色がみられる。腹部には、上下各4孔を穿つ。胎土には多くの砂粒を含む。黄褐色を呈する。

(4)は、胴張り平底の器体に外開きの口縁部をつけた坦である。灰色がかった褐色を呈する。石英粒が胎土に見える。

第2土器分布群 (第27図5~8)

4号土墳墓から3m西、5号土墳墓からは北西へ9mの地点・CD-8区に、南北3m、東西1.5mの範囲に遭棄散乱していた土器群である。(7)の壺形土器以外には原形をとどめたものがなく、ことごとく破碎されていた。破碎されていたのは、壺形土器と器台形土器である。

(5)は、内傾する二重口縁を有する平底の大形の壺形土器である。多量の砂粒を混入する胎土の粗い土器で、焼成もあまりよくない。口縁には波状文を施文している。(6)も同様な壺形土器の口縁部である。大きく開いた頸部に垂直の立上り口縁がつき、口唇は平且である。口縁外面に、3条の波状文が描かれている。

(7)は、張りのある扁球状の腹部に、長めの外反する口縁部をつけた壺形土器である。腹部の長さより口径が大きい。底部は、丸底とおもわれる。器面は箇研磨され、焼度も高く、赤褐色を呈する。口径11cm、器高21.5cm。

(8)は、復原高36cm(+)、口径39cm、腹径21cm、底径32cmの上下の大きく開いた大形器台である。円筒形の腹部には、6孔を1段とした円形透しが、斜交に、上中下と3段に穿孔されている。箇調整された器面には、箇削りされた回線が無造作に横走し、一種の装飾となっている。器面は丹塗りされている。この腹部から大きく開いた口縁部は、立上り口縁となり、櫛描波状文が施文されている。いま立上り口

縁部を欠ぐ。丹塗りされたこの器台は、あくまでも祭祀のための特殊器台といえよう。

第3土器分布群 (第27図9)

4号土墳墓の間に散乱していた土器である。ほとんどの土器片が10cm程度の大きさに破碎されており復原困難である。胎土・焼成からは同一個体分の破片と見られるもので、(9)に示した櫛描波状文帯をもつ壺形土器の破碎されたものであろう。

第4土器分布群 (第28図10~14)

5号、7号、10号土墳墓を結ぶ三角形地域の散乱土器群である。破碎散乱していた土器は、免田式土器、二重口縁の壺形土器、高环形土器である。土器片の大半は(9)の壺形土器の胴部破片と見られるもので占められていた。(10)~(14)は、いわゆる免田式土器の破片である。表面の剥離が著しいが、肩部の平行条線は彫りも深く、脚部の稜角も明瞭である。(10)は高环形土器の口縁部とおもわれる。

第5土器分布群 (第28図15~23)

1号土墳墓の南側3mの地点(B-6区)に、東から西に散乱していた土器群である。免田式土器、壺形土器、高环形土器、小壺形土器がみられる。

(15)~(17)は、免田式土器片である。(10)の平行条線には刻が見える。いずれも褐色を呈する。(18)は、土器群の西側に垂直に置かれた状態で出土している。口縁から上腹部はすべて下腹部の中に陥り込んでいた。復原高63cm、口縁部はくの字に外反し、頸部付根には、つまみ出しの突起がめぐる。胴部は大きく張り出し、脚の最大径は中位上部にあり、その下部に突起がある。底部は穿孔され夫なわれているが、丸底になるものとおもわれる。器面には、櫛齒状器具による調整擦過痕が縱走し、斜行している。口縁部の擦過痕は、器面調整以上の意図をもって施文されたものと考えられる。口径18cm、脚の最大径は46cm前後である。

(19)~(21)は、高环形土器の口縁部と脚部である。形態は、4号土墳墓供獻の高环形土器に共通する。

(22)の脚部には、上下2段に各4孔の円形透しが見える。

(23)は、小壺形土器であるが、脚上部が欠けているので、完形は不明であるが、おそらく、くの字形に開く短い口縁部のつく器形が予想される。

第6土器分布群 (第28図24~26)

5群の西方、13号土墳墓の北側の土器群である。(24)は、内湾しながらひろがる裾をもった高环の脚部である。上部には、椀形の环部がつくものとおもわれる。(25)は、器台形土器の一部とおもわれる。上部が欠けているので完形は不明である。上下2段に各4孔の透しがある。(26)鉢形土器のミニチュアである。口径7cm、器高5.5cm、底部はつまみ出しによる上がり底を呈する。この作りは5号土墳墓に供獻されていた鉢形土器に見たものである。

第7土器分布群 (第28図27~29)

7号土墳墓南側の土器群である。散乱位置から7号土墳墓の埋葬に伴う遺棄物とみられる。破片から免田式土器と高环形土器が破碎されていたものとおもわれる。

(27)共に免田式土器の稜角部分である。(28)は脚径12cm前後の小形の土器である。(29)高环の脚部であり、内面に範削りの痕がみえる。

第8土器分布群（第28図、39）

A-10区、9号土墳墓のすぐ傍に出土した壺形土器である。大きく外反して開く口縁部先端は肥厚して三角縁の口唇を形成し、外面に備び波状文を施している。胴部の張りは大きく球状を呈し、底部は平底である。器面は範囲整され研磨のあとがみえる。胎土に多量の石英砂粒を混入することは、大蔵出土の大形の壺形土器に共通するところである。胴部内面の剥離が著しい。黄褐色を呈する。

復原高57cm、口径24.5cm、胴の最大径45cm、底径11.5cmである。

第9土器分布群（第28図30～38）

14号土墳墓東側、D-5区の土器である。免田式土器、壺形土器、高坏形土器、小壺形土器、器台形土器が破碎散乱していた。

図8～図10は、免田式土器の破片である。胎土、焼成は類似するが、文様構成にやや相違がみられるところから、2乃至3個の免田式土器が破碎されたものと考えられる。

図11は、胴下腹部から底部にかけた部分が欠けているが、2群(?)の壺形土器と同形である。口縁の開きは2群(?)よりも大きい。口径11.5cm、頸部の長さ7.8cm、胴径16cm、推定高21cmである。

図12は、小壺形土器である。どちらも精選されたキメ細かい胎土の土器で、薄手に仕上げられている。図13は、壺形土器のミニチュアとも考えられる。

図14、図15は高坏形土器片である。図14は、推定口径30cm程度の立上り口縁のついた深い坏部を有する器形が予想される。口縁部には備び波状文が見える。図15は、坏部と口縁部の接合部に突帯を貼付けしたものである。1群(?)の高坏と同類と考えられる。

図16は、器台破片とみられるもので、胴部に数条の平行沈線が描かれている。また円形透しが、上下2段に穿孔されていたものとみなされる。碎片が断片しかなく、完形は不明である。 (浅山謙)

第10土器分布群

本土器集積群は、ET-5区、FT-3・4・5区、GT-3・4区に広がる大分布群である。周囲には、北方から14号、12号、11号、15号、16号の各土墳墓が構築されており、検出された土器片はこれらいずれかの土墳墓に供獻された土器が祭祀後、破碎され投棄されたものである。完形品は、いずれも小形の壺形土器と杯形土器の2点だけその他は復元もできない程完全に破碎されていた。土器の分布状態は、北東から南西に向って11mも続き中心にあたるGHT-3・4区では5m×5mの範囲に広がっていた。器種をみると、長頸壺の頸部や腹部、高坏の破片、無頸壺片、複合口縁壺形土器片、器台の破片、小壺形、小形坏、それにくさび形の連続文様のある破片等である。免田式土器はこのグループからは発見されなかった。

第29図 (1)

FGT-3区、12号土墳墓の南方から出土したもので口唇部が若干欠失しているがほぼ完形に近い、口径推定3cm、器高推定5.5cm、最大腹径5cmの小壺形である。口縁はくの字形に外反し、底部は平底である。なお、この小壺は、底部に団のように貫通孔が横に設けられている。胎土に砂粒を含み焼成は良好、色調は黒褐色を呈し、へら調整が行なわれている。

第29図 (2)

やはりFGT-3区から発見された小形の环形土器で、器高6cm、口径5.5cm、底部が高环の脚部の様に外方へ広がり安定をよくしている。石英の小粒を多量に含んでおり、粘土の質、焼成共に良好とはいえない。底部は若干上げ底になっている。色調は黄褐色である。

第29図 (3)

同地点からの出土で欠損が大きい、底部の腰が高い小鉢形土器である。やはり石英の小粒を多量に含んでおり、粘土の質は粗悪である。色調は黄褐色で高台状の底部は上げ底になっている。

第30図 (5)～(10)

いずれも高环の脚台と环部の破片である。図のように復元不可能なまで完全に破碎されている。环部をみると外開きの口縁端が(9)、(10)のように強く立上るものと(11)のように立上りは弱いが文様がほどこされているものがある。(10)は、口径が43.5cmの大きさで、描画文が一面にめぐり、その上、円形、棒状の張りつけ文がある。安国寺出土の土器に良く似ている。

第30図 (10)

GT-3区の出土、環上部の破片で

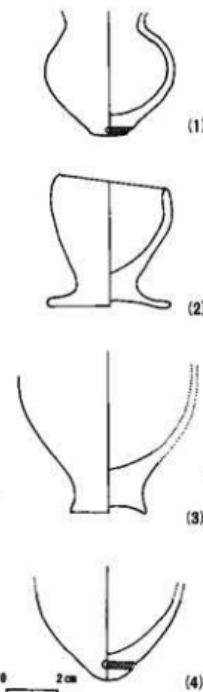
口縁端が若干肥厚し外面に描画波状文がほどこされている。焼成は良好、色調は黄褐色である。

第30図 (10)

ET-4区出土、長頸壺の頸部復元図であるが、本遺跡は土墳墓群としての特性か、長頸、短頸の壺形土器が多量に発見されている。この長頸壺の口径は15.5cm、頸部高さ15.5cmと大形である。粘土は砂が多く粗悪で焼成も至って悪い。色調は黄褐色である。

第30図 (10)、(10)

複合口縁壺形土器の口縁部である。(10)は口縁端外面に描画波状文をめぐらしているが(10)になると文様がなくなっている。両方とも、頸部に向ってへら状の調整具による強い調整痕が見られる。



第29図 小形土器実測図

第30図 (3)

壺形土器の破片で口縁がくの字形に外方へ開いている。腹径に対して口は大きいが比較的小形の壺である。砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好で、色調は赤褐色である。

第30図 (4)

くさび形状の文様と紐状の張りつけ突帯を有する特殊な土器でこの分布区の各所から小破片で検出されたものを推定復元したものである。胎土、焼成共に悪い。色調は黄褐色を呈している。器形は、腹部から急に屈折し底部に移行し、口縁部は立上りながらわずかに外へ開いていたものと思われる。腹部には紐状のはりつけ突帯が一巡し、この突帯の数か所から上方に向って、また紐状のはりつけ突帯があり、その突帯と突帯の間にくさび文様がほどこされていたものとみられる。器形的には土師器に近い土器であるが他に出土例はない。

第11土器分布群

最南端の土器分布群でGT-7区、HT-6・7区に渡って分布している。周囲には、15号、16号、17号の土墳墓がある。出土器種は圧倒的に器台が多いが、これもまた、全く復元不可能な状態で発見された。範囲は、北方から南方へと細長く連なり最長4m、最大幅2.5mに及んでいる。器種は、器台のほか、長頸及び短頸壺、高坏、鉢、壺形土器等の破片であり、第10土器分布群と同様、免田式土器は見られなかった。

第31図 (3)

器合形土器の破片で上部は欠失しているが宮崎郡清武町加納出土のものと全く同じ型式である。^①石英等の砂粒を含み焼成良好、色調は赤褐色を呈し脚柱の中程に4個の透し穴（円形）がある。

第31図 (4)

(3)も器合の破片で下部に近い部分である。脚柱から脚台へ移る位置に段がありすわりを良くするために裾部の面積を広くする工夫とみられる。上部も下部も欠損しているので大きさは不明だがかなり大形の器台であったと思われる。色調黄褐色で焼成は至って良好。

第31図 (5)

高坏の破片、脚台の裾部は他の地点出土のものと同様に幾分かそりをもちながら外方へ広がる型式である。しかし、この高坏の特色は、焼成前から坏部の中央、つまり底部の部分に穴があけられていたことである。恐らく実用品としてではなく、祭祀的な目的で造られていたものであろう。胎土に砂粒を含む、焼成良好で色調は赤褐色、へらによる研磨調整がほどこされている。脚柱の下方に4個の透し穴が認められる。

第31図 (6)

厚い（高い）底部をもつ小形深鉢形土器とみられる。底部は本分布地区（FGT-5・6区）からの出土であるが、上部はET-2区から発見されている。破碎後遠くへ投げ棄てたものと思われる。一面に調整の刷毛目がみられる。焼成、胎土共に良好、色調は赤褐色を呈している。

第31図 (7)

かなり手のこんだ優美な上げ底の破片である。同形の底部をもつ鉢形土器が大分県の安国寺から出土している。これは台付鉢型土器であるが本例の器種は不明である。類似の底部がF地区の住居址内から

発見されている。器台や高坏の脚台と同様若干反りながら外へ広がっている。砂粒を若干含んでおり色調は黒褐色、焼成良好で器面は継状にへらで研磨されている。

第31図 ②

平底の底部及び下腹部の破片、腹部への立上りからみて壺形土器の破片である。胎土は砂が多く質は良くはないが焼成は良好である。色調、下腹部は赤褐色であるが底部付近は黄褐色になっている。

10号土墳墓上の土器

先述の通り、墓墳上の漆黒色土層から完形に近い器台と若干の土器小片が検出されている。漆黒色土層中からは掘りこみの跡は発見できなかったが、おそらく埋葬後当時の地表である漆黒色土の上で祭祀が行なわれ供獻土器は破碎あるいは投棄されたものと思われる。

第31図 ③

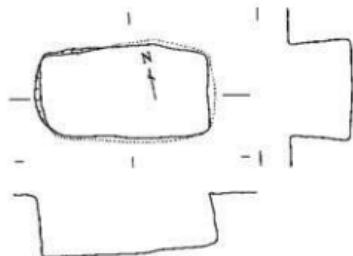
上部口縁の一部と下部裾部の一部が欠損しているだけではほぼ完形に近い器台形土器である。上部も下部も幾つか反りをもちらながら外方へ広がる型式で器形全体は鼓形を呈している。胎土には砂粒を含み焼成は良好で、色調は赤褐色を呈し、器面は目の細かい調整具で整えられ細かい条痕がみられる。清武町加納出土のものと同形である。

第31図 ④

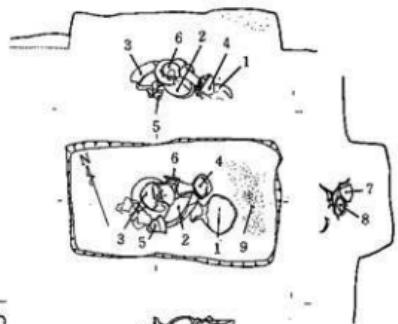
10号土墳墓の周辺から発見された土器で、これだけでは器形の断定はむずかしいが一応小形の器台と推定したい。下部口径 5.8cm、上部頸部 5.4cm と若干底部が大きい。2か所に櫛歯状施文具による数条の平行細沈線が見られる。下方には7条、上部には5条の沈線がめぐっている。また、下部の細沈線帯には5個の円形透し穴がある。色調は黄褐色で焼成良好、へらによる調整痕がある。
(田中 茂)

註

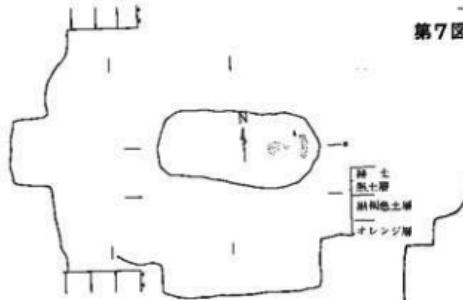
- ① 小林行雄・杉原莊介編「勞生式土器集成本編!」(昭和39年) 土器は宮崎県総合博物館保管
- ② 前と同じ



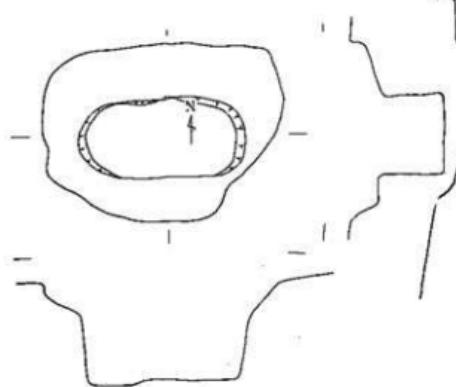
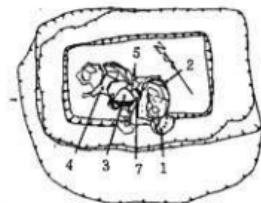
第4図 第1号土壙墓



第7図 第4号土壙墓

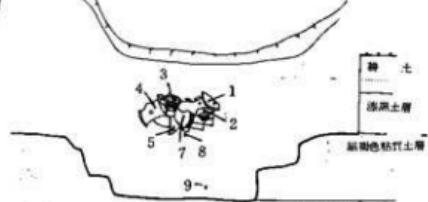


第5図 第2号土壙墓



第6図 第3号土壙墓

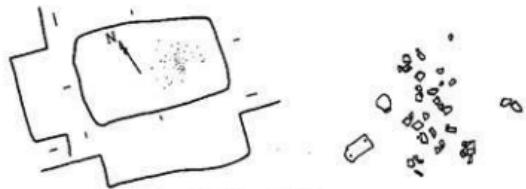
第9図 第5号土壙墓



0 1m

1. 叠形土器
2. 滴环形土器
3. 高环形土器
4. 重弧文土器
5. 高环形土器
6. 高环形土器
7. 钺形土器
8. 長頸壺形土器玉
9. 貝

1. 高环形土器
2. 叠形土器
3. 重弧文土器
4. 器台形土器
5. 長頸壺形土器
6. 钺形土器
7. 重弧文土器
8. 钺形土器
9. 貝



第10図 第6号土壙墓と第1土器群

第11図 第7号土壙墓

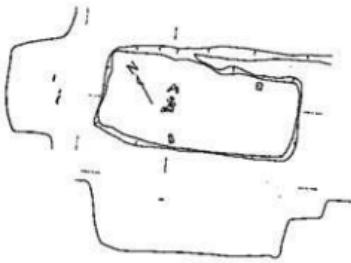
第12図 第8号土壙墓

第13図 第9号土壙墓
及び集積土器

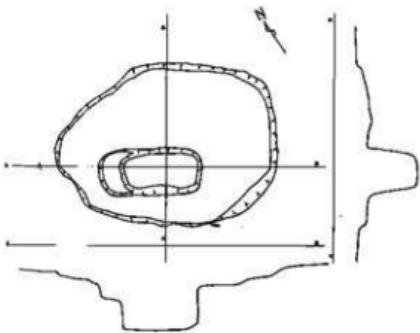
第14図 第10号土壙墓及び土壙上集積土器

第15図 第11号土壙墓

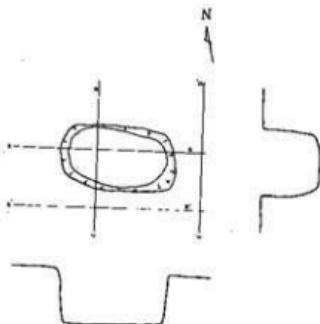
0 1m



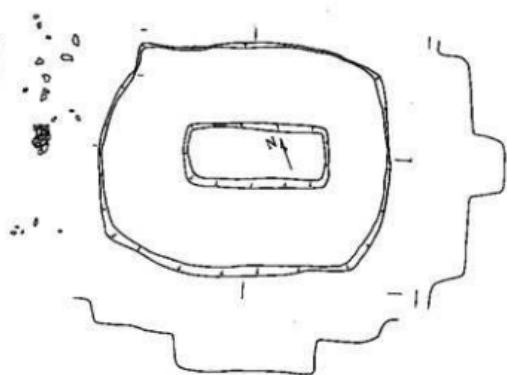
第16図 第12号土壤基



第19図 第15号土壤基



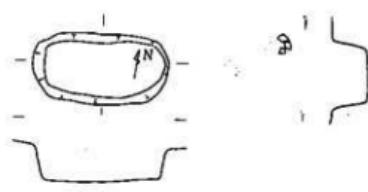
第17図 第13号土壤基



第20図 第16号土壤基

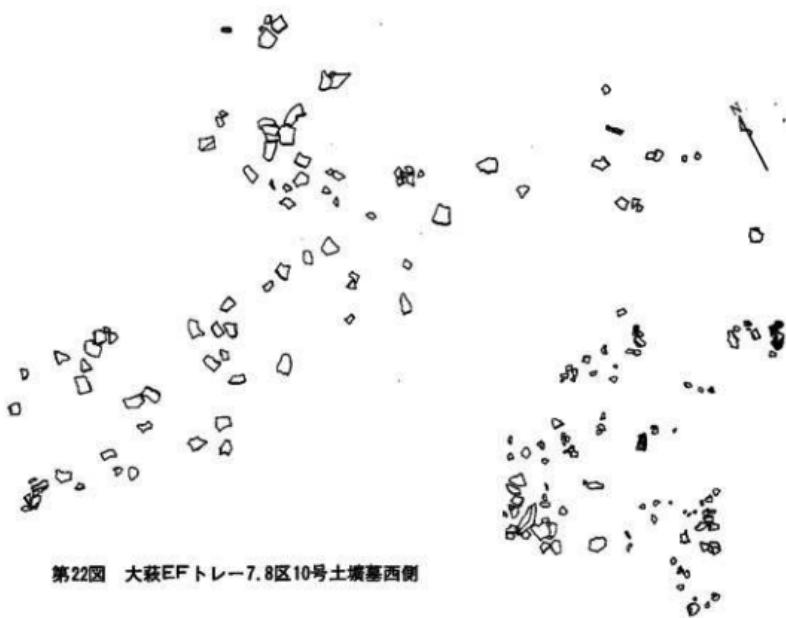


第18図 第14号土壤基

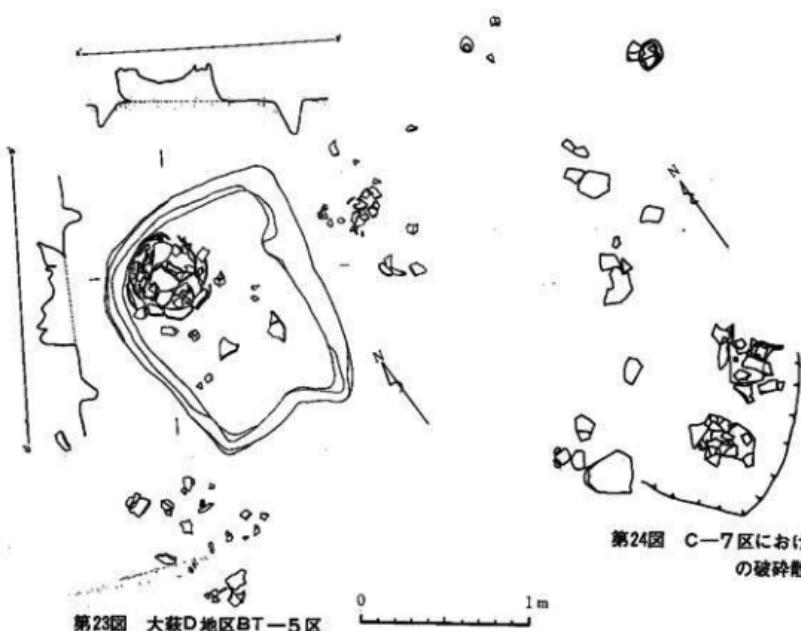


第21図 第17号土壤基

0 50cm

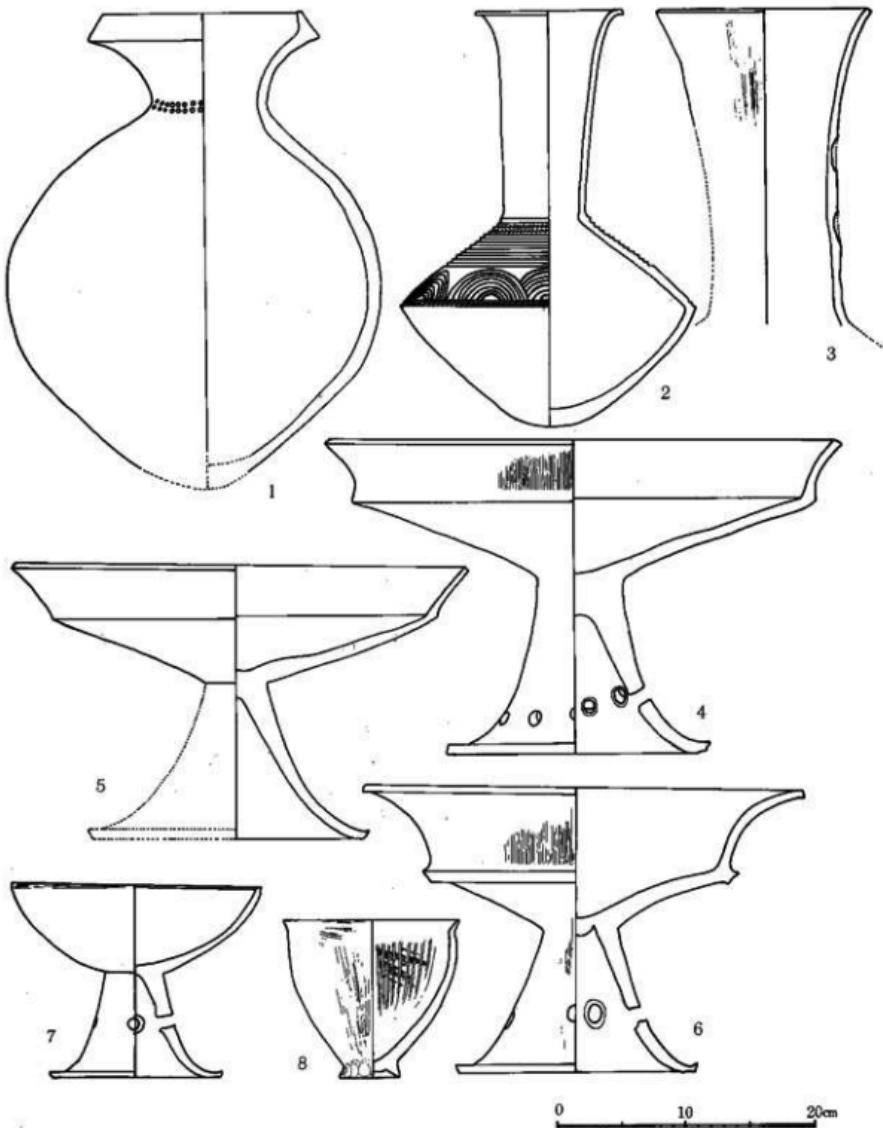


第22図 大萩EFトレー7.8区10号土壤墓西側

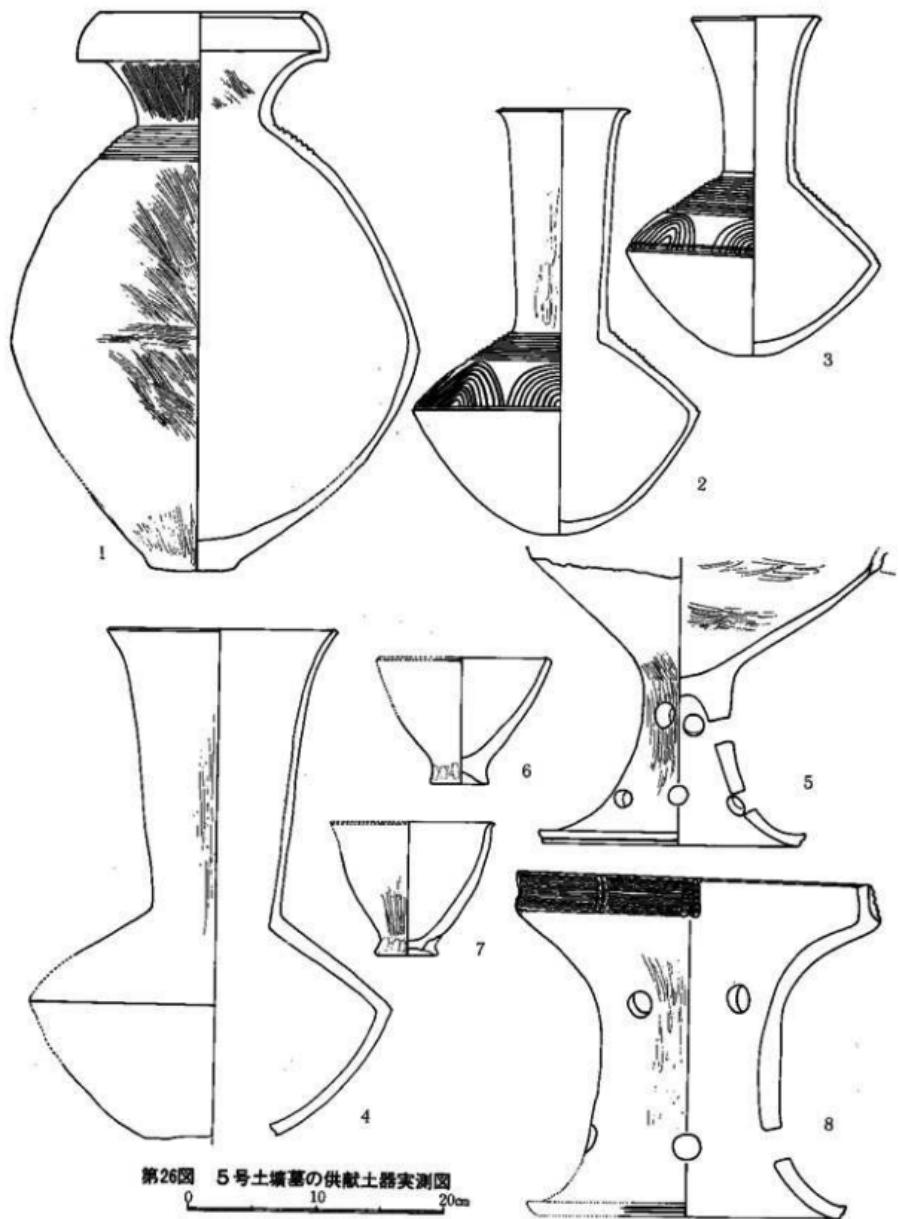


第23図 大萩D地区BT-5区

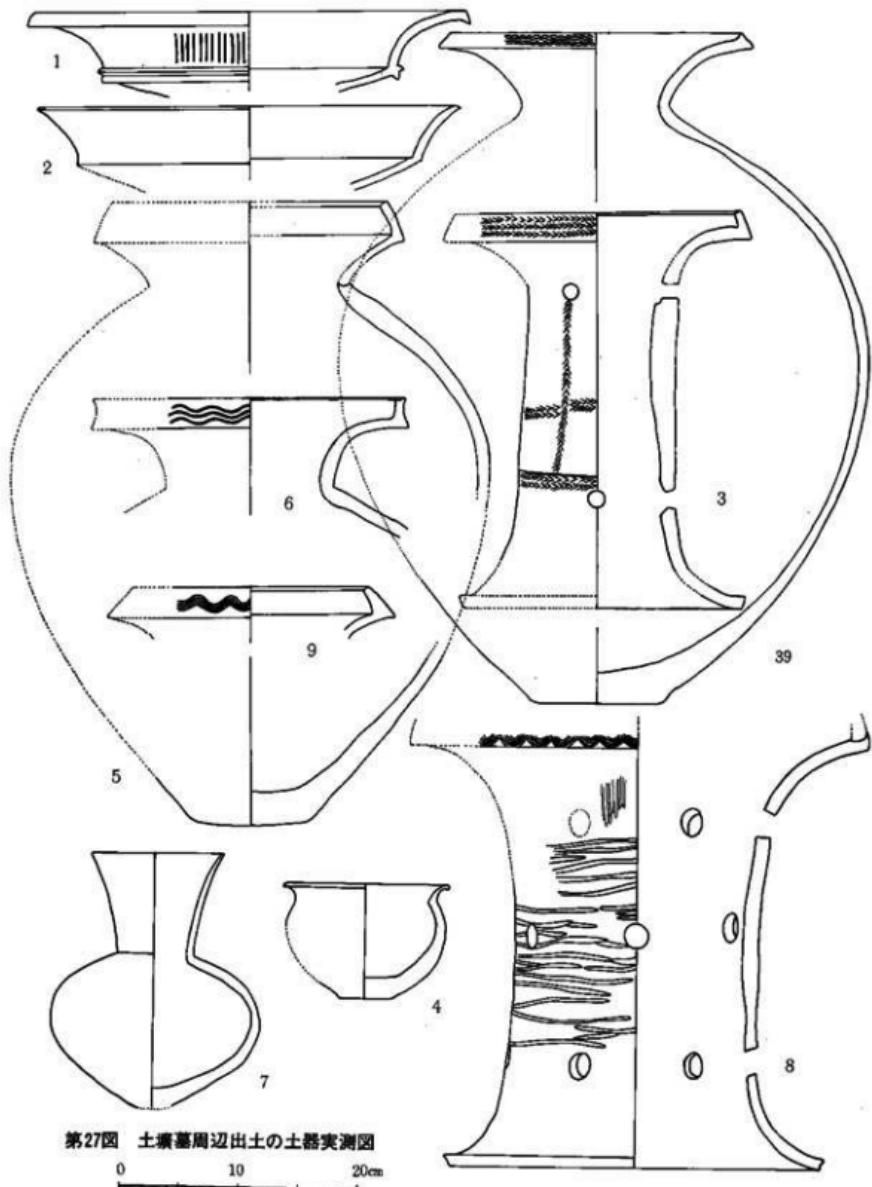
第24図 C-7区における器台の破碎散乱状況



第25図 4号土壙墓の供献土器実測図

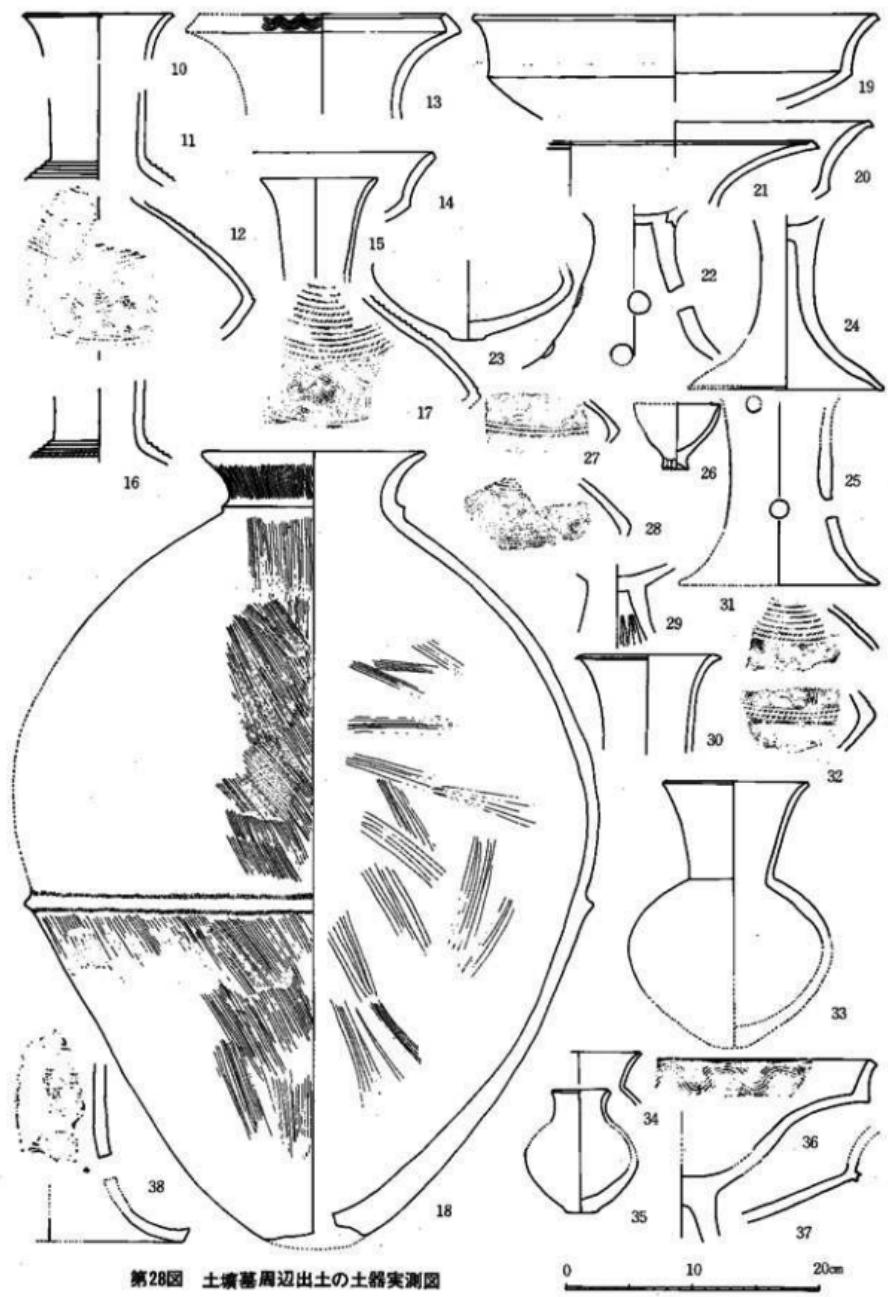


第26図 5号土塚墓の供献土器実測図
— 20cm —

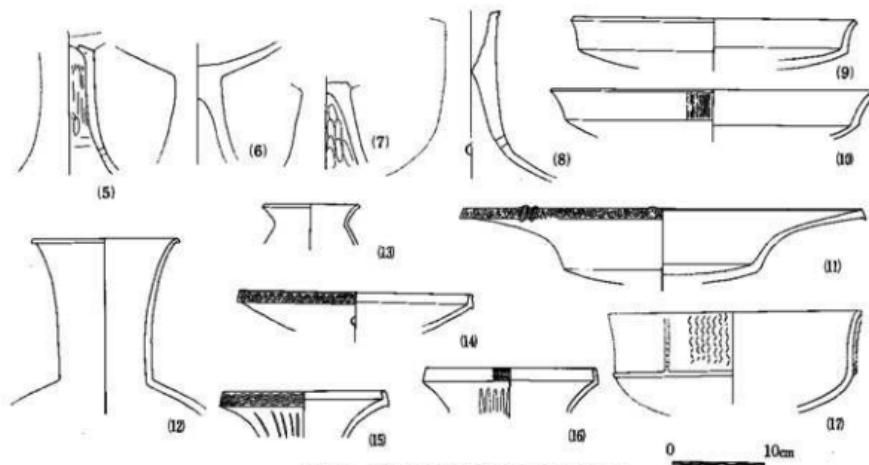


第27図 土壙墓周辺出土の土器実測図

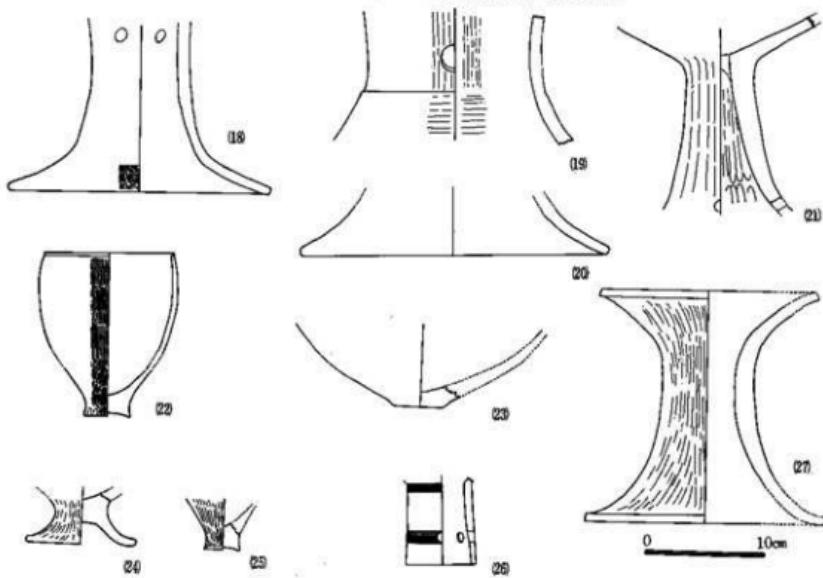
0 10 20cm



第28図 土塙墓周辺出土の土器実測図



第30図 第10土器分布群出土土器実測図



第31図 第11土器分布群と10号土壤墓上の土器類

第2章 住居址

調査の経過

10月22日、地下式横穴を探す目的で、E地区にブルドーザーを入れ、表土剥離を行なった。

道路添いに最初2本の調査溝を掘ったが、何等の遺構も確認できなかつた。ついで、東西に調査溝を掘つた結果、第2掘削溝及び第3掘削溝にかけて、住居跡遺構を確認することができた。この住居跡は、南側に造出しある隅丸方形住居跡とみられた。

この日は、とりあえず遺構確認だけにとどめて、調査は11月11・12・18・19日に実施した。(岩永哲夫)

1 住居址 (第32図)

この住居址は昭和49年10月22日に発見されたもので、ここは大荻遺跡のE地区と呼んだ場所である。県指定の古墳の東側の町道は、今回の工事でよく整備されたが、瀬戸口から南に直線に通っているこの道路は古墳の南方約100mのところで右折して下って柿川内に通じている。E地区はこの道路が下り坂となつてあるところの東側の台地で、南と東は断崖で、北も東半は断崖に臨んでいる。そしてこの台地の西方を小林市と野尻町を境している岩瀬川の支流が流れおり、台地は標高197mである。

われわれはここ立地の状況と前年にその西方に続いている台地で多くの地下式古墳が発見されたので、この地区にも地下式古墳があるであろうと考え、業者に交渉して、ここを工事以前に事前調査を行うこととしたのであるが、ここは表土の堆積が厚く、人力で掘ることは容易な業ではなかつたので、ブルドーザーを雇つて表土を除いた。しかし地下式古墳は発見されず、意外にも住居址が見いだされたのであった。

住居址は竪穴式住居址で、その位置は県指定古墳から南南東150m、道路の曲り角の東岸から約40mのところにあたる。弥生時代後期のものと思われるが、竪穴は南北の径5.40m、東西の径5.80mの隅丸方形に西南隅の外側に巾1.60m、長さ1mの出っ張りがある形であった。

この地層は地表から40cm内外の下までは黒色のボラ混りの層で、ボラは大豆よりやや大きい火山灰粒である。その下に厚さ3cmないし5cmの薄い黄色のボラ層が入つてゐるが、これは後世の霧島山の噴火の時に積つたものと思われる。その下に70cm内外の漆黒色の土層があり、これは漸次褐色を帯びて黄色のローム層に移行するが、竪穴はこの黒褐色の土層から下に掘り込まれていた。そして南北の中軸線は南北の方向より約53度東に傾いていた。竪穴の深さは北側で黒褐色土層と漆黒色土層の境界から40cm、南側で約50cm下にあつた。

床面のほぼ中央に4個の柱穴があつたが、北西の穴は径18×24cmで、深さ65cm、北東の穴は径22cmで深さ83cm、南西のものは径16cmで深さ95cm、南東のものは径16×18cmで深さ93cmであった。そして北西の穴は西壁から180cm、北壁から186cm、北東のものは北壁から186cm、東壁から184cm、南西の穴は西壁から210cm、南壁から150cm、南東の穴は南壁から190cm、東壁から150cmの位置で、各穴の距離は北西と北東の間が215cm、南西と南東の間が215cm、西北と西南が200cm、東北と東南の間は170cmであった。そのほか床面の東南隅に径20×30cmで深さ57cmの穴があり、床面外の北壁のほぼ中央壁から1mのところに径15cm、深さ16cmの穴があつた。また南壁の西側にある張り出しが床面より20cm高く、黒褐色土層の

接点より約20cm低い。

また4個のピットに囲まれる中心部は床面が1段低くなってしまっており、床面も焼けており若干灰も遺存したから、ここに炉があったものと推定した。遺物は土器の破片が床面の各地に散在したが、特に東部に多く散在していた。

遺物について最も驚いたのは、屋根を葺いていた樋が炭化して残っていたことで、特に西側には多く残っていたが、その残存の状態から見て、4個のピットに柱を立て、その上部を4本の横木で井字に組み合わせ、これに周囲から樋を斜めに立てかけ、その1部に出入口を設けたものであることが知られた。この樋に使用された木は直径5cm乃至12cmに至る自然木で、樹種については宮崎大学農学部で分析調査中であるが、枝のついているものや節のあるものなどが見られたから、自然の木を小さい枝を払った程度で使用したことが知られた。

次ぎに床面の外側によくある樋を立てた柱穴を探したが、1個も発見することはできなかった。北側にあった1個の穴も、穴が垂直に穿たれているから屋根用の穴とは考えられない。ただ南側の床面外に炭の跡が1ヶ所見出されたことは注目すべきもので、その端は南壁の南方140cmのところにあり、南側に深く木炭が入っており、南端の径12cmで北端は細まって消えている。この部分は初めブルトーザーで上の土を排除したところであるが、その際ここから多くの木炭が出た。その時はこのようなものがあることは、全く知られていなかったが、この木炭の跡が床面に近くとところで斜めに切れていることは、ここに屋根に向って斜めに立てられた炭化した柱が幾本かあったのを、ブルで削り取ったので、床面に向って斜めに切れた木炭の跡が残ったものと思われる。このように、かなり大きく丈夫な樋を斜に周囲から屋根に立てかけて置けば、必ずしも床面の外側に穴を掘って樋を建てる必要はないことが知られるのである。北側の床面外にある穴は、あるいはこのような斜めになった樋を動かないように補強した杭の跡かも知れない。

次ぎに床面外の南西部にある1段高い張り出しについては、初めこれを出入口ではないかと思ったが、その上にも樋があるからここが出入口でないことは明らかである。そうすると、このものの用途は不明である。樋ではないかと思うが、暫時後例を待つこととしよう。しかしこれが出入口でないとすれば、出入口はどこにあったのかという疑問が起るが、樋の遺存する状況から西側や南側、北側ではないらしく、最も樋の遺存の少ない東側の1部にあったものと考えることが、妥当の見解ではなかろうかと思うのである。

なおこの住居址には周溝はなかったのであるかどうかを確かめるため、東側2ヶ所に東西に長いトレンチを掘って探したが、見出すことはできなかった。それでこの住居址には周溝はなかったものと思われる。

以上住居址の概要を記したが、宮崎県で弥生時代の住居の樋がそのまま炭化して発見されたのはこれが最初であるが、全国でも珍らしいことで、最近では昭和42年4月に山口市平川町の山口大学移転建築地で古墳時代(約1500年前)の方形の竪穴式住居址が発見され、縦8m、横7.1mの竪穴のほぼ中央に長さ3.4m、直径20cmの井形に組んだ柱4本と20本の丸太が炭化して発見されたことがあり、井形に組まれた4本の柱は天井のハリ(梁)で丸太は支柱やムネの樋と報ぜられた。(昭和42年4月4日付毎日新聞)また昭和47年11月には愛媛県松山市江戸町の市下水道終末処理場建設現場で弥生時代の家がそのまま発

見されたが、これは水田であったので木質が残ったもので家は $7m \times 4.5m$ の方形の切妻形のものらしいと報ぜられ、棟木や檼もあり、屋根は木の皮やオギ（荻）で葺かれ、檼は直径5cm前後で、長さ50cmのものが約70本あり、棟木は長さ約2mと報ぜられた（毎日新聞47年11月12日付）。

しかし今回大蔵で発見したものは、これらの家と比較しても、山口市のものは井形に組んだ梁があるだけで、屋根組を知ることができないに対し、大蔵のは梁はないが屋根組を明らかに残しており、愛媛県のものが切妻形の妻入という後世の高床式の建築であることが、檼の短かいことでも知られるのに對し、大蔵のものは堅穴住居の古式の形を残している点などで、これらの遺跡より、さらに重要なことが知られるのである。（石川恒太郎）

2 遺 物

先述のように遺物は、弥生式土器だけでしかも完形品ではなく出土量もわずかであった。以下数例について記述する。

第33図（1）

高环脚台の破片、土墳墓群周辺出土の高环脚台は全て端部に向って幾分か内反り気味で下方へおりていたが、この脚台は逆に上向きに反り（ふくらみ）ながら下方へ下っている。端部は、ゆるやかなふくらみを持った傾斜からわずかであるが、水平に近い状態に屈折し肥厚している。これは実用面よりも一種の飾りとみたほうがよかろう。脚部には4個の透し穴がある。胎土、焼成共に良好で器面はへらによる研磨調整が行なわれている。色調は黄褐色である。

第33図（2）

口径18cm、器高9.5cmの鉢形土器でこの住居址で器形を知り得る唯一の土器である。底部は径1cm程度平坦に近い面をもっているが一応丸底としたほうがよかろう。口唇部の上面は、外方へ傾斜している。色調は、黒褐色で焼成は良好であるが土質は砂が多く粗曇である。器面には刷毛目状の調整痕が強く見られる。

第33図（3）

複合口縁の破片で口径14.5cm、口縁端外面によく見られる様描文ではなく、きめの細かい調整具で横なのでの調整がほどこされており細い數条の痕跡がある。色調は赤褐色、砂粒を含み焼成は普通である。

第33図（4）

壺形土器の口縁部付近の破片で口径14.5cm、腹径に対して口径は大きく比較的口の広い土器である。色調は黄褐色、砂粒を含んでおり焼成は良好である。

第33図（5）

この壺形土器は発掘前にブルドーザーが住居址の上を厚くおおっている土砂を排除した後、住居址の堆積土の上に敷布していた土器片を収集し復元したもので関連土器として紹介したい。口縁部と底部の一部が消失しているが大方復元することができた。現器高12cm、頸部径4.6cm、最大腹径14.6cmと小さい壺である。腹部は強く屈折し底部は尖底に近い丸底で器形は典型的な弥生終末期の土器である。色調はくすんだ黄褐色を呈し焼成は硬く器面はへらによる研磨調整が行なわれている。

第33図（6）～（8）

底部の破片であるが(7)・(8)はいずれも手のこんだ上げ底で前記第31図(24)の底部と酷似している。(7)は底部径6.5cm、色調は赤褐色、胎土はきめこまかで焼成は比較的良好である。(8)は底部径4.5cm、色調は黄褐色、焼成は良好とはいえない。(田中茂)

3 樹種の鑑定

住居址に遺存した炭化物について、宮崎大学農学部大塚誠氏に依頼してその樹種の鑑定を仰頼したところ次のような鑑定結果を寄せられた。大塚氏が多忙の中に、本調査のために特に時間を割いて貴重な報告を寄せられ、本調査の報告に偉大な成果を与えられたことに対し、深甚の敬意を表する。鑑定は次の通りである。

「落射顕微鏡、走査電子顕微鏡を用いて、木口面、板目面、極目面を鏡検した結果、次の樹種を認めた。コナラ、ツバキ、ヤマザクラ、シイノキ

1.(A) コナラ(ブナ科)

Quercus serrata Thunb.

道管の配列型は放射孔性環孔材

孔圈道管は大きく1～3列

孔圈外道管は急にその径が小となる。

道管節の穿孔板は單一穿孔

道管壁の重紋孔は交互配列

柔細胞の木口面配列は接線状、周囲状

放射組織は多数の單列放射組織、少數の多列放射組織、複合放射組織を有する横臥細胞のみからなる同性放射組織

1.(B) ツバキ(ツバキ科) ナガキ

Camellia japonica L.

道管の配列型は放孔材2～3個の複合道管が存在する。

道管節の穿孔板は階段状穿孔

道管壁の重紋孔は交互配列

道管内壁に螺旋肥厚が認められる

放射組織は、單列、および複列放射組織

横臥および直立細胞よりなる異性放射組織

2. ヤマザクラ(サクラ科)

Prunus Jamasakura Sieb. var. *spontanea* Makino.

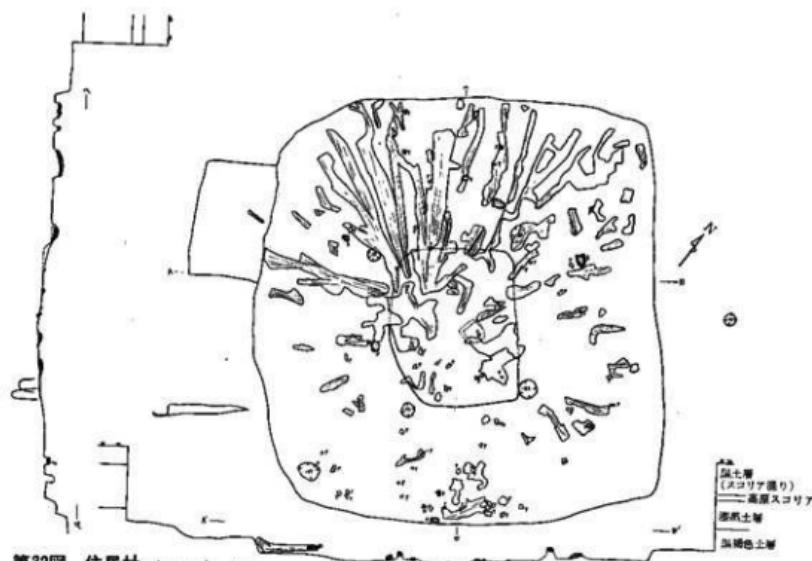
道管の配列型は散孔材、2～3個の複合道管が存在する。

道管節の穿孔板は單一穿孔

道管壁の重紋孔は交互配列

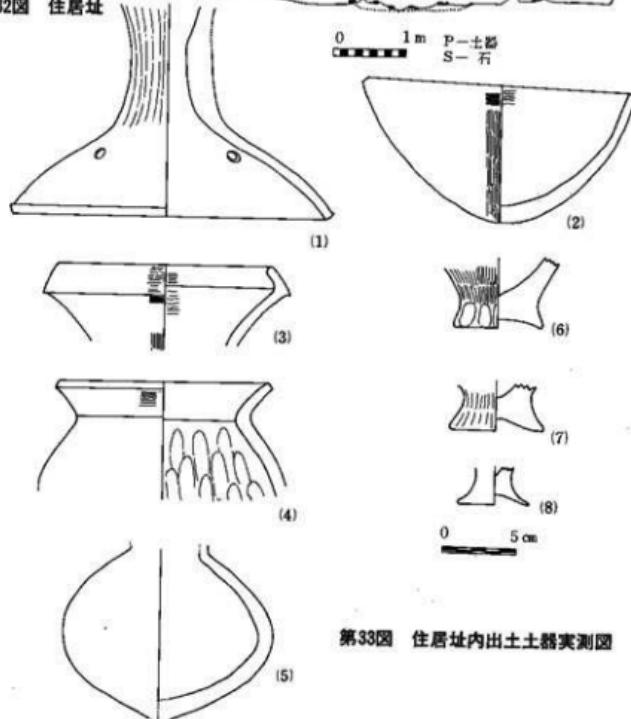
道管内壁に螺旋肥厚が存在する

放射組織は單列、および多列放射組織



第32図 住居址

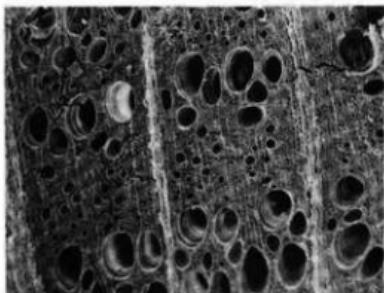
0 1m P—土器
S—石



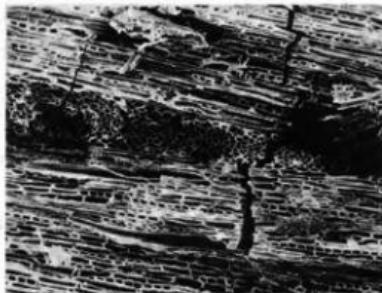
第33図 住居址内出土土器実測図

炭化樹種

コナラ

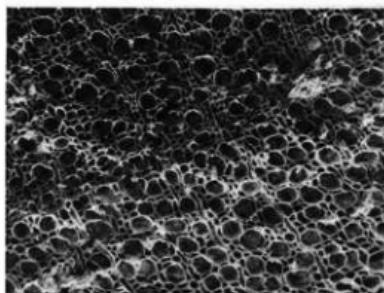


×30 木口面

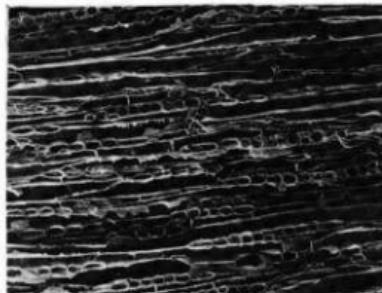


×200 板目面

ツバキ

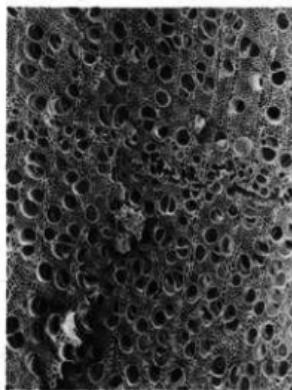


×200 木口面

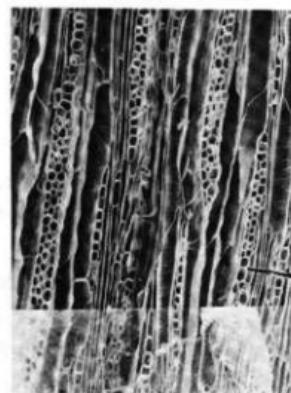


×200 板目面

ヤマザクラ

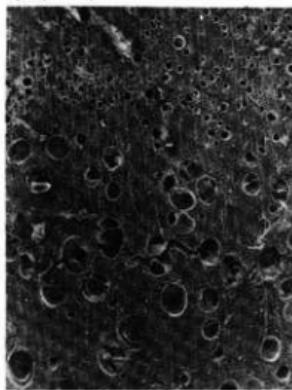


×100 木口面



×200 板目面

シイノキ



×50 木口面



×200 板目面

横臥および直立細胞よりなる異性放射組織

3.4. シイノキ（ブナ科）

Castanopsis Cuspidata Schottky var Sieboldii Nakai

道管配列型は火焔孔性放射孔材

道管壁の重紋孔は対列状配列

道管節の穿孔板は單一穿孔

放射組織は単列放射組織

以上の通りで、この種に用いられた材料は、コナラ、ツバキ、ヤマザクラ、シイノキの四種であった。もちろんそれはわれわれが提供した5個の木炭によったもので、さらに多くの資料を提供すれば、樹種はさらに多くなる可能性が認められる。しかし以上の大塚氏の御鑑定の結果にも見られるごとく、今日の家屋材料として最も普通に用いられる松、杉、桧などが多く、コナラ、ツバキ、ヤマザクラ、シイノキというような、遺跡の近くに存在したと考えられる樹種を使用していることは、前に記した松山市南江戸町発見の弥生時代住居址の木材が、ナラ、カシ、サクラ、クロガネモチなどで、松、杉、桧などが無かったことと一致する現象であって、当時はこれらの遺跡周辺に自生した自然木を伐り取って来て棧を作ったことが知られるのである。

(石川恒太郎)

第3章 地下式古墳群

調査の経過

D・E地区の調査が終った後、振興局の工事が継続されていたが、D地区の東方畠地で地下式古墳が発見されたという報告が野尻町教育委員会から文化課にあった。文化課ではただちにこの地区的調査計畫を立て、F地区として、12月11日から15日まで、第1号墳から第9号墳までと土壇墓第1号、第2号の調査を実施した。その後、更に発見されて、12月25日に第10号墳を、昭和50年1月9日に第11号墳を調査した。

(岩永哲夫)

1 地下式古墳

野尻町の大荻遺跡は地下式古墳群のあるところとして知られ、すでに昭和48年度（48年11月より49年2月まで）に21基の地下式古墳が発見され、これらの古墳は宮崎県教育委員会で発掘調査を行ったが、その報告は別冊で出版することとなったので、ここではこれに引続いて発見された地下式古墳群について報告することとなった。

これらの地下式古墳群は、同じ大荻遺跡でも、前年度に発見された地区的東境を画する南北にこの台地を貫通する道路の東方にあり、第1章で述べた土壇墓群のある所のさらに東側に1群をなして見出だされたもので、昭和35年に発見されて当時宮崎県立博物館学芸員だった鈴木重治氏が調査された地下式古墳も、この群の中に入るべきものである。

ただこれらの地下式古墳の発見は、第1章の土壇墓群のごとく、われわれが工事の事前に積極的に発掘調査を行った結果発見したものではなく、前に記したごとくわれわれは経費の関係で、49年11月12日でこの地区的全調査を終って引揚げたのであったが、その後もここに基盤整備事業は続けられ、その結果これら古墳が次ぎ次ぎと発見されたものである。幸いにして業者のブルトーザーの運転者が、前年米の経験で古墳の状況を知っていた関係から良心的に知らせてくれたため、これらの古墳を調査記録することができたものである。従って玄室の天井が破壊されて発見されたものもあったことは已むを得ない次第であった。以下各古墳の状況についてその構造や内容について記そう。

地下式第1号墳（第34回）

この地下式古墳群のうち、第10号、1号、2号、3号の4基は、10号を東にして1号、2号、3号と順次に西方に、ほぼ1列に並び、何れも竪穴式前室を南に、玄室を北にして営まれていた。

第1号墳は竪穴式前室を南に、羨道と玄室を北にして、ほぼ南北に方位して営まれていた。竪穴式前室は不正半円状で、羨門のある北壁は140cm、弧の半径約140cmで、底は羨門60cm、西側100cm、東側60cm、南側は弧を描いた100cmのもので、現在の地表からの深さは220cm、当時の地表からは約80cmであったと思われた。前室は羨門に向って傾斜しており、底は平らであった。羨門は巾60cm、高さ60cmで羨道の長さは20cm、玄門の巾は60cmで、羨道の天井は平らで、底は竪穴式前室より5cm高く、玄門に向ってやや傾斜していた。玄室は東西200cm、南北の奥行160cmの楕円形で、これも平入型であるが、天井は弧を描き、底は平たく、床面には北壁の中央に近く骨片があり、副葬品は羨道からの入口に近く刀1振が東西に置いてあっただけであった。

遺物〔第47図(1)〕

遺物は人骨は頭蓋骨の痕跡が1個分玄室の北壁のほぼ中央にあっただけであったが副葬品としては刀1振があった。

刀1振、全長62.8cm、身長51.5cm、身巾中央で2.5cm、関巾3cm、棟巾0.7cm、茎は長さ11.3cm、巾2cm、厚さ0.8cmで、柄頭から約3cmのところに目釘穴がある。

第2号墳(第35図)

第2号墳は第1号墳の西方に約10mを距ててこれと平行して営まれていた。玄室の天井はブルトーザーによって剥落しており、内容の調査は危険を伴う状態となっていた。この古墳も堅穴式前室を南に、玄室を北にして営まれていたが、古墳の中軸線は南北の方向に対して約15度玄室が東に傾いていた。

堅穴式前室は、三段をなして羨門に降る長半円形で、上部は北壁の長さ180cmで、東端部が1部内に入っており、南北の径220cm、東西の径は中央で180cmであった。その下に110cm降ったところに1段があり、北壁の長さ140cm、南北の長さ170cm、中央の巾145cmが段をなし、その下に60cm降ったところに底があり、底は羨門の巾80cm、南北の長さ150cm、中央の巾65cmで平面形は舌状をなしていた。そして堅穴式前室の地表から底面への深さは113cmであった。そして前室の底面は羨門に向って漸次傾斜していた。

羨門は巾80cm、高さ80cm、羨道の長さ東壁50cm、西壁20cm、玄門の巾は80cmで、底部は玄室に向って傾斜し、天井は平らであった。

玄室は西壁を底とする梯形に近い長方形で、東西180cm、南北の奥行120cmの平入型で、西壁の長さ130cm、北壁の長さ180cm、東壁の長さ90cmで、羨道は南壁の西側から40cm、東側から45cmの間に開口していた。玄室の天井は落ちていたが、屋根は東壁で床面から55cmのところ、西壁では40cmのところに降っていた。しかし櫛状の施設はなく、天井の形は不明であった。床面には施設はなく、北壁の東端に近い所に刀子1振が北壁に直角をなして柄を北に、刃を東に向けて在り、その西方約35cmのところに骨片のあった跡が残っていた。

遺物〔第47図(2)〕

刀子1振、全長13.2cm、うち身長8.4cm、身巾中央で1.8cm、関巾2.2cm、棟巾0.4cm、柄長4.8cm、茎巾1.3cm、厚0.4cmで木質を半ば残していた。

第3号墳(第36図)

この古墳は第2号墳の西方約15mのところに第1号、第2号墳と併行の位置にあり、堅穴式前室を南に羨道や玄室を北にして営まれていたが、古墳の中軸線は南北の方位に対して50度玄室が東に傾いている。だからこの古墳は堅穴式前室を西南に、玄室を東北に方位して営まれていたというほうが實際に近い。

堅穴式前室はやはり半円形の長い形で、北壁の長さは170cm、南北の径は210cm、中央の径170cmで、平面形は半円形の弧部が長く伸びた形であった。底部は北壁の長さ140cm南北の長さ140cm、中央の径140cmで、ほぼ半円形に近くなっていた。そして地表からの深さは160cmで、底はほとんど平らであった。従ってこの古墳の堅穴式前室は第1号、第2号と同じように、羨門に向って降って行くように作られている。

た。そして羨門は底の西壁から東へ30cm、底の東壁から西へ36cmのところに開口してあり、羨門を蔽うように堅穴の側から自然石の切石を立てかけて閉塞していた。

それでこれらの閉塞石を取り除くと羨門が現われたが、羨門は高さ90cm、巾80cmで、羨道は長さ66cmで玄門でやや開き、玄門の巾は90cmであった。羨道の天井は平らで、底も玄室に向って平らに続いていた。

玄室は東西の長さ260cm、奥行170cmの平入型で、西側は隅丸方形、東側は梢円形の変った形を呈していた。天井の高さは中央部が急激に高くなり、中央部の奥に向って60cmの間は高さ120cmで、奥壁も高さ80cmまではほぼ垂直で、それから緩傾斜をなして天井に続き、羨道の壁も緩傾斜で上って天井に続いており、全体として羨道も玄室も天井が高いのがこの古墳の特徴であった。玄室の床面には何らの施設もなかったが、驚くべきことに、玄室の奥壁に接して木棺が壁と平行して東西に置かれていた。木棺の遺存した長さは200cm、巾50cmであったが、棺は2個重ねて置かれたのが腐朽して下の棺の底が残っていたもので、棺の南側の板が色を異にする2種類並んでおり、1は黄褐色であるのに内側の1は暗褐色を呈していた。

この木棺の上に東に頭蓋骨を置き、足を西に伸ばした人骨と、西に頭蓋骨を置き、東に足を伸ばした人骨と2体の人骨が足を交叉して葬られていたが、長崎大学医学部助手の坂田邦洋氏の見解では頭を東にしている人骨は女性で、頭を西にしている人骨は男性であるということであった。そして足の骨の交叉しているところで女性の脛骨が男性の脛骨の上に重なっていたから、初めに男性が葬られ、その後で女性が葬られたものと推定された。

女性の頭蓋骨のところに2個（1個は3つに折れていた）の細い銀環があり、左手の尺骨の手首のところに貝釦があった。また男性の頭蓋骨の両側にも同様の細い銀環があったが、この銀環の方が女性のものより大形であった。またこれらの人骨の間に骨製のヘラと思われるものが1個あった。さらに男性の頭蓋骨の西方に刀1振が柄部を壁の方にし鉾を棺の斜め外側に向けてあり、その西方玄室の西北隅に馬具の轡、鏡板、喰、引手など13点と辻金具などと、鉄鏃數本が1塊として置かれていた。

これらの遺物の状態から見て、この木棺には1個に2体の屍体を容れることは不可能であるから、木棺は2個で、それぞれ1体の屍体を蔵めて葬ったのが、上の棺や棺の上方部は早く朽ちて喪失され、下棺の底部や棺側部などは、この古墳の玄室の床面に湿気が多かつたために遺存したわけで、発掘の時も木質はなお湿っていた。

また遺物のうち馬具や矢は明らかに木棺外に置かれたものであり、刀は棺の上に置かれていたもので、棺の上部の消失により棺の上に落ちたものと思われる。そしてこれらの遺物が、玄室の奥隅に置かれており、その前面に広い空地を残していることは、将来の死者をここに葬るための配慮によるものと思われる。

この古墳は從来宮崎、鹿児島、両県下において数百基の地下式古墳が発見されたが、未だ嘗て木棺が発見されたことはなかったが、ここに初めて木棺が発見されたことは、今後の地下式古墳の研究に大きい意義をもつものである。前にこの古墳の構造の特徴として、羨道や玄室の天井が高いことを記したが、これはこのような木棺を運び込むのに便利よく造られているもので、玄室の天井が高いのは、このよう

に木棺を重ねて葬るための用意と思われるのである。

遺物は人骨2体と銀環4個、貝釧1個、刀2振、刀子1振、ヘラ状の骨製品1個、鉄鎌平根6本、および馬具であった。人骨については第4章に譲る。

副葬品〔第47図(3)～20〕

1 銀環4個

4個のうち西方の頭蓋骨の両側にあった2個は直径4mmの円い銅の棒を円形に曲げて銀を冠せたもので、1個は環の径2.5cm×2cmであり、1つは環が開いているので環の径は2.6cm×2.3cmとなっている。しかし何れも長さ6.3cmぐらいの細い銅の棒を曲げて銀を冠せたものである。

小さい方の2個の1つは径3mmの円い銅の棒を円形に曲げたもので、環の径は2cmである。他の1つは3個に折れていたが、半ばを残して他の破片は不明となった。環の径は同じである。なおこれら4個の銀環には、表面に朱が付着していた。

2 貝釧 1個

イモ貝を輪切にしたもので、輪の直径は7.8×8.5cmであるが、内径は6.7×6.8cmで、貝の巾は0.8cm内外である。

3 刀 2振

長い方は柄頭を欠いているが、現長60cm、うち身長47.9cm、身巾中央で2.5cm、関巾3cm、棟巾0.5cm、鍔はややふくらつき小切先の形で、身に鞘の木質を少し残している。柄部は長さ12.1cm、柄の木質が残っていて茎は見えない。柄は丸味を帯び、巾3cm、厚さは上(棟)部で1.8cm、下で1cmであるが、鍔元から柄頭へ4cmぐらいの所まで柄の木質を巻いた部分が残っている。短かい方は全長25.5cm、身長19.2cm、身巾中央で1.7cm、棟巾1cmで鍔はふくらかれている。柄は長さ6.3cmで、木質で巻われており、鍔元の巾2.7cm、柄端の巾1.5cmである。

4 刀子 1振

全長17.2cm、うち身長11.5cm、身巾1.3cm、棟巾0.5cmで、柄部は長さ5.7cmで木質に巻われており、巾鍔元で2.5cmである。

5 ヘラ状の骨製品1個

何の骨か明らかでないが、全長11cm、巾1cm、先端は折れているようでは現在の巾0.7cm、他の端は巾1.1cm、厚さは0.3cmで先端がやや上り気味である。今のところ用途は不明である。

6 鉄鎌 6本

みな平根であるが、このうち1本は長5角形の鉢形のもので、他の5本はむしろ長3角形に近い。鎌1、これは長5角形のもので、現長12.5cm、鎌長7.5cmで最広部の巾2.4cm、厚さ0.3cm、最広部のところに花形のような長さ1cm、巾0.5cmの孔がある。透で矢を軽くするためと思われる。鎌は竹籠で長さ5cmが残っている。鎌の径は0.8cmである。

鎌2、これは長3角形で龍舌形に近い。現長14.5cmで、鎌長7.3cm、最広部の広さ2.7cm、厚さ0.3cmでこれも最広部のところに菱形の透がある。やはり竹籠が7、2cm残っている。

鎌3、これはやはり龍舌形に近いもので、全長19.2cm、うち鎌長6.5cmである。最広部の巾2.2cm、厚さ0.3cmで、竹籠が9.7cm残っている。

鐵4、これは最も長く現長22cm、鉄長6.5cm、最広部の巾2.5cm、厚さ0.2cmで、竹籠であるが、巻口が大きく膨んでいるのが特徴的である。

鐵5、これは現長15cm、鉄長6.8cm、最広部の巾2.3cm、厚さ0.3cmで竹籠が残っている。

鐵6、現長13cm、鉄長6.3cm、最広部の巾2.3cm、厚さ0.3cm竹籠が残っている。

7. 馬具、馬具は轡1個と辻金具3個と尾銃1個であった。

轡は鏡板と喰、引手から成るものであるが、鏡板は長さ11cm、巾7cmのD形に似た形の鉄板2個よりなり、鉄板の厚さは0.2cmぐらいであった。

喰は馬の口に喰ませるもので、長さ9.6cm、径0.7cmの丸い鉄器が2本繋がれていて、その両端は鏡板に取りつけられていた。そして鏡板には、これを面繫に取りつける面繫付があるが、それは長さ13cm直径0.7cmの鉄棒より成るものであった。喰先鎌に遊金の鎌があり、それに更に手綱に繋ぐ引手があるが、遊金の鎌は直径5mmの円い鉄棒を環状に曲げて直径6cmの環状にしたもので、引手は長さ17.5cm、径0.6cmの鉄棒をもって作られていた。

辻金具は3個で、鉄製であり、多少の差はあるが、十字形の大きさは7cmで、中央の円形部の大きさは径3cm、高さ1.5cm内外である。これが3個あることは、尻繫と、面繫の両面を飾ったものではなかろうかと考えられる。

尾銃は1個で、長さ4.3cm、巾2.5cmで、径0.4cmの丸い鉄を曲げて作られていた。中央の舌の長さは約6cmである。これは繫の最後を締めるもので今日のバンドを締めるものと同じである。

なおこの古墳にあった木棺その他については、3の遺物において詳記する。

第4号墳（第37図）

第4号墳は第3号墳の南南東約20mのところにあり、竪穴式前室を西に、羨道や玄室を東にして喰まれていたが、古墳の中軸線は東西の方向より玄室が20度北に傾いていた。竪穴式前室はほぼ隅丸方形に近く、上部は東西の長さ220cm、南北の巾220cmで、西方から東方の羨門に向って傾斜し、地表から124cm下の底部では東を底とする梯形状を呈し、東壁の長さ140cm、西壁の長さ90cm、南壁の長さは100cm、北壁の長さは110cmであった。羨門は東壁の北から40cm南から40cmのところに開口しており、細長い楔状の自然石を横たえて石垣状に積みあげて閉塞していた。

羨門は巾60cm、高さ50cmで、羨道は長さ80cm、玄門に向って広がり、玄門の巾は100cmであった。天井は平らで底は玄室に向ってやや傾斜していた。

玄室は家形をなし、南北に長い長方形で、羨道に対して平入となっているが南の壁が広く、東壁も西侧より長い。南壁の長さは160cm、北壁は104cm、東壁は260cmで中央が外側に張り出していた。西壁の北から60cm、南から80cmのところに羨道が開口しており、西壁は南北とも西方に傾斜していた。これらの壁にはみな床面から26cmの高さのところに棚状施設をめぐらしているが、棚の巾は甚だ狭く、広い所で8cm、大部分は4cmぐらいで、ほとんど形式的のもので、遺物は全く載っていなかった。天井は四注（寄棟）造りの屋根形で、南壁の中央から56cm、北壁の中央から80cmのところに長さ南北に120cm、高さ床面から120cmの棟があり、これから四方の壁に向って屋根が降りていた。

玄室の床面には何らの施設もなかったが、遺物は人骨1体が北壁の中央に頭蓋骨を置き、足を南方にして葬られ、その東側にも人骨1体がこれと平行して葬られていたが、これは南に頭蓋骨を置いて葬ら

れていた。副葬品は刀子1振と鉄鎌數本が一括して南壁のはば中央のところにあった。

遺物は人骨2体と刀子1振、鉄鎌10本であったが、人骨については、第4章に譲る。

副葬品〔第47図22～26〕

1. 刀子 1振

全長24cm、うち身長17cm、全体に木質を残しているが、身巾2cm、棟巾は不明である。柄部は長さ7cm、鐔元に鷹角装が施されているが、茎巾は2cmで、柄頭から1.5cmのところに目釘があり、孔にきちんとはまっていた。

2. 鉄鎌 10本

みな平根3角形に近い刃を有するもので最広部巾は2.5cm内外、鎌長11cm～8cmで形は前号のものと殆んど同じであった。

第5号墳（第38図）

第5号墳は第4号墳の西方約15mのところにあって、堅穴式前室を南に、玄室を北にして営まれていたが、古墳の中輪線は南北の方向より玄室が35度東に傾いていた。堅穴式前室は長方形で、上部は隅丸の長方形をなし、南北の長226cm、東西の巾170cmで、その下に北に向って傾斜した段があり、底部は北壁の長さ120cmを底とする3角状を呈し、頂点までの長さ120cmであった。そして底面は地表面からの深さ120cmで底は平坦であった。

羨門は西壁から50cm、東壁から40cmの北壁にあり、底巾60cm、高さ34cm、上巾50cmで、これも模状の長い石を横にして積上げて羨門を閉塞していた。羨道は西側は長さ46cm、東側は80cmで玄室に接続しているが、その巾は喇叭状に玄室に向って広がり、その接点では130cmに広がっていた。天井の高さは50cmでほぼ平らであり、底は羨門で前室の底より10cm急に低くなり、次第に降って玄門での低さは20cmとなっていた。

玄室は羨道の奥に広がって東西に長く、羨道に対して平入となり、東西の長さ214cm、巾70cmの不正長方形で、南壁の長さ40cm、北側は長さ210cmでやや外側に張り出し、西壁は羨道まで南壁と1線となって長さ110cm、南側の西壁も羨道の壁と1線をなしていた。床面は平らで何の施設もなく、天井は中央が高く底面からの高さは70cmで、前後に低くなっていた。玄室には人骨1体が頭蓋骨を東に、足を西にして葬られ、その左腕の尺骨のあたりに数本の鉄鎌が鎌を西に向けて並べられていた。

遺物は鉄鎌8本であったが、鎌はみな平根であった。〔第48図(1)～(8)〕

鉄鎌1、現長13.5cm、鎌の長さは9cmで龍舌形に近いが、身が短かく、身から茎の間が長いのがこの区の鉄鎌の特徴であった。身の最広部巾は2.5cmで、厚さ0.2cmで、長さ4.5cmの竹籠がついている。

鉄鎌2、現長13cm、鎌は龍舌形に近く、長さ8cm、身の最広の巾3cm、厚さ0.3cmである。籠は巻口と根太巻が膨れており、その折口から茎端が見えておりこれまで測って全体の長さが13cmで籠の長さは4.2cmである。

鉄鎌3、折れているが、接合して現長15.8cm、鎌は短かい龍舌形で、鎌長は8.7cm、身の最広の巾2.7cm、厚さ0.25cm、竹籠の長さ7cmである。

鉄鎌4、現長10.5cm、これも籠の折れた所から茎の先端が出ている。鎌は長さ8cmで身の最広の巾2.7cm、厚さ0.25cm、籠の長さは1.9cmである。

鉄鎌5、現長14でやはり龍舌形に近いが、前の4本に比して5 6 7 8の4本は身から茎に細まる部分が、前のものよりやや丸味をもっている。鎌の長さ7.3cm、身の最広の巾2.6cm、厚さ0.2cm、竹籠の長さ6.7cmが残っている。

鉄鎌6、現長14.5cm、鎌長8.3cm、身の最広部の巾2.8cm、厚さ0.3cm、身から茎に続く部分が厚く厚さ0.4cmある。竹籠は長さ6.2cmが残っている。

鉄鎌7、これも竹籠の折れ口から茎の先端が出ているが、全長12cm、鎌長8.2cm、身の最広部の巾2.2cm、厚さ0.3cmで竹籠は2.4cm残っているが巻口が膨らんでいる。

鉄鎌8、身の先端が欠失しており龍舌形で現長18.5cmで最も長く、鎌の長さ8cm、身の最広部の巾3cm、厚さ0.2cmで、籠は長さ10.5cmで茎0.5cmである。

第6号墳（第39図）

第6号墳は第5号墳の東東北約25mのところにあって竪穴式前室を北に玄室を南にして営まれていたが、古墳の中軸線は南北の方向より玄室が20度東に傾いていた。竪穴式前室は上部は南側を弦とする半円形に近い形で、南壁の長さ125cm、南北108cm、東西は中央で120cmであった。底部は南壁が長さ180cm東壁が140cm、北壁は外に張り出しているが長さ130cm、西壁は170cmで、梯形に近い形であった。底は平たく、地上からの深さは200cmであったが、この付近はブルトーザーで畑の表面から約70cmも削平しているので、元の畑の表面からは270cm下となる。

羨門は南壁のほぼ中央の西端から20cm、東端から30cmのところに開口し底の巾58cm、高さ40cm、天井巾50cmであった。羨道の長さは東壁30cm、西壁で25cm、巾は60cm、天井は玄室に向って約20度の角度で登っており、底は羨門で前室より5cm高くなり、それから玄室に向って5cmだけゆるにやか降っていた。

玄室はその奥にあったが、底面は東西に長い隅丸の長方形で、羨道に対して平入となっており、西壁は長さ135cm、南壁は長さ190cm、東壁は長さ110cm、北壁は東から80cm、西から40cmを残して、その間に羨道が開口していたが閉塞はなかった。床面は平らで何らの施設もなかったが、室の西南隅に頭蓋骨片があり、その東方の南壁に近く足の骨片があり、室の中央のほぼ北寄りの西壁に近く頭蓋骨の跡があり室のほぼ中央に大腿骨や脛骨などがあったので、ここには頭を西にし、足を東にして2体の人骨が葬られていたことが知られた。副葬品は東南隅に近い所に鉄鎌1本が鎌を南に向けてあったほか刀子の折片が1個あつただけである。玄室の天井はブルトーザーで破壊されていたのでその形も高さも知ることができなかった。

遺物〔第48図(9)〕

鉄鎌、平根で龍舌形に近く、現長14.8cm、鎌長7cm、身の最広部の巾3cm、厚さは0.2cmである。これも身から茎へ続く部分が厚く、厚さ0.3cmで、竹籠は長さ7.8cm、巻口が膨らみ、籠の径1cmである。

第7号墳（第40図）

第7号墳は第6号墳の南方約27mのところにあるが、この古墳は去る昭和35年に鈴木重治氏が調査された地下式古墳の東南13mのところにあたるのである。この古墳は竪穴式前室を南に玄室を北にして営まれていたが、古墳の中軸線は南北の方向より玄室が40度東に傾斜していた。

竪穴式前室は弧部の長い半円形に近い形で、上部は羨門のある北壁の長さが140cm、南北の長さは185cm、東西の径は中央で140cmで、底部に向って斜めに降っており、底部は北壁が長さ115cm、南北の長さ

120cm、中央の径100cmである。そして北壁の東から30cm、西から20cmのところに玄門があり、玄門は巾65cm、高さ55cmであるが、その外側をやや大きい自然石を立てて閉塞していた。

通道は長さ60cm、巾60cmであるが、玄門ではやや広く75cmとなっていた。通道の高さは55cmで天井は平らであるが、玄門のところから破壊されていた。底部は通道の半ばまでは玄門から傾斜し、中央で約10cm降って玄室に入っていた。

玄室は東西の長さ245cm、南北の奥行は通道の東側135cm、西側140cmで通道に平入の四注造り家形をなし、床面から48cm内外のところに棚状施設をめぐらす整然たる形で、棚状施設の巾は狭いところで5cm、広いところで10cmを計った。しかしこの上には遺物はなかった。床面には何の施設もなかったが、西北隅に頭蓋骨が北を向いてあり、その東方に北壁に平行に入骨1体が膝を少し曲げた形で葬られており、東壁のほぼ中央に近い所にも頭蓋骨が1個あり、これからその西方に入骨1体が、足を西方に伸ばして葬られていた。

副葬品は東南隅に剣1振が東壁に直角に鉾を壁に突き刺すように置かれており、その西に接して蛇行剣が1振東に頭を置く人骨の南側に、これと平行して柄を東に鉾を西にして置かれ、蛇行剣の上に小形の長方形の砥石が1個置かれていた。しかしこの砥石は間もなく紛失したのは遺憾であった。そしてここに刀が1振、鉾を北に向けて向けてあった。

玄室の天井は四注造り屋根形で、東壁から50cm、北壁から67cmのところを東端に、西壁から55cm、北壁から75cmのところを西端として、長さ145cmの棟が東西にあり、四方の屋根がこれから四方の壁に向って降っていたが、棟から南側はブルトーザーによって壊されていた。しかし棟の高さから東側に1部遺存していたので床面から110cmの高さであったことを知ることができた。

遺物〔第48図00～04〕

1. 蛇行剣 1振

全長66.8cm、身長55.5cm、身巾中央で3cm、闊巾3.6cm、厚さ0.5cmで、身はほぼ中央で1回蛇行している。柄部は長さ11.3cmであるが、剣身に対して10度ぐらい傾き木質をよく残しており、鐔元は木質の巾4.5cmで鹿角装が施こされていたらしいが、鉄錆のため壊れている。柄頭部には木質が残り半ばから縦に割れて茎が見えているが、茎は柄端で巾が0.8cm、見えている反対の所で巾1cmであるが、柄頭から1.5cmと4.6cmのところに目釘が2個残っている。この茎を蔽うて柄の木質が残っており、それによると柄の巾は2.6cmぐらいであったと思われる。

2. 剣 1振

全長27.5cm、身長は21.3cm、身巾中央で2.5cm、闊巾3.5cm、厚さ0.4cmで、茎は長6.2cm、巾2cmで、柄頭部は木質で蔽われている。

3. 刀 1振

全長28.2cm、身長20.5cm、闊巾2.7cm、中央の巾1.8cm、棟巾は0.2cmである。身には所々に木質が残っている。茎は巾1.2cmで厚さは0.2cmで、鐔元の付近に木質が残り柄部にも鹿角装が見られ、柄頭から1cmのところの刃寄りのところに小孔がある。

(石川恒太郎)

第8号墳(第41図)

第8号墳は、最も東側から発見されたもので、第1号墳の東方約9mのところにあり、竪穴を南に、玄室を北にして營まれていたが、中軸線は南北の線より25度東に傾いていた。

竪穴は上面が大きく南北230cm、東西260cm、深さ170cmであるが、深くなるにつれて狭くなり、南北160cm、東西130cmになる。閉塞には大きな土塊を用い、完全に塞いでいた。

羨道は長さ20cmで短かく、幅80cm、高さ80cmであった。玄室は、平入りの長楕円形をなし、天井はドーム形で、竪穴の規模に比べると、意外に小さく感じられた。長径220cm、短径125cm、最大高は86cmで、天井は羨道の高さが大体平行に続いている。床は竪穴床面より18cmほど深くなっていた。

人骨は1体であったが、頭蓋骨がわずかに残っていた。副葬品は、玄室中央部に刀子1本、鉄鎌6本が残っていた。〔第48図19～20〕

刀子——ほぼ完形品で、全長17cm、柄長4cm、身長13cm、身幅は中央近くで1.6cmである。

鉄鎌——6本の内、5本は三角平根鎌で、身幅2.6～3.0cmだが、1本は斧矢である。

第9号墳（第42図）

第9号墳は、第11号墳の北西約19mの地点に位置し、新しく整備される羨と羨の法面に竪穴部が破壊されて閉塞土塊が発見された古墳で、竪穴を北東に玄室を南西にして營まれていた。竪穴は大半が破壊されているが、幅は100cmで計測可能である。ほとんど方形に近い形であろうと考えられる。閉塞には、二個の大きな土塊を用いていた。羨道の長さは東側で35cm、西側で55cm、幅は羨門部で61cm、最奥部で70cm、高さ48cmである。

玄室は、平入り寄棟造りで天井等しっかりとして構築当時をそのまま伝えている。長径218cm、短径100cm～120cm、天井は85cmの高さである。わずかながら柵状施設が見られるが、副葬品が載せられるほどのものではない。

人骨は1体で、ほとんどが完全に近く、9号人骨と名付けられた。その他刀子が1本頭蓋骨に平行して副葬されていた。

刀子——全長16cm、柄長8.2cm、身長7.8cm、身幅は中央付近で1.1cmである。柄は鹿角装でかなり残存している。〔第48図20〕

第10号墳（第43図）

第10号墳は第6号墳の南方約8mの地点に位置し、竪穴を南西に、玄室を北東にして營まれていた。竪穴は南北に長く180cm、東西130cmで、深くなるに従って狭まっていく。閉塞は、羨門部閉塞で、自然石を下に敷き、その上に板石を立てて、塞いでいた。羨道は、長さ50cm、幅68cm、高さ70cmでその形は方形である。玄室は、平入り寄棟造りで、平面形は梯形をなし、入口に近い辺は235cm、奥壁の辺が190cmである。奥行は中央付近で170cmである。天井の高さは陥没のために不明である。なお羨門部付近、玄室内は朱を全面塗布していた。

人骨は1体で、全身に朱が見られた。副葬品は刀子1本と貝輪1個であった。〔第48図21～22〕

刀子——小型のもので、全長7.5cm、柄長3.2cm、身長4.3cm、身幅は中央付近で0.9cmである。

（岩永哲夫）

第11号墳（第44図）

第11号墳は第1号墳の北方約20mのところにあり、竪穴式前室を南に、玄室を北にして営まれていたが、古墳の中軸線は南北の方向より約20度玄室が西に傾いていた。

竪穴式前室は、羨門のある北壁を弦とする長い半円形状を呈しており、北壁の長さは160cm、弧の頂点は弦部の中央から230cm、中央部の径は165cmであった。この上部から底部に向って、南から北に階段状に降って底部に達するが、底面は羨門のある北壁が長さ135cmで、南北の長さ70cmの東西に長い不正長方形を呈していた。底面の地表からの深さは130cmであるが、もとの畠の表面からは、やはり70cm内外の地層が削り取られていた。

羨門は北壁の西から27cm、東から35cmのところに開口しており、巾は底部で80cm、上部で75cmで、高さは60cmであった。羨道の長さは50cm、巾は羨門から玄門に向って広がり、玄門においては95cmであった。羨道の天井は平らで中央での高さは70cmであった。底は羨門から前室より約10cm降って玄室に続いている。そして羨門は大きい粘土で閉塞されていた。

玄室は東西の長さ230cm、南北の奥行115cmで、羨道に対して平入となっており、東壁は長さ90cm、北壁は長さ200cm、西壁は丸く西方に張出して径80cm、南壁は西から60cm、東から55cmのところに羨道が開口していた。玄室の頂上部は破壊されていたが、天井は残存部から見て半円形を呈していたことが知られた。もっとも高さは不明であった。床面は平らで何らの施設もなく、北壁の中央あたりに鉄鎌が1塊となっており、東壁に近く刀1振が柄を東に鋒を西北に向けて置かれ、その南方に刀子1振と鉄鎌があった。

遺物〔第48図例～例〕

この古墳に副葬されていた遺物は刀1振、刀子1振、鉤2本、鉄鎌5本であった。

刀1振 全長24.5cm、柄長6.5cm、身長18cm、巾1.8cm、棟巾0.5cm、関巾2.5cmであった。柄部には柄元近くに半ば以上木質を残しており、基は巾1.9cmで厚さ0.3cmであった。

刀子1振 全長13.5cm、身長10.8cm、柄長2.7cm、巾1cm、棟巾0.3cm、柄部には木質を残しており、基は計ることができない。

鉤(1) 折れているが接合して現存の長さ13.5cm、穗の長さ2m、穗巾は1cmである。

鉤(2) 全長5cmが残存し、穗長2cm、穗巾1cmである。

鉄鎌(1) 全長12.3cm、鎌の形は四角形を呈しており、長2cm、巾1cm、後世の丁字形を思わせる形で、尖根である。

鉄鎌(2) これは折れており、鎌部は長さ5cmに2.5cmと6cmの竹部がついており、鎌は刃渡2.5cmの逆三角形で、後世の斧箭に当る。鎌には竹に桜の皮を巻いており、竹の径は1.9cmである。これは平根である。

鉄鎌(3) 全長12.7cm、尖根で鎌部は長さ2cm、巾1.2cmの蟹根に近い形である。

鉄鎌(4) 総長21.4cm、鎌部の長さ3cm、後世の竜舌形に似ている。

鉄鎌(5) これらは破片で接続しないものが3片である。

(石川恒太郎)

2 遺物

以上に述べた下区発見の遺物のうちの主なものについて少しく述べたいが、それは第3号墳発見の

木棺、ヘラ状の骨製品、および第7号墳発見の蛇行剣についてである。

(1) 木 棺

これは第3号墳の実測図に見られるごとく、棺は底部と側壁部の1部を残すのみで、玄室内の奥壁に接して長さ200cm、巾50cmのもので、高さは不明であるが、底から側壁に接する部分は直角ではなく丸くなっていた。そして鉄釘は全然なかったことから、この木棺は大きい樹を削り抜いたものであろうと考えられる。また木棺上には東に頭蓋骨を置いて足を西方に伸ばした女性の人骨と西に頭蓋骨を置いて東方に足を伸ばした男性の人骨が重なり合っていたが、この木棺に二人の屍体を容れることは不可能と思われる。しかも木棺の側壁の部分が内側と外側に木質の色の異なるものが二重に存在したから、或いは蓋と身という見方も成り立つが、玄室の天井が特に高く作られていることと考え合わせて、木棺は2個積み重ねて置かれていたものと考えることが妥当のように思われる。

これについて参考になる事例は昭和44年4月13日に栃木県都賀郡大平町西山田で古墳時代中期と見られる古墳から舟形の木棺が発見されたことで、①これは東京国立博物館の当時考古課長だった三木文雄氏や文化庁の文化財調査員井上正道氏らが調査されたもので、木棺は完全な形で出土し直径約1mの丸太を割って中を削り抜いて遺体を入れた後蓋をしたものと考えられた。調査された三木氏らは底の部分が舟底形になっていること、全体に丸味をもっていることなどから舟形木棺と断定されたようであるが、この第3号の木棺も舟底形に近いように感じられる。果して舟形であったかは確実でないが、削り抜いたものであることは確かである。

宮崎県の地下式古墳から木棺を発見したのはこれが初であるが、さきに昭和34年に当時県立博物館の学芸員であった鈴木重治氏が、このF区で発掘調査した地下式古墳の玄室には4個の自然石が奥壁に近く棺台状に配置されており、人骨2体分がこの台石の間に在ったことから、人骨は木棺に入れて台上に置かれていたことが想像されたのであった。②しかし今回の同地区における木棺の発見で、この想像は事実化したわけである。そればかりではなく、地下式古墳の埋葬について、木棺の発見は大きい指標を与えるものである。

(2) ヘラ状の骨製品〔第47図(8)〕

現物は前に述べたごとく、全長11cm、巾は先端部近くで0.7cm、他の端で1.1cm、厚さは0.3cmで、1面は平坦であり他面は弧状で中央が高く、断面は低い半月状を呈する。そして2ヶ所に何かで縛綱した跡がある。表面に鉄錆がくっついて汚れているので何の骨か解らないが、以上の形状から見て、平坦な1面に木片か何かを当てて縛綱されていたものであることが知られる。現在のところその用途は明らかでないが、福岡市夜臼や下関市吉母浜などの遺跡から発見されている鯨骨製のアワビオコシと考えられているものと形がよく似ている。西諸島郡野尻町の大森という霧島山の麓の地下式古墳から海岸の住民の用具と思われるアワビオコシと考えられる骨製品が出土するということは、余りに飛躍した考え方のようであるが、次に記す蛇行剣とともに、地下式古墳の性格を示すものと考えれば興味深いものがある。

(3) 蛇行剣〔第48図(9)〕

蛇行劍は前にも「えびの」市久見追その他で地下式古墳から出土したが、今回第7号墳から出土したものは、総長66.8cmで、柄が身に対して10度ぐらい傾いているという変ったものであった。蛇行劍は一般にスマトラのマライ族の華美なる剣として知られるもので、刀身が蛇のように曲っているのはナガ蛇を象ったものとされている。わが国では後藤守一氏が石川県江沼郡勘使町狐塚と兵庫県加西郡在田村の古墳から発掘されたのをはじめ各地から出ているが、珍らしいもので主として前期古墳から出土するものであることは注目を要する。

(石川恒太郎)

①毎日新聞、昭和44.4.20付

②鈴木重治氏「野尻町大荻地下式横穴」(宮崎県文化財調査報告書、第5輯)

3 土 墓

土壙墓第1号(第45図)

F地区では、土壙が2基発見され、東から1号、2号とした。1号は、地下式2号と地下式3号の中間に位置し、地下式2号の西北西約8mの地点にある。

D地区で見られた如く、長軸線は東西に近いが、北へ16度振っている。長径113cm、短径74cm、深さ約20cmであるが、ブルドーザーがかなり深く、掘削しているので、土壙墓はどうにか形を留めるくらいにしか残っていない。遺物は全然みられなかった。

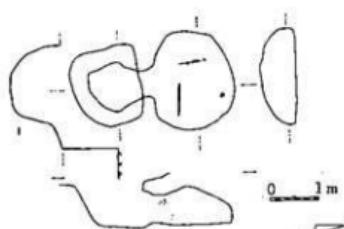
土壙墓第2号(第46図)

2号は、地下式3号と地下式6号との間に位置し、3号の西約25mの地点にある。

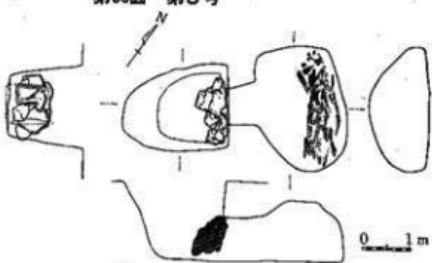
長軸線は、南北に近く西へ12度振っている。長径約170cm、短径約75cm、深さ約50cmで、これもブルドーザーのため、かなり削られている。この土壙には鉄製品が1本、東側北寄りに立てかけられていた。その他の遺物は何もなかった。

(岩永哲夫)

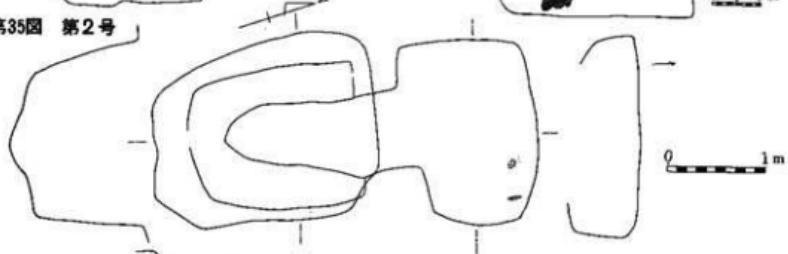
第34図 第1号



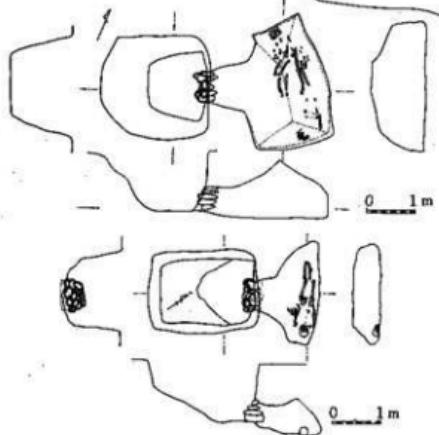
第36図 第3号



第35図 第2号



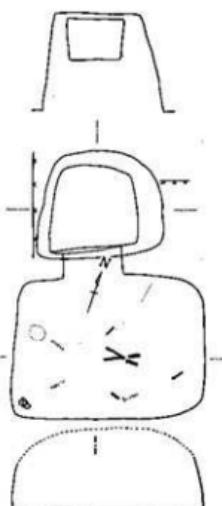
第37図 第4号



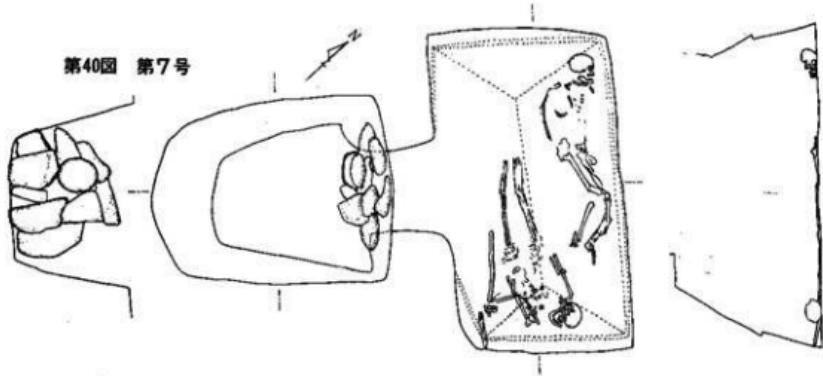
第38図 第5号



第39図 第6号

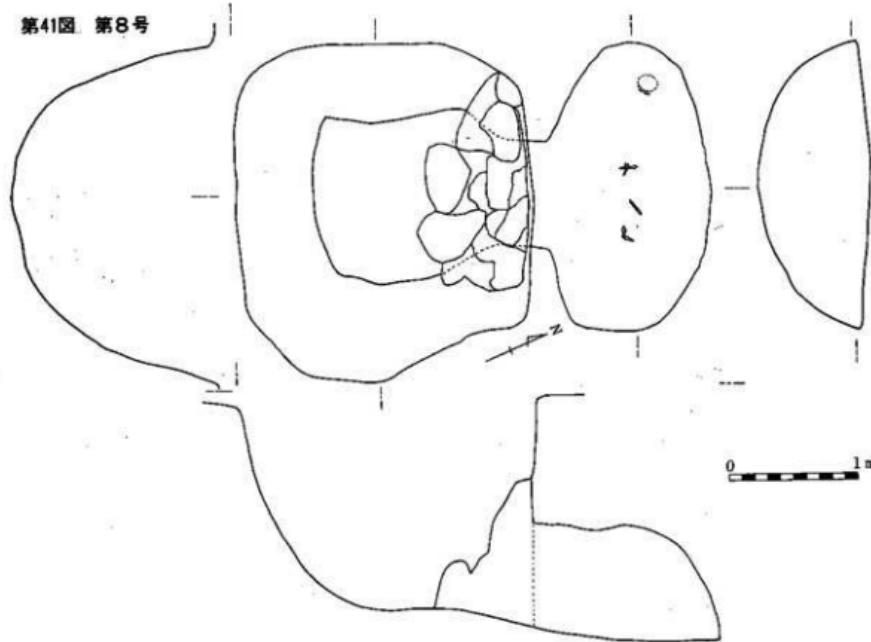


第40図 第7号



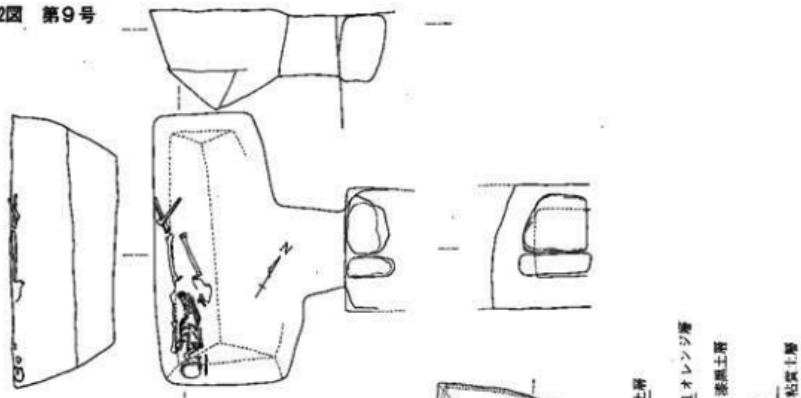
0 1m

第41図 第8号

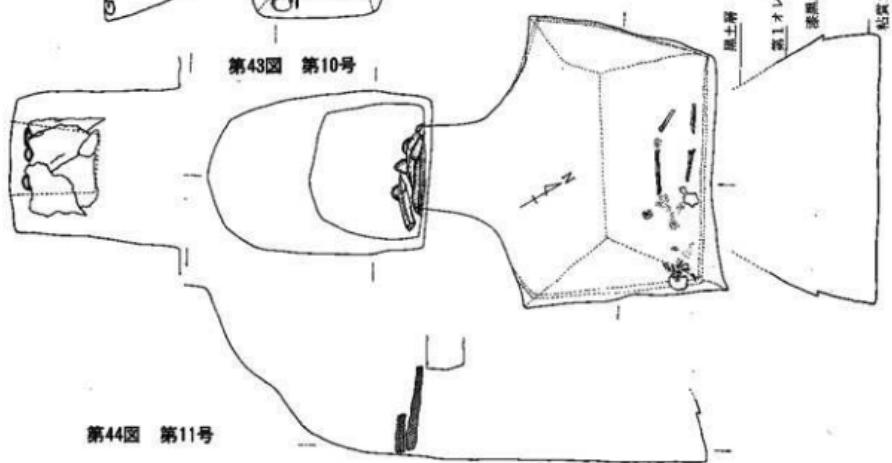


0 1m

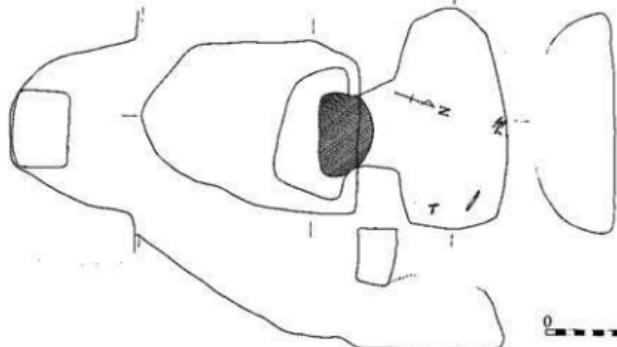
第42図 第9号



第43図 第10号

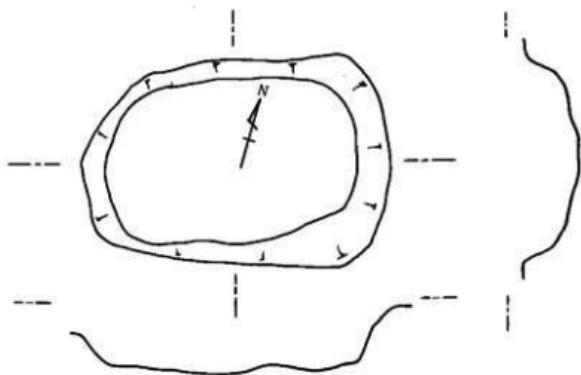


第44図 第11号

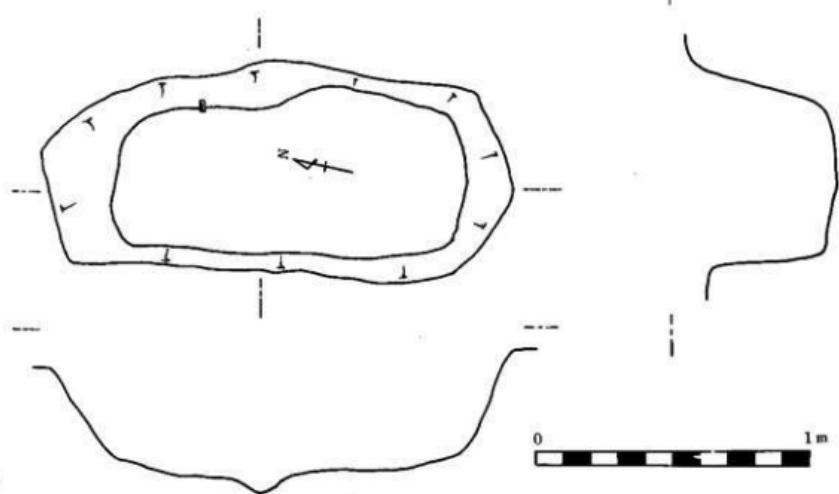


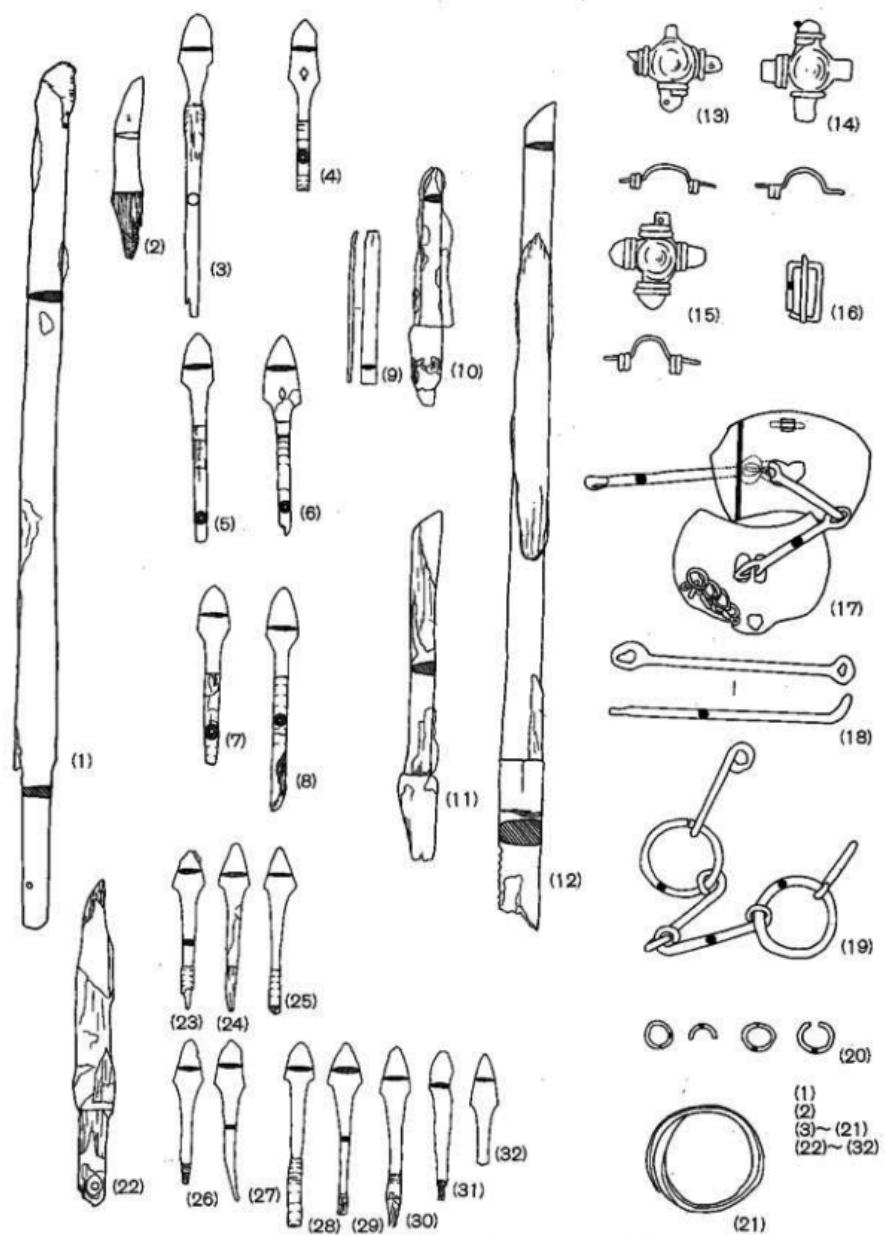
11号墳

第45図 第1号土壙墓



第46図 第2号土壙墓

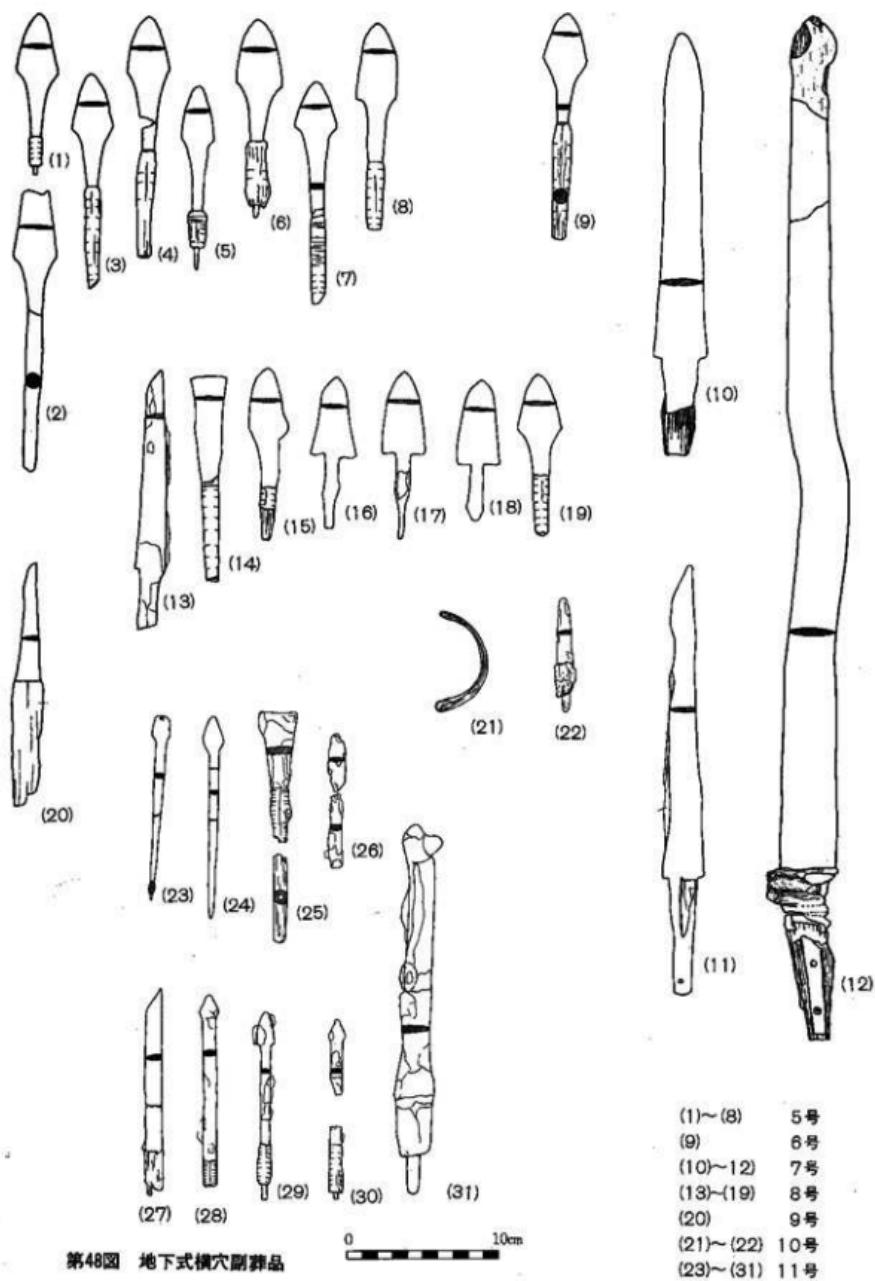




第47図 地下式横穴副葬品

0 10cm

1号
2号
3号
4号



第48図 地下式横穴副葬品

第4章 人骨とその埋葬方法

内藤芳篤

1 人骨

大森地下式古墳群のF地区調査によって合計13体の人骨が出土した。これらのうちには骨片のみを残しているものもあったが、7号、8号、9号、10号人骨の4体は頭蓋骨の保存状態が比較的良好であり、以下主としてこれら頭蓋骨の観察および計測成績について、その概要を述べてみたい。

所見

主なる頭蓋骨計測値は表1に示すとおりである。

(1) 7号人骨(女性、壮年)

1) 頭蓋骨

脛頭蓋の左側半部を欠き、顔面頭蓋では左側眼窓外側縁、頬骨等を欠如している。

脛頭蓋の縫合はやや密で、外面には瘻着が見られない。前頭部はやや膨隆し、乳様突起は小さく、外後頭隆起の突出も見られない。

頭骨最大長は177mmで、最大幅の計測はできないが、長径に比して幅径は大きいもののように、短頭に傾いているものと推測される。バジオン・ブレグマ高は130mmで、頭骨長高示数は73.45となり、orthokran(中頭)に属している。

顔面頭蓋では眉間および眉上弓の隆起は弱く扁平である。鼻根部の陥凹も浅く、幅は広いが隆起は著明でない。

顎高は107mm、上顎高は60mmで低い。幅径の計測はできないが、高さの割りには広いようで、顎型としては低・広顎の傾向がうかがわれる。眼窓幅は40mm、眼窓高は31mmで、眼窓示数は77.50となり、mesokonch(中眼窓)に属し、鼻幅は24mm、鼻高は44mmで、鼻示数は54.55を示し、chamaerrhin(低鼻)であった。また顎面角は全側面角が84°、鼻側面角が89°、歯槽側面角が71°で、とくに著明な突顎性は認められない。

また鈴木の方法により鼻根部の計測を試みたが、前眼窓間幅($m_f - m_f'$)は19.5mm、横弧長($m_f - m_f''$)は22.0mm、彎曲示数は88.64であり、前頭突起水平傾斜角は108°であった。すなわち鼻根部は広くて低いことを示しており、観察所見ともよく符合するものであった。

下顎骨の大きさは中等度で、骨体の厚さはやや薄く、余り頑丈なものではない。また下顎枝は後方傾斜がやや目だっている。

歯は錐状咬合で、咬耗度はBrocaの1度、第3大臼歯の崩出は見られない。禹齒はなく、風習的拔歯の所見を思わせるものもない。なお歯式は次のとおりである。

M₂M₁P₃P₂P₁C I₂I₁|I₁I₂CP₁P₃M₁M₂ (／:骨破損)
M₂M₁P₃P₂P₁C I₂I₁I₁I₂

2) 四肢骨

四肢・軀幹骨の保存はよくないが、そのうち右側の大転骨が比較的よく残っていた。

大腿骨は女性としては大きいが、扁平性や柱状形成などは見られない。

最大長は(410mm)、骨体中央の矢状径、横径共に26mmで、断面示数は100.00となり、また中央周は85mmであった。

Pearson の公式を用いて、身長推定値を算出すると、152.59cmであった。

(2) 8号人骨(男性、壮年)

頭蓋骨

脳頭蓋のうち右側の頭頂骨、側頭骨の大部分を欠き、また後頭骨の右側半部を欠如している。顔面頭蓋では右側の頸骨が破損しているが、その他はおおむね残っている。

脳頭蓋の縫合はやや疎で、三主縫合に瘻着は見られない。前頭部の膨隆は弱く、乳様突起は比較的大きく、外後頭隆起の突出が見られる。

頭骨最大長は190mmで長く、最大幅の計測はできないが、比較的狭いようであり、かなり強い長頭性が推測される。バジオン・ブレグマ高も141mmで高いが、頭骨長高示数は74.21で、orthokran(中頭)の上位を占めている。

顔面頭蓋では眉間から眉上弓にかけて隆起し、鼻根部は幅が広いが、隆起度は著明でない。

顔高は120mm、上顎高は(67mm)で低いが、中顎幅は108mmでかなり広く、したがってVirchowの顎示数は111.11、上顎示数は(62.04)となり、顎型としてはそれぞれchamaecephaloprosop(低顎)、hyper-chamaecephaloprosop(過低顎)に属している。こうした傾向は眼窩および鼻部にも見られ、眼窩示数は両側共に70.21、鼻示数は56.25で、それぞれchamaekonch(低眼窩)、chamaerrhin(低鼻)に属している。また顎面角は全側面角が(84°)、鼻側面角が88°で、歯槽側面角が(75°)となり、突顎の傾向は著明でない。

次いで鼻根部の計測では前眼窓間幅($mf-mf'$)が20.6mm、横弧長($mf'-mf$)が23.0mmで、弯曲示数は89.57となり、また前頭突起水平傾斜角は93°であった。

下顎骨は大きく、骨体も頑丈であるが、下顎枝は後方に傾き、長径に比して幅径が広いものではなくまた下顎切痕も深く、筋突起の発達も良好ではない。

齒は鉄状咬合で、咬耗度はBrocaの2度、風習的抜歯を思わせる所見は見られない。なお歯式は次のとおりである。

$\bigcirc \times \times \bigcirc \bigcirc$	$\bigcirc \times I_1$	$\bigcirc \bigcirc C P_1 \times \times \times$	$(\bigcirc \text{歯槽開放} \times \text{歯槽閉鎖})$
$M_s M_s M_1 P_2 P_1 C I_2 \bigcirc$	$\bigcirc I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3$	$\bullet \text{馬齒}$	

(3) 9号人骨(男性、壮年)

頭蓋骨

脳頭蓋のうち右側の頭頂骨、側頭骨を欠き、前頭骨の右側に破損があり、顔面頭蓋では右側の頸骨を欠如し、上顎骨に破損が見られる。

脳頭蓋では縫合が密で、外面では瘻着が見られない。前頭部はやや膨らんでいるが、乳様突起の大きさは中等度、外後頭隆起は僅かに突出している。

頭骨最大長は180mmで短かく、最大幅は(145mm)、バジオン・ブレグマ高は(136mm)で、これらの主径から示数値を求めるとき、頭骨長幅示数が(80.56)、長高示数が(75.56)、幅高示数が(93.79)となり、顎型としてはそれぞれbrachy-、hypsi-、metriokran(短一、高一、中頭)に属している。

顔面頭蓋では眉間から眉上弓にかけて僅かに隆起し、鼻根部は比較的広いが、隆起は著明でない。

顔高は111mm、上顎高は68mmであるが、幅径の計測ができないので、示数値の算出はできない。高径は大き

いものではないが、幅径も観察した限りでは狭いようであり、顎型としては強い低・広顎性はないものと推測される。また眼窓示数は左側で 80.95、鼻示数は 51.92 となっており、それぞれ mesokonch (中眼窓) chamaerrhin (低鼻) に属しているが、示数側からみると、8号人骨の場合と比べると眼窓および鼻部の形態も顎面のそれに類似しているようである。顎面角では全側面角、鼻側面角、歯槽側面角がいずれも 83°で、突顎性は見られない。

次いで鼻根部の計測では前眼窓間幅 ($mf - mf$) が 19.0mm、横弧長 ($mf - mf$) が 22.0mm で、彎曲示数は 86.36 となり、また前頭 突起水平傾斜角は 103° であった。

下顎骨は余り大きくないが、骨体は頑丈で厚い。下顎枝も聳立しているが、幅径は高径に比して広い傾向はなく、下顎切痕も深い。

歯は上・下顎共に全歯が揃っており、鍼状咬合で、咬耗度は弱く Broca の 0 度～1 度である。

2) 四肢骨

四肢・軀幹骨の保存はよくないが、そのうちでは右側の大脛骨がほぼ全長にわたって残っていた。

大脛骨は比較的長く、最大長が (422mm)、全長が (418mm) で、骨体中央周が 87mm である。したがって長厚示数は 20.81 となる。また骨体中央の矢状径は 29mm、横径は 25mm で、断面示数は 116.00 であるが、とくに著明な柱状形成の傾向は見られない。

Pearson の公式より身長推定値を求めるとき、160.64cm であった。

(4) 10号人骨 (男性、熟年)

頭蓋骨

脛頭蓋のうち左右頭頂骨の後縁近くより後側全体が欠如しているが、顎面頭蓋はよく保存されている。

脛頭蓋では縫合が密で、外面でも矢状縫合には疵者が見られる。前頭部の膨隆は弱く、乳様突起の発達もよい。

頭骨最大長は計測できないが、最大幅は 146mm で、観察した限りでは短頭に傾いているものと推測される。

顎面頭蓋では、眉間より眉上弓にかけて隆起している。鼻根部は比較的広いが、隆起度は弱い。

額高は 114mm、上顎高は 64mm で、頬骨弓幅が 139mm、中顎幅が 99mm であり、幅径に比して高径がかなり低い。これらから示数值を求めるとき、Kollman の顎示数が 82.01、上顎示数が 46.04 となり、Virchow の顎示数は 115.15、上顎示数は 64.65 であり、顎型としてはそれぞれ euryprosop (短顎)、eurygen (短上顎) あるいは chamaeprosop (低顎)、hyperchamaeprosop (過低顎) に属している。また眼窓示数は右側が 69.77、左側が 73.81、鼻示数は 52.00 となり、それぞれ chamaekonch (低眼窓)、chamaerrhin (低鼻) に属している。次いで顎面角では全側面角が 83°、鼻側面角が 85° で、歯槽側面角は 78° で、著明な突顎性は見られない。

鼻根部の計測では前眼窓間幅 ($mf - mf$) が 18.4mm、横弧長 ($mf - mf$) が 21.0mm で、彎曲示数は 87.62、また前頭突起水平傾斜角は 96° であった。

下顎骨は大きさは中等度、骨体は頑丈である。下顎枝は後方に傾き、高径の割りに幅径は小さく、下顎切痕も深い。

歯は鉗子状咬合で咬耗度がひどく、Broca の 3 度位で、とくに下顎左側の第 1 大臼歯は遠心・頬側に

向って過耗していた。風習的抜歯の痕は見られない。なお歯式は次のとおりである。

$\text{O MsM}_1\text{P}_2\text{P}_1\text{C I}_2\text{I}_1$	$\text{I}_1\text{I}_2\text{CP}_1\text{P}_2\text{M}_1\text{O}\times$	$\text{I}_1\text{I}_2\text{CP}_1\text{P}_2\text{M}_1\times\times$	(○歯槽開放 ×歯槽閉鎖) ▲過 細
$\text{MsM}_2\text{M}_1\text{P}_2\text{P}_1\text{C I}_2\text{I}_1$	$\text{I}_1\text{I}_2\text{CP}_1\text{P}_2\text{M}_1$		

総 括

- 大森地下式古墳群のF地区より出土した人骨の頭蓋諸径は概して大きく、3例（男性2、女性1）に短頭性がうかがわれたが、男性骨1例（8号）のみは長頭の傾向が推測されるものであった。なお3主径の計測可能な男性骨1例の頭型は brachy-、hypsio-、metriokran（短一、高一、中頭）に属していた。
- 顔面頭蓋については、幅径の割りに高径が低く、低・広顔の傾向が強く現われていたが、男性骨の1例（9号）のみはその傾向が弱いものと推測された。
- 眼窓および鼻部の形態は顎型に相応したものであるが、眼窓型は chamaekonch（低眼窓）～mesokonch（中眼窓）に、また鼻型は chamaerrhin（低鼻）に属している。
- 著明な突頸の傾向は認められない。
- 鼻根部の幅は広いが、隆起は弱く、全体として扁平な感じであり、前頭突起水平傾斜角も大きい値を示している。
- 下顎骨は大きさも厚さも中等度であるが、年令の割りに下顎枝が後方に傾いているのが目だっている。
- 歯は鉄状咬合が3例（男性2、女性1）で、鉗子状咬合が1例（男性）で、風習的抜歯は認められない。また男性骨のうち下顎左側の第1大臼歯に遠心・類側に向って過耗した1例が見られた。
- 大腿骨は比較的長く、男性例では断面示数が多少大きいが、強い柱状形成はなく、また女性例では骨体が丸味をおびたものである。
- Pearson の公式を用いて、身長推定値を算出すると、男性例（9号）では 160.64cm、女性例（7号）では 152.59cm であった。
- 以上要するに、大森地下式古墳出土の人骨は短頭かつ低顔の傾向が強く、比較的高身と思われるが、4個の頭蓋骨のうちには長頭性が推測できる1例も見られた。

著者は灰塚地下式古墳人骨についての小報⁴⁾（1973）で、城の報告⁵⁾（1938）および島・寺門の報告（1957）に見られる古墳時代人骨よりも強い低・広顔性のあることを指摘したが、頭型あるいは身長などを考え合わせるとき必ずしも単純なものではなく、今後さらに資料の収集と共に充分なる検討が必要であると思われる。

いずれにしても地下式古墳出土の古墳時代人骨の研究は地下式古墳の考古学的解明と共に誠に興味深い課題であると信じている。

（掲筆するに当たり、研究の機会を与えていただいた宮崎県教育委員会ご当局に対して感謝の意を表します。）

文 献

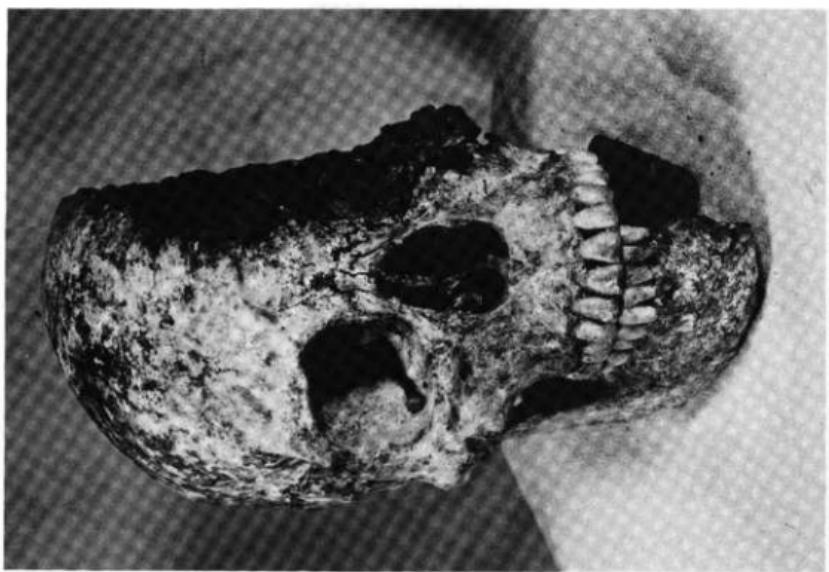
- Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie Bd.I, Gustav Verlag, Stuttgart.

- 2) 鈴木尚、1952：石器時代より現代に至る日本人鼻根部形態の時間的推移について（予報）日本人類学会・民族学協会連合大会第7回記事：83—87。
- 3) 鈴木尚、1963：日本人の骨、岩波書店、東京。
- 4) 内藤芳篤、1973：灰塚地下式横穴人骨、宮崎県教育委員会編、灰塚遺跡：72—77。
- 5) 城一郎、1938：古墳時代日本人人骨の人類学的研究、人類学輯報、第1輯：1—437。
- 6) 烏五郎、寺門之隆、1957：近畿地方古墳時代人頭骨について（略報）、人類学雑誌、66：57—64。

表1 頭蓋骨の計測値

Martin No.	項目	8号(♂)	9号(♂)	10号(♂)	7号(♀)
1	頭骨最大長	190	180		177
8	頭骨最大幅		(145)	146	
17	バジョン・ブレグマ高	141	(136)		130
8/1	頭骨長幅示数		(80.56)		
17/1	頭骨長高示数	74.21	(75.56)		
17/8	頭骨幅高示数		(93.79)		73.45
45	頬骨弓幅			139	
46	中顎幅	108		99	
47	顎高	120	111	114	107
48	上顎高	(67)	68	64	60
47/45	顎示数(K.)			82.01	
48/45	上顎示数(K.)			46.04	
47/46	顎示数(V.)	111.11		115.15	
48/46	上顎示数(V.)	(62.04)		64.65	
51	眼窩幅(r)	47		43	40
△	△(l)	47	42	42	
52	眼窩高(r)	33		30	31
△	△(l)	33	34	31	
52/51	眼窩示数(r)	70.21		69.77	77.50
△	△(l)	70.21	60.95	73.81	
54	鼻幅	27	27	26	24
55	鼻高	48	52	50	44
54/55	鼻示数	56.25	51.92	52.00	54.55
72	全側面角	(84)	83	83	84
73	鼻側面角	88	83	85	89
74	齒槽側面角	(75)	83	78	71
50	前眼窩闊幅	20.6	19.0	18.4	19.5
a	鼻根横弧長	23.0	22.0	21.0	22.0
50/a	鼻根彎曲示数	89.57	86.36	87.62	88.64
b	前頭突起水平傾斜角	93	103	98	108

7号人骨 (女性・壮年)



8号人骨 (男性・壮年)





9号人骨 (男性・壮年)



10号人骨 (男性・壮年)

2 人骨の埋葬方法について

坂田邦洋

大荻地区における埋蔵文化財の調査において、人骨の発掘を担当したのは、昭和48年12月のA-C地区の調査と、49年12月のF地区における調査であった。その後、さらにF地区において地下式古墳が2基（10,11号）発掘され、その内の1基（10号）から人骨が1体発見されている。この人骨は現在野尻町において保管しており、いずれ、調査の機会を持ちたい。

第1表 大荻A-C地区地下式古墳出土の人骨一覧

人骨番号	古墳番号	性	年齢	埋葬姿勢	その他
1号人骨	2号墳	男性	老年	仰臥伸展葬	
2号人骨	3号墳	女性	壮年	タ	頭蓋丹
3号タ	タ	男性	老年	タ	タ
4号タ	タ	不明	小兒	タ	タ
5号タ	タ	女性	老年	タ	タ
6号タ	タ	男性	老年	タ	タ
7号タ	4号墳	男性	老年	タ	
8号タ	5号墳	不明	小兒	タ	
9号タ	タ	タ	不明	不明	
10号タ	タ	タ	タ	不明	

第2表 大荻F地区地下式古墳出土の人骨一覧

人骨番号	古墳番号	性	年齢	埋葬姿勢	その他
1号人骨	3号墳	不明	不明	仰臥伸展葬	
2号タ	タ	女性	タ	タ	
3号人骨	4号墳	不明	タ	タ	全身丹
4号タ	タ	タ	タ	タ	頭蓋丹
5号人骨	6号墳	女性	タ	タ	
6号タ	タ	タ	タ	タ	頭蓋丹
7号人骨	7号墳	タ	壮年	タ	
8号タ	タ	男性	タ	タ	頭蓋丹
9号人骨	9号墳	タ	タ	タ	
10号人骨	5号墳	タ	老年	タ	全身丹
11号人骨	1号墳	不明	不明	骨片のみ	
12号人骨	8号墳	不明	不明	仰臥伸展葬？	
13号人骨	2号墳	タ	タ	不明	
14号人骨	10号墳			未調査	

A-C地区における調査は、昭和48年12月に行なわれ、地下式古墳が5基発掘され、そのうち2号墳から1体と3号墳から5体、4号墳から1体、それに5号墳から3体、計10体の人骨が発見された（第1表）。これらの人骨に関する調査成績については、すでに宮崎県考古学会において発表を終えているが、後日さらに詳細な報告を行ないたい。

今回報告しようとする人骨は、昭和49年12月に行なわれたF地区における地下式古墳から発見された分である（第2表）。

F地区からは、第1号から第11号まで11基の地下式古墳が発掘され、計14体の人骨が発見された。人骨は取り上げの際第1号から第14まで、古墳の番号とは関係なく骨番号をつけた。なお振りに第14号人骨とでも呼ぶべき10号墳から出土した人骨は、現在野尻町に保管中であり、未調査である。後日調査の機会を持ち、第14号人骨として整理の予定である。

F地区における第1号から第9号までの9基の地下式古墳から発見された人骨の一覧を第2表に示した。

第2表を参考にしながら、各人骨の埋葬姿勢を中心に述べてみたい。

埋葬にあたって、方位の問題がある。砂丘における土壙墓のような場合は人骨の姿勢から方位を出す場合が通例であるけれども、地下式古墳の場合、玄室の方向によって埋葬方向も自然にきまってしまう。そのため、人骨そのものの方位よりも、玄室あるいは主軸の方向が優先するようにおもわれる。このため、頭位の方向は、堅穴の前室に立ち、玄室の方を向いて頭の位置が右側にあるか左側にあるかにわけてみた。

第1号墳出土の人骨

第1号墳からは第11号人骨が発見された。第11号人骨は頭蓋骨のみで、しかも粉末状になっており、取り上げることができなかった。頭蓋骨が玄室の中央よりやや右寄りにあり、その頭蓋の状況から判断すれば、身体は羨道に近い玄室の左側の方へ伸ばしていたものと推察される。

第2号墳出土の人骨

第2号墳からは第13号人骨が発見された。第13号人骨は玄室の奥壁寄りに右大腿骨の一部が粉末状になつて出た。大腿骨の位置から推定して、頭部は玄室の右側にあったものと推察される。仰臥伸展葬ではなかつたかと思われる。

第3号墳

第3号墳からは第1号人骨と第2号人骨が発見された。第1号人骨を埋葬の後、第2号人骨を逆方向から追葬していた。両人骨の下部には腐蝕した木材が長方形に広がつておらず、おそらく木棺の中に埋葬していたものと思われる。木材は人骨の上は覆つていなかつた。

したがつて、第1,2号人骨の埋葬にあたつて次のことが考えられる。第1号人骨の埋葬のあと第2号人骨を埋葬していることは事実であるが、1号人骨を入れた木棺を埋葬したあと木棺を使用しない2号人骨を追葬したものなのか、あるいは1個の木棺の中に1号人骨と2号人骨を納棺したものなのか、いずれかであろう。

第1号人骨の頭蓋は右側に少し傾き、側頭部が下になつていていた。そして左右の耳介付近から銀環が1個づつ発見された。おそらく耳介に銀環を着装の状態で埋葬したものと考えられる。また、第1号人骨の

場合、左前腕骨をイモ貝製の貝輪が1個通っていた。貝輪もまた着装の状態で埋葬したものである。右胸壁外側部にくつづいて短剣が1本あった。これは明らかに1号人骨の副葬品である。

2号人骨の場合、頭蓋はほぼ正常な状態で発見された。1号人骨と同じように、両側の耳介部付近から銀環が1個づつ発見された、おそらく着装した状態で埋葬したものであろう。頭蓋骨の前頭部から顔面にかけて丹が附着していた。鮮明な朱色なのであるいは水銀朱ではないだろうか。おそらく、埋葬時前頭部に丹の固まりを載せていたものが、腐敗とともにしだいに骨にしみ込んだものと考えられる。頭蓋の上部に馬具一式、鉄鎌、劍等があったが、おそらく2号人骨の副葬品と思われる。

第4号墳

第4号骨からは第3号人骨と第4号人骨が発見された。第3号人骨を埋葬の後、第4号人骨を逆方向から追葬していた。兩人骨とも仰臥伸展葬であったが、4号人骨の場合、ごく軽く膝関節を屈していた。

第3号人骨は上肢が腐敗してしまっていたが、頭蓋骨と下半身が残っていた。3号人骨の場合特筆事項として丹の問題がある。上肢をはじめ全身の骨格の周囲に丹が広がり、骨にも附着していた。骨質が腐敗してしまった上肢付近も骨の位置に丹が広がっていた。両側の下肢骨の間（股間）には丹がみられない。このことは、衣類の上からつみこむように丹を塗った（のせた）とは考えられず、身体に直接丹を塗りつけたためと思われる。頭蓋骨のみに丹（朱）が附着した例は、地下式古墳出土の人骨には普通に見られるが、3号人骨のように全身の例は極めて珍れである。

第4号人骨は3号のあと追葬したもので、やはり仰臥伸展葬である。4号人骨の場合、頭蓋に丹が附着しているほかは、副葬品もなく、特筆すべき事項はみられない。

第5号墳

第5号墳からは第10号人骨が発見された。第10号人骨は全身に丹がみられ、第3号人骨と共に貴重な埋葬例である。

10号人骨は頭位を右側においた仰臥伸展葬であった。上、下肢ともに直直に伸ばしていた。頭蓋をはじめ全身の骨格にそって、丹が広がり、骨にも附着していた。第3号人骨と同じように、身体に直接丹を塗りつけていた（載せた）ものと推察される。なお、副葬品としては、左前腕付近に鉄鎌があった。

第6号墳

第6号墳からは第5号人骨と第6号人骨が発見された。兩人骨ともに頭を玄室の右側に置いた仰臥伸展葬であった。5号と6号人骨は、玄室の対角線上に交鎖しておかれていた。玄室が小さいために（短かい）対角線を利用したものと思われる。

玄室の天井が調査時点にこわれたため、人骨も破損してしまった。このため、人骨は小片となって、計測にたえることができなかった。5号人骨の頭蓋骨には丹はみられないが、6号人骨には前頭部に丹が附着していた。

第7号墳

第7号墳の場合は第7号人骨のあとで第8号人骨が追葬されたものと思われる。第7号人骨は頭を左側に置き、奥壁に接するように安置してあった。左右の上肢は軽く屈して骨盤付近におき、下肢は軽く屈していた。膝を少し立てた仰臥伸展葬である。顔面部に丹はみられない。またみるべき副葬品もたな

い。

第8号人骨は頭を右側に置き、 義道近くに下肢を伸ばした仰臥伸展葬であった。 顔面部に丹がみられる。 なお、 8号人骨の副葬としては蛇行剣1、 剣2などがあった。

第8号墳

第8号墳からは第12号人骨が1体発見された。 人骨の保存は悪く、 頭蓋骨の一部を取り上げるのがやっとだった。 おそらく仰臥伸展葬とおもわれる。 顔面部に丹がついていたかどうかわからない。

第9号墳

第9号墳からは、 第9号人骨が1体発見された。 第9号人骨は極めて保存が良好であった。 上・下肢を伸ばした仰臥伸展葬であった。 丹はついていなかった。 副葬品としては右肩部から短剣が1本発見された。

大蔵F地区では11基の地下式古墳が発見され、 そのうち第11号墳を除く10基の古墳から計14体の人骨が発見された。

人骨の埋葬姿勢は、 それぞれ多少の違いはみられるけれども、 すべて上肢と下肢を伸ばした仰臥伸展葬であった。 仰臥伸展葬は地下式古墳の埋葬姿勢としては一般的なものである。

地下式古墳出土の人骨の場合、 頭蓋（前頭部・顔面部）に丹が附着していることは普通よくみられることがある。 丹はその附着の状態からみてある程度の大きさの固型のものを前頭部あるいは顔面部にのせていたものが、 自然にしみこんだものと考えられる。 人骨の付近からしばしば丹のかたまりを発見することができた。

このように、 頭蓋骨の一部に丹が付着していることは、 地下式古墳の人骨の場合一般的なことであり、 大蔵F地区の人骨も例外でなかった。 ただ、 大蔵地下式古墳の場合、 第4号（第3号人骨）と第5号墳（第10号人骨）において全身に丹が附着していたことは注目しなければならない。 丹は、 全身の骨と骨そって散布していたので、 これは明らかに丹を全身に塗って埋葬したことがわかる。 そして腐敗とともに骨や、 骨にそって丹が散布したものと考えられる。

最後に第3号墳の木棺について考えてみたい。 一般的な地下式古墳では、 その構造から考えて、 尸体を何か容器に入れて穴の中に持ち込むことはできない。 せいぜい屍体を何かで包んで持ち込む程度であろう。 地下式古墳の人骨が仰臥伸展葬を一般的な埋葬形式としているのもそのためと考えられる。 ところが、 第3号墳では木棺が使用されていた。 木棺の構造についてはわからないが、 第3号墳は一般的な形態の構造だったので注目すべき所見であろう。

地下式古墳の人骨は、 床面に接した部分は必ずといってよいほど腐敗てしまっている。 このため、 四肢骨の保存はよくない。 しかし頭蓋骨のように表面積の大きい骨は比較的保存がよい、 このため、 地下式古墳の人骨は頭蓋骨だけが残っている場合が多い。 しかしよく観察すれば四肢骨をはじめ軀幹骨が薄く残っており、 一般に仰臥伸展葬である。 従来、 地下式古墳の人骨は頭蓋骨だけがよく保存されているので洗骨葬などが考えられてきたが、 実際は上記のような保存条件のために頭蓋骨だけが比較的保存が良好なためであった。 このことは、 下顎が正常な状態にあり、 埋葬の後人為的に動かされていないことからも証明できる。

第5章 結語

以上野尻町三ヶ野山の大荻遺跡の発掘調査の結果について記したが、この遺跡は土墳墓群と住居址と地下式古墳群との三種の遺跡が存在する興味ある遺跡であるが土墳墓群においては、從来知られていなかった土墳墓の上部構造が明らかにされたばかりではなく、第4号土墳からは玻璃製の小玉580個、第5号土墳からは貝釧第6号土墳からは玻璃製の小玉60個が発見された。この三基の土墳に葬られていた人々は、ここに17基の土墳墓に葬られていた人々の首長的、または族長的な人々であろうと思われる。これと同じような遺跡は前に小林市大字南西方字今石の通称池の原で、同所梯鉄男氏^{かげほし}がその所有の山をブルトーザーで開墾中、昭和46年2月27日に6基発見し、その中から直径2mmで中に孔のある玉約40個を発見したがあり、筆者は県教育委員会の委嘱により加藤成夫主事とともに現場に行き、土墳の底から数個の小玉を発見したが、全くこと同じ遺跡で同市教育委員会に同所から出た土器が置いてあったが、それも重弧文の長頸瓶であった。だから霧島山の東北麓地方にはなおこのような遺跡が存在するものと思われる。それで土墳墓は庶民の墓で遺物はないと考えられた從来の考え方、明らかに誤りであることが立証された。このことは、今回の調査がわが国の学界に貢献した最も大きい収穫であった。

住居址については、炭化した屋根の棟の遺存によって、古代家屋の復原に大きい資料を提供したこと問題となるのは、この炭化は棟が火災で焼けて炭化したのか、それとも長く地下に埋っていたために炭化したのであるかということである。前に述べた山口市平川町の山口大学敷地で昭和42年4月に発見された方形の堅穴住居の梁や樋などは火災で焼けて炭化したものと報ぜられているが、なるほどここで梁が焼け残っていて天井部の棟はなかった。古代の堅穴住居は円錐形または方錐形をなしているから、火災の場合最も盛んに燃えるのは屋根の天井部で、ここに棟や萱などが集中しているから、最もよく燃えるわけである。今回調査した家のように、天井部の棟が残っている場合は火災ではないと見るのが妥当ではないかと思う。故和島誠一氏は繩文、弥生、古墳時代の堅穴を250軒近く掘り、その中には火災をうけたと思われる堅穴が10数軒あったと、同氏の著「堅穴の火事」①に書いていられるが、同氏によれば火災を受けた堅穴は堆積土や土床が焼けているとあるがわれわれが調査した住居址には焼土ではなく、灰も甚少なかった。それでこの堅穴は火災を受けたものとは考えられない。それにしても、古代住居址復原に最も重要な屋根組みが炭化して見出されたことは、また本調査の重要な収穫であった。

しかし住居址の調査は、ただ1軒の堅穴を調査するだけでは、大した意義はないということは学界の常識であって、住居址はこれを部落として把握せねばならないものなのである。今回発掘の住居址は、たまたま屋根の棟が炭化して残っていたということで、発掘の意義はあったが、このような住居址があったことは、まだほかに多くの住居址があることを示すもので、それらを発掘すべきであったが、費用の制限からそれが出来なかつたことは、返す返すも残念なことで、他にまだこれに匹敵する住居址があつたかも知れないのである。この事は今後のこの様な調査の在り方に大きな反省を促がすものであった。

地下式古墳群においては、木棺の発見という偉大な収穫が挙げられたし、人骨測定研究においては長崎大学医学部の内藤芳篤教授および同大学の坂田邦洋氏によって貴重な研究が寄せられ、長身160cmを超

える人骨の発見や、全人骨に朱をついている2体の人骨の発見など、貴重な報告があり、この両氏の御報告によって本報告書に千金の重みを加えて頂いたことに對し、心から感謝の意を表する次第である。

次にこれらの遺跡の係わり合いについて一言したい。これら3種の遺跡の所在については、第1図に示した通りであるが、これを見て感することは、土壙墓群と竪穴式住居址とは、ほぼ同じような弥生時代末期のものと考えられるが、住居址のあるE地区は、土壙墓や地下式古墳が群在したD区、F区とはかなり離れており、E地区には地下式古墳も、土壙墓も、全然発見されなかったという事実は、何を示すのであろうか、E地区もD、F地区と同じ接続した台地であるに係わらず、このような異いがあることは、E地区からD地区に至る地方には、竪穴住居址がまだ多く残っていたのではないかと私は考えるのである。この地区における表土の堆積はかなり深く、ローム層までは1m以上に及んでいる。従ってこれを貧弱な人力で掘ることはなかなか難事業であるが、ブルトーザーを雇うだけの予算がなかったのである。それでこの作業を省略せざるを得なかつたのである。

次ぎに大きい問題はD地区に17基の土壙墓があり、それから東方に70mぐらい離れたところに地下式古墳群があるという事実である。このことはD地区から道路を越えて西方30m内外のところに、地下式古墳群（これに就いては次号報告書に記す）があったこととも関連するわけであるが、このように土壙墓群のあるD地区には1基の地下式古墳もなく、地下式古墳群のあるF地区には2基の土壙墓はあったが、地下式古墳は12基（前発掘の1基を加える）を数えた事実、これを大局的に見るならば、年代的に考えて土壙墓の方が、地下式古墳より古いものと考えられるけれども、地下式古墳の經營者が土壙墓のある所を敬遠して墓を作っていることを考へざるを得ない。このことは地下式古墳が作られた時代には土壙墓のあることが、表面上明らかであったことを示すものと考えられる。

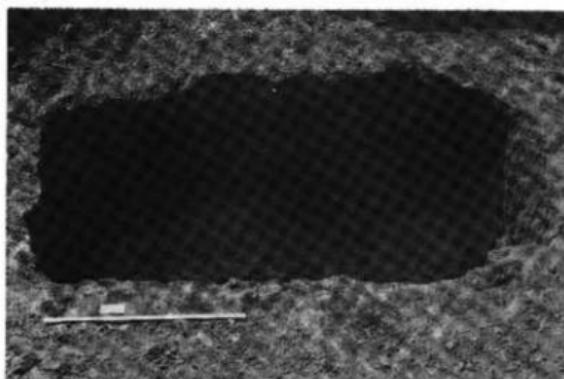
土壙墓は前に説いたごとく、その上に巨大な土器を載せていましたから、恐らくはこれらの土器は、地下式古墳が經營された時代には地表に出ていたものと思われる。現にブルトーザーで20cm内外の表土を排除した時に土器に触れたのである。ただ何らかの事情で、土器が失われていたために、その付近に地下式古墳群が作られたことはあったわけで、F区の土壙墓はその例で、ここからは弥生式土器は発見されなかつた。そうすると、この地方の地下式古墳は土壙墳より新しい時代のものではあるが、それより余り遠い時代のものではない、少なくとも土壙墓の存在したことが知られていた時代に作られたものであろうという見解が妥当のように思われる。そしてこれを支える資料としては、蛇行剣の出土を重視したいと思う。もちろんこのことは今後の研究に俟つべきものであるが、今回の調査が新発見の資料を多く提供したことは、調査に参加した1人として喜びに堪えない。

（石川 恒太郎）

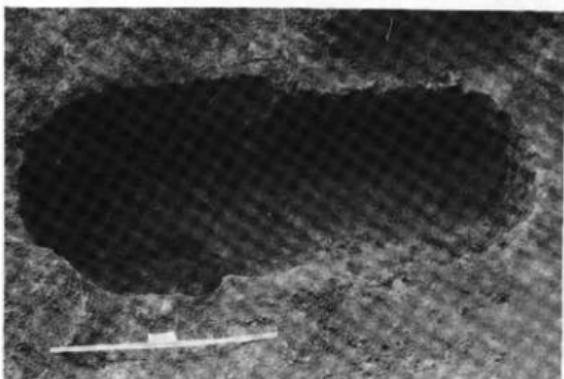
註①和島誠一氏「竪穴の火事」「古代史講座月報」1.1961年10月。

図

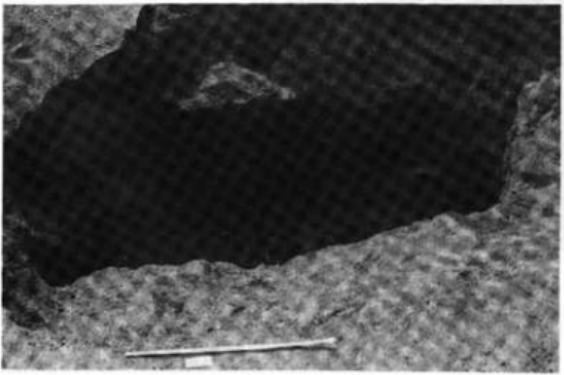
版



1号土壤基



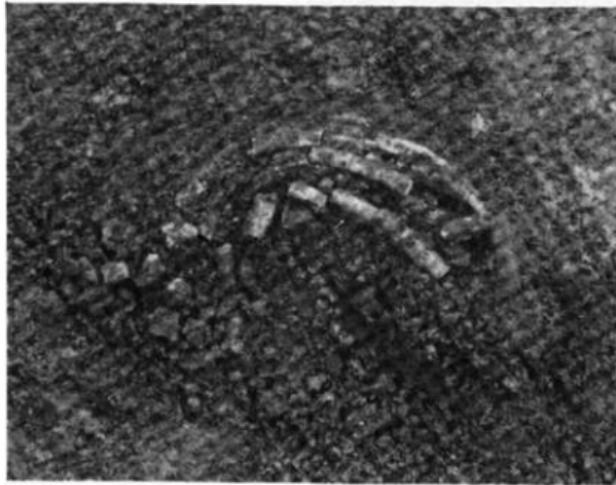
2号土壤基



3号土壤基



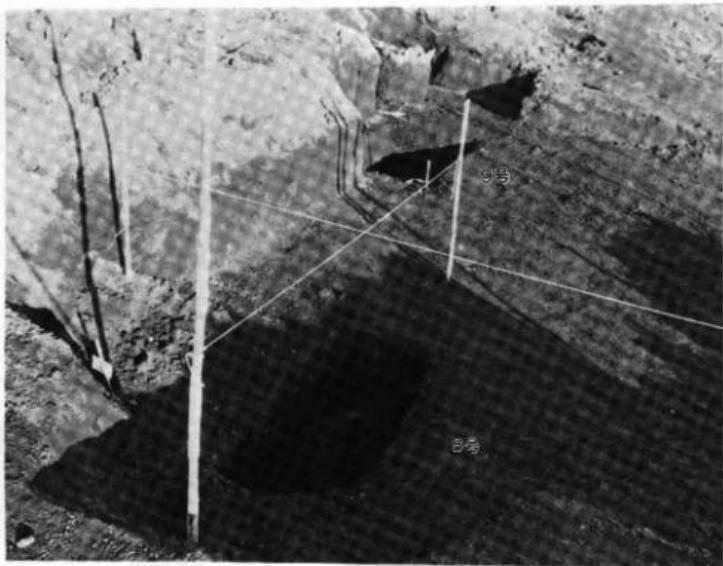
5号土壙墓



土壙墓内の貝輪の出土状況



発掘調査の状況



8号土壤墓と9号土壤墓



10号土壤墓



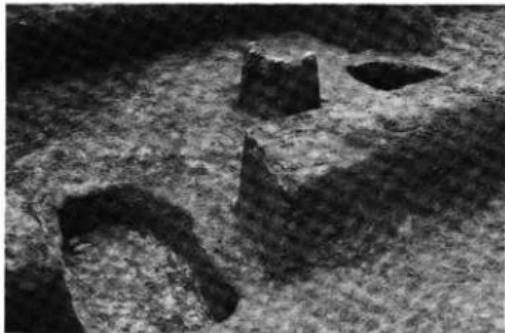
11号土壤墓



12号土壤墓

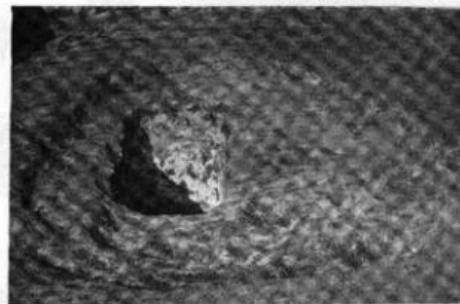


13号土壤墓



13号と14号の土壤墓

15号土壤墓



16号土壤墓

17号土壤墓

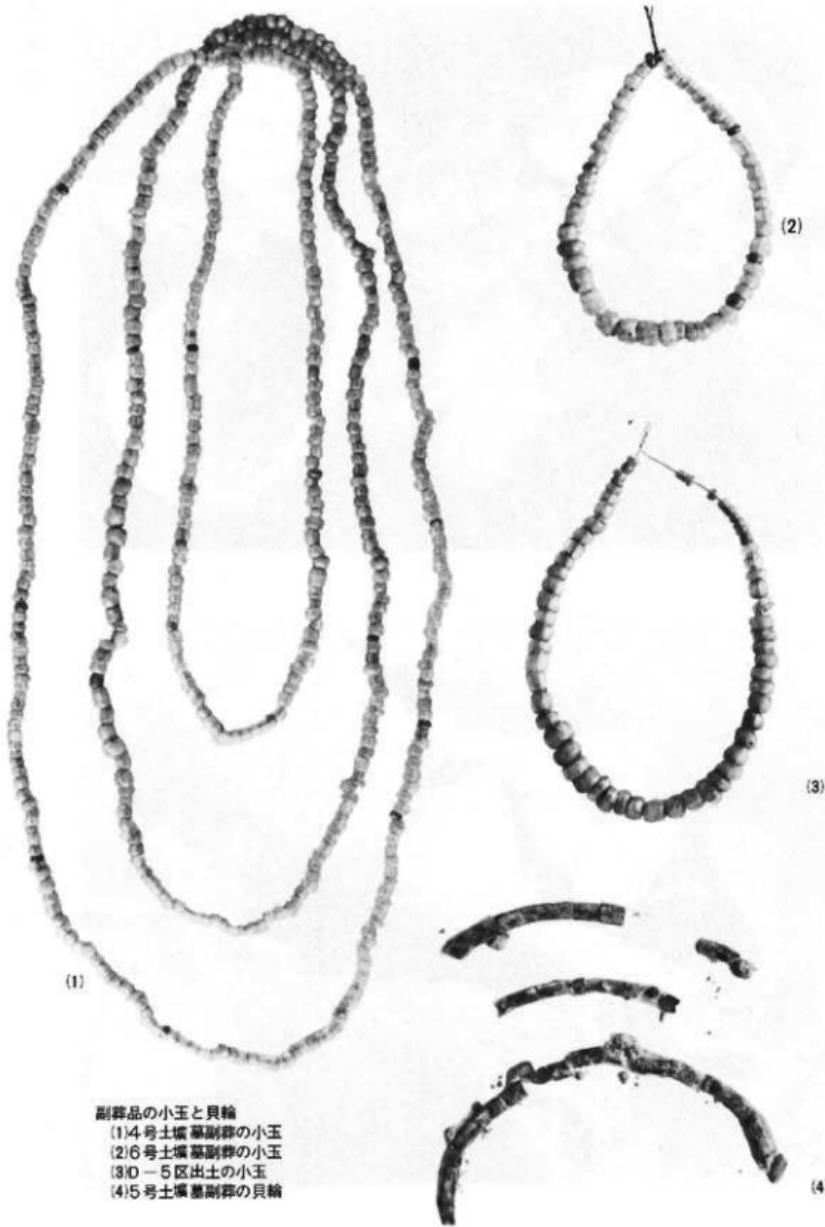




4号土壙墓の
供獻土器出土状況



5号墳の供献土器出土状況



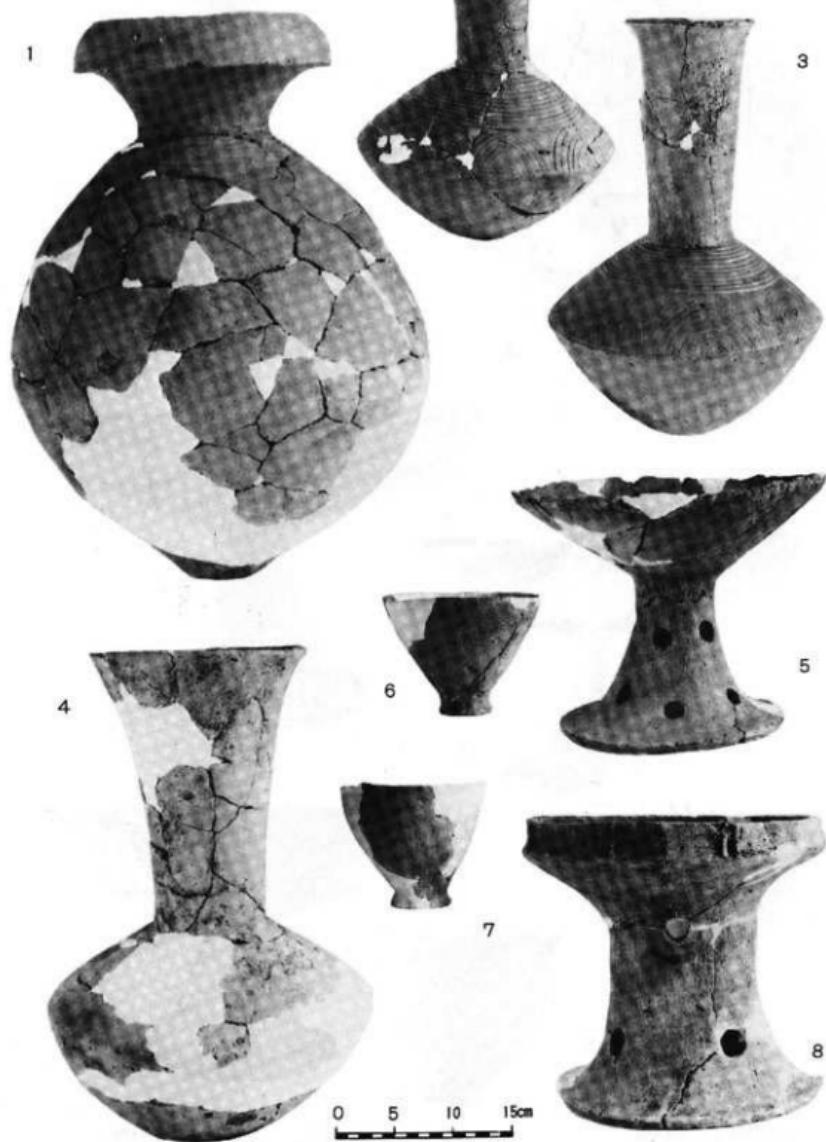
副葬品の小玉と貝輪

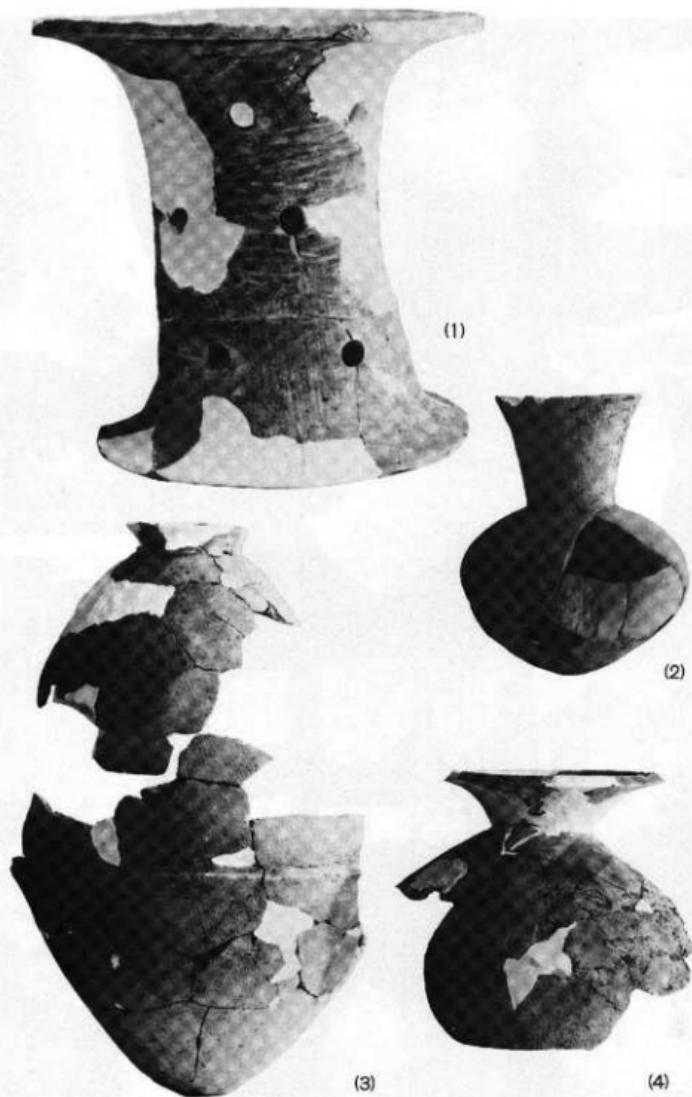
- (1)4号土壙墓副葬の小玉
- (2)6号土壙墓副葬の小玉
- (3)D-5区出土の小玉
- (4)5号土壙墓副葬の貝輪



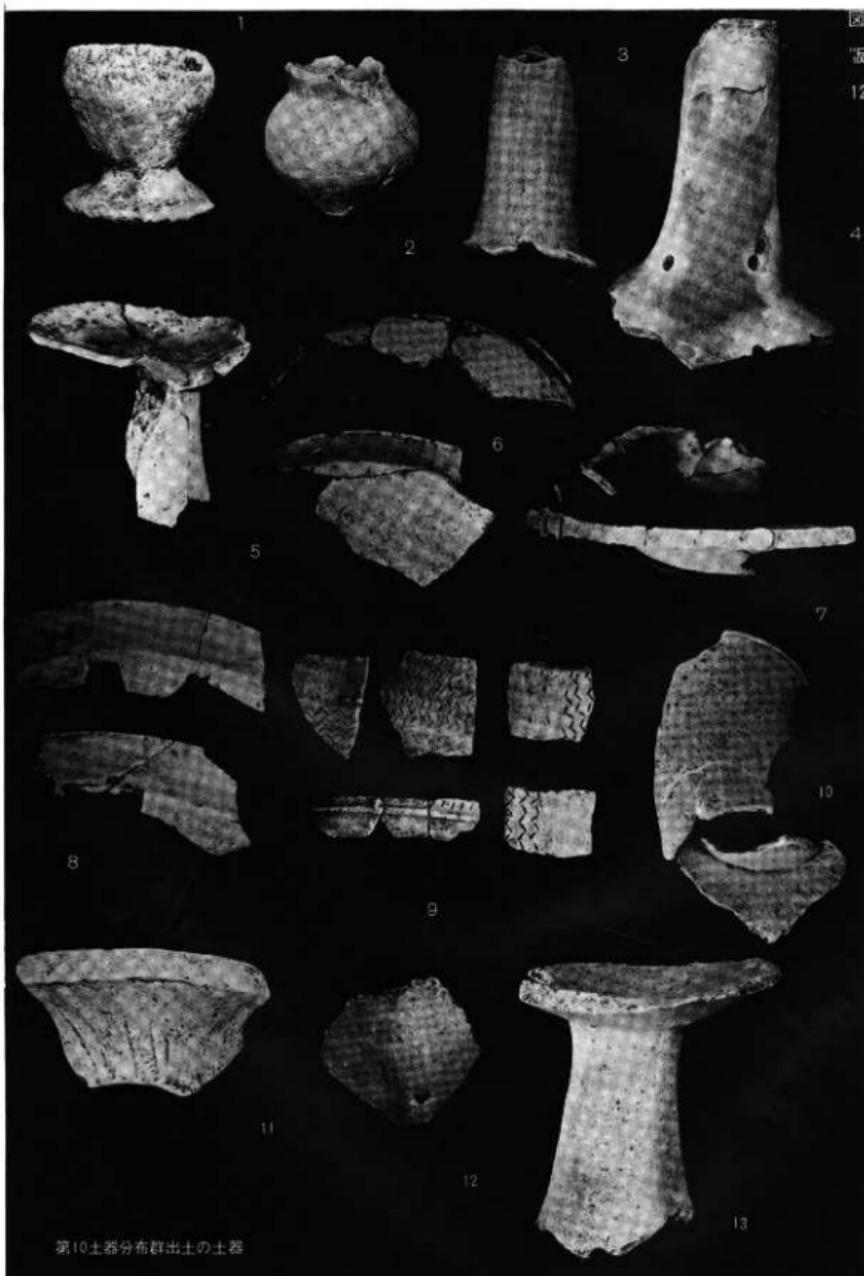
4号土壙基の供獻土器

0 5 10 15cm

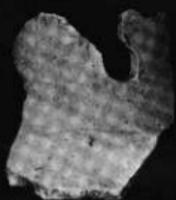




(1) 第2土器群の器台形土器
(2) 第2土器群の壺形土器
(3) 第5土器群の壺形土器
(4) 第8土器群の壺形土器



第10土器分布群出土の土器



14



15

第II土器分布群出土

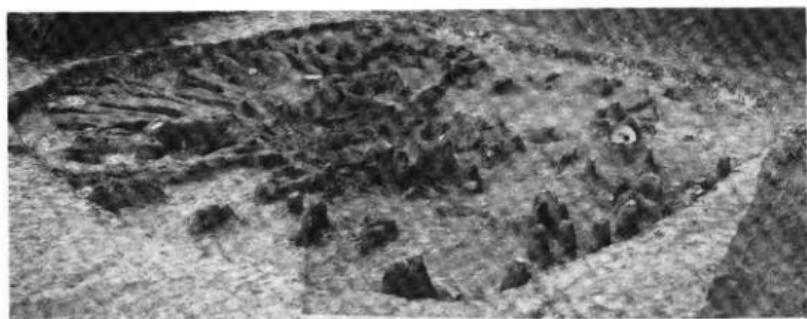


16 10号土壙 基上出土の器台

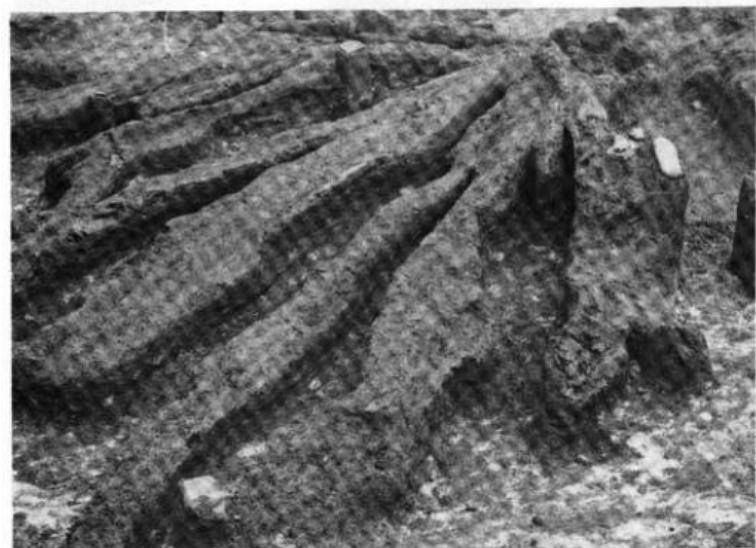


17

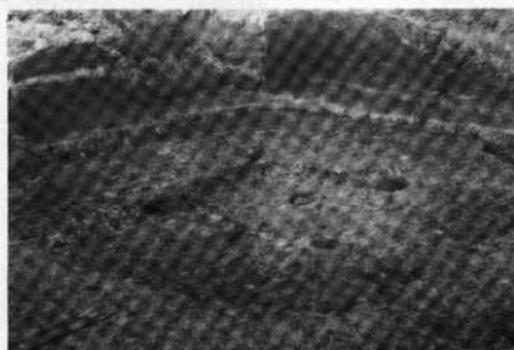
10号土壙墓附近出土



(1)



(2)



(3)

住居址

- (1) 横の遺存状景
- (2) 部分
- (3) 住居址全景



1



2



3



4

住居址出土の土器



地下式横穴第1号



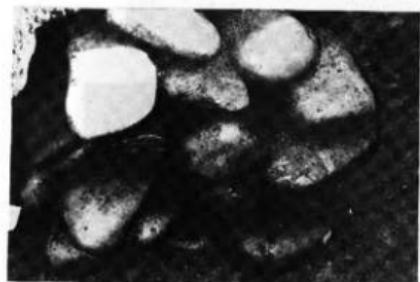
地下式横穴第2号



地下式横穴第3号



3号玄室内の人骨と木棺



地下式横穴第4号閉塞



地下式横穴第5号